

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター調査報告書 第11集

鹿児島大学構内遺跡

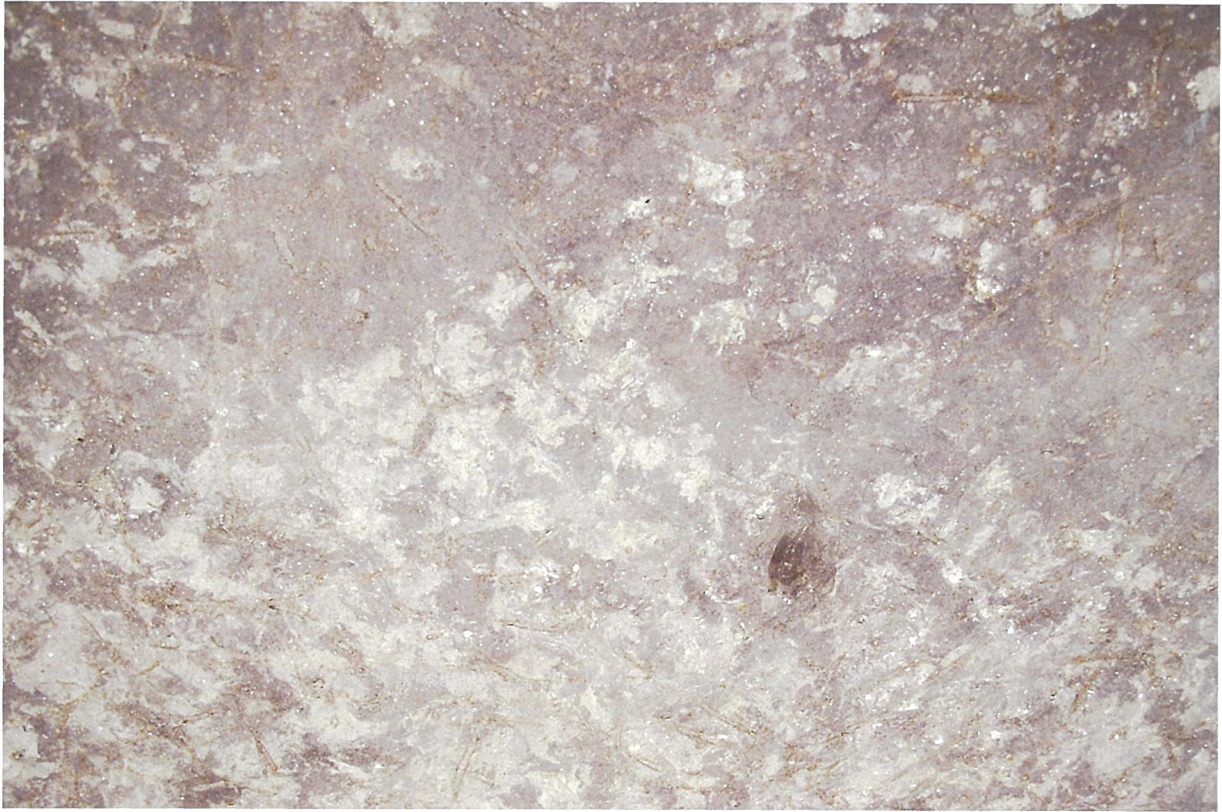
(郡元団地)

J・K-10・11区 (工学部校舎新営工事)

2015年3月

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター

〒890-8580 鹿児島市郡元一丁目21番24号
鹿児島大学
埋蔵文化財調査センター
TEL 099-285-7270
FAX 099-285-7271



弥生時代水田跡関連遺構 足跡状遺構検出状況（10層上面）



縄文時代中期の出土遺物（14層出土）

序 文

鹿児島大学郡元キャンパスには、縄文時代から近代までの、貴重な遺跡が包蔵されていることが鹿児島大学埋蔵文化財調査センターの発掘調査によって明らかにされています。その成果はこれまでに『鹿児島大学埋蔵文化財調査センター年報』や『鹿児島大学埋蔵文化財調査センター調査報告書』によって報告されてきました。

本書は、平成9年度に発掘調査を実施した鹿児島大学構内遺跡郡元団地J・K-10・11区（郡元キャンパス工学部校舎建設工事に伴う発掘調査）の発掘調査報告書です。本調査では、縄文時代中期の包含層や弥生時代中期の水田層や関連遺構を発見いたしました。

発掘調査後20年近く経過して報告書刊行の運びとなりましたが、弥生時代水田遺構については未だ検出例の少ない遺構であり、本書は弥生文化南限地域にあたる本格的な水田稲作農耕の導入の様相を知ることのできる資料となると期待されます。

埋蔵文化財調査センターでは、今後とも文化財保護法に基づいた学内の施設整備事業に伴う埋蔵文化財調査を円滑に進めつつ、その調査報告書を刊行することによって、調査成果を社会に還元できるよう全力を尽くす所存です。重ねて、埋蔵文化財調査室の事業についてのご理解・ご支援をお願い申し上げます次第です。

2015年3月



鹿児島大学埋蔵文化財調査センター長

本田 道輝

例 言

1. 本報告書は、鹿児島大学埋蔵文化財調査室が平成9（1997）年6月から12月にかけて鹿児島大学郡元団地工学部において実施した埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 昭和60（1985）年6月1日の鹿児島大学埋蔵文化財調査室設置以後は、郡元団地では国土座標第2座標系（ $X = -158,200$, $Y = -42,400$ ）を基点として大学構内に一辺50mの方形地区割りを行い、各地点を表示している。本地点はJ・K-10・11区である。
3. 調査時における図面作成・写真撮影は中村直子・鮎川章子が行った。
4. 本書の作成にあたっては、埋蔵文化財調査センターが行った。担当者は以下のとおりである。
遺物実測 中村直子・寒川朋枝・大西聡子・篠原美智子・濱田綾子・東友子
製図 中村・松崎大嗣・吉本美咲
作表 吉本・中村
写真・執筆・編集 中村・吉本・田畑春菜・印南早織・寒川朋枝・新里貴之
5. 本報告の内容について、縄文土器については相美伊久雄氏（志布志市教育委員会）、近世陶磁器については渡辺芳朗氏（鹿児島大学法文学部）の教示を得た。
6. 本書で報告している遺物の保管は、埋蔵文化財調査センターの管理のもと鹿児島大学内にて保管している。

凡 例

1. 昭和 60 年 6 月 1 日の埋蔵文化財調査室の設置を機として、鹿児島大学構内におけるこれからの埋蔵文化財調査室に便であるように、鹿児島大学構内座標を郡元団地と桜ヶ丘団地（旧宇宿団地）とに設定した。郡元団地では、国土座標第 2 座標系（ $X = -158,200$, $Y = -42,400$ ）を基点として一辺 50 m の方形地区割りを行った（Fig.2 参照）。
2. 本報告書におけるレベル高は、すべて海拔を表し、方位は真北方向を示す。
3. 本書の観察表内では、竪穴建物を SK 表示とする。また、本文中の P 表示はピットを示す。
4. 遺物に関しては観察表を作成した。その標記、表現については以下の通りである。
調整：調整名称の前の（ ）は、調整方向を表す。（－）；横位方向，（|）；縦位，（\）；左上がりの斜位，（／）；右上がりの斜位，（？）；方向不明，とした。→は、調整の新旧関係を表す。
色調：『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修）を使用し、この色調に当てはまらないものについては、「～に類似」と表記した。
5. 遺物実測図中、----- は釉の境界ラインを示す。
6. 赤色顔料の塗布範囲は  ，石器類などの磨面は  で図示する。
7. 本文中の遺物番号は通し番号を付し、挿図・図版・遺物観察表と一致している。

抄 録

ふりがな	かごしまだいがくこうないせきこおりもとだんちじゅー・けー・じゅう・じゅういちく こうがくぶこうしゃ							
シリーズ名	鹿児島大学埋蔵文化財調査センター調査報告書 第11集							
書名	鹿児島大学構内遺跡 郡元団地J・K-10・11区（工学部校舎）							
編著者	中村直子・新里貴之・寒川朋枝							
編集機関	鹿児島大学埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒890-8580 鹿児島市郡元一丁目21番24号 Tel 099-285-7270 Fax 099-285-7271							
発行年月日	2015年3月							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査起因
		市町村	遺跡番号					
鹿児島大学構内遺跡郡元団地	鹿児島市郡元一丁目21番24号	4620	1-23-0	31° 34' 11"	130° 32' 33"	年 月 日～ 年 月 日	800	工学部校舎建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
鹿児島大学構内遺跡郡元団地		縄文時代 中期 弥生時代 古墳時代 古代 中世 近世	縄文時代：足跡状遺構 弥生時代：水田関係遺構（足跡状遺構・溝状遺構・ピット・小ピット） 古代：溝	打製石鏃・石匙・磨石・砥石・スクレイパー状石器・縄文土器・弥生土器・古墳時代の土器・土師器・須恵器・青磁・近世陶磁器・煙管				

本文目次

巻頭カラー写真

序 文

例 言

凡 例

抄 録

第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 調査にいたる経緯	1
第3章 調査体制	5
第4章 発掘調査の経過	5
第5章 層位	5
第6章 各層の遺構と出土遺物	10
第1節 1層出土遺物	10
第2節 2層出土遺物	12
第3節 3層出土遺物	12
第4節 4・5層検出遺構・出土遺物	12
1 4層上面検出遺構（SD 1）と出土遺物	12
2 4層出土遺物	12
3 5層出土遺物	18
第5節 6～8層検出遺構, 出土遺物	18
1 6層中検出遺構	18
2 6層出土遺物	18
3 7層出土遺物	24
4 8層上面検出遺構	24
5 8層出土遺物	24
第6節 9・10層検出遺構・出土遺物	24
1 9・10層上面検出遺構	24
2 9・10層出土遺物	33
第7節 11層～13層検出遺構・出土遺物	38
1 11層出土遺物	38
2 13層中検出足跡状遺構	38
3 13層出土遺物	38
第8節 14・15層出土遺物	44
1 14層出土遺物	44
2 15層出土遺物	55
第7章 鹿児島大学構内遺跡 郡元団地J・K-10・11区における自然科学分析	65
第1節 郡元団地J・K-10・11区から出土した木材の樹種同定	65
1. 試料	65
2. 方法	65
3. 結果	65
4. 所見	65

第2節 郡元団地J・K-10・11区における放射性炭素年代測定	66
1. 試料と方法	66
2. 測定結果	66
第8章 まとめ	67
第1節 各層の時期	67
第2節 縄文時代中期の様相	67
第3節 弥生時代の水田遺構	67

挿図目次

Fig. 1 遺跡の位置	2	Fig. 21 9層上面遺構検出状況	28
Fig. 2 調査区の位置	3	Fig. 22 9層上面遺構検出状況（東部）	29
Fig. 3 表土除去後の調査区平面図	4	Fig. 23 9層上面遺構検出状況（西部）	30
Fig. 4 北壁層位断面図	6	Fig. 24 SD3出土遺物	30
Fig. 5 南壁層位断面図	7	Fig. 25 10層上面遺構検出状況	31
Fig. 6 西壁層位断面図	8	Fig. 26 10層上面遺構検出状況（調査区北東部）	
Fig. 7 1層出土遺物	10		32
Fig. 8 2層出土遺物	13	Fig. 27 9・10層上面検出遺構断面図	33
Fig. 9 3層出土遺物	14	Fig. 28 9・10・11層出土遺物	38
Fig. 10 4層上面検出状況	15	Fig. 29 11層以下の調査区	39
Fig. 11 SD1断面図	16	Fig. 30 27トレンチ13層中検出足跡状遺構	40
Fig. 12 4・5層出土遺物	17	Fig. 31 13～15層出土遺物分布図	41
Fig. 13 6層～8層上面検出状況	19	Fig. 32 13層出土遺物	42
Fig. 14 6層中検出遺構 SK 3・4	20	Fig. 33 14層出土遺物（1）	45
Fig. 15 6層出土遺物（1）	21	Fig. 34 14層出土遺物（2）	46
Fig. 16 6層出土遺物（2）	23	Fig. 35 14層出土遺物（3）	50
Fig. 17 7層出土遺物	24	Fig. 36 14層出土遺物（4）	51
Fig. 18 8層上面遺構検出状況	25	Fig. 37 14層出土遺物（5）	52
Fig. 19 8層上面遺構断面図	26	Fig. 38 15層出土遺物	56
Fig. 20 8層出土遺物	27	Fig. 39 鹿児島大学構内遺跡郡元団地内の 弥生時代・古墳時代遺構配置状況	68

表目次

Tab. 1 遺構リスト（1）	57	Tab. 5 遺物観察表（3）	61
Tab. 2 遺構リスト（2）	58	Tab. 6 遺物観察表（4）	62
Tab. 3 遺物観察表（1）	59	Tab. 7 遺物観察表（5）	63
Tab. 4 遺物観察表（2）	60	Tab. 8 層位別遺物出土状況	64

写真目次

PL. 1	調査開始時の状況	1	PL. 17	9・10 層の状況 (2)	35
PL. 2	層位写真	9	PL. 18	9・10 層の状況 (3)	36
PL. 3	1 層出土遺物	11	PL. 19	9・10 層の状況 (4)	37
PL. 4	2 層出土遺物	13	PL. 20	9・10・11 層出土遺物	38
PL. 5	3 層出土遺物	14	PL. 21	13 層中検出足跡状遺構	40
PL. 6	4 層検出遺構・遺物出土状況	16	PL. 22	13 層出土遺物	43
PL. 7	4・5 層出土遺物	17	PL. 23	14 層出土遺物 (1)	47
PL. 8	SK3 出土遺物	20	PL. 24	14 層出土遺物 (2)	48
PL. 9	SK3・4	20	PL. 25	14 層出土遺物 (3)	49
PL. 10	6 層出土遺物 (1)	22	PL. 26	14 層出土遺物 (4)	53
PL. 11	6 層出土遺物 (2)	23	PL. 27	14 層出土遺物 (5)	54
PL. 12	7 層出土遺物	24	PL. 28	15 層上面検出樹痕	55
PL. 13	8 層上面の状況	26	PL. 29	調査区完掘後の状況	55
PL. 14	8 層出土遺物	27	PL. 30	15 層出土遺物	56
PL. 15	SD3 出土遺物	30	PL. 31	郡元遺跡出土木材の顕微鏡写真	65
PL. 16	9・10 層の状況 (1)	34			

第1章 遺跡の位置と環境

鹿児島大学構内遺跡が所在する鹿児島市は、薩摩半島の北東部に位置する。東側には鹿児島湾(錦江湾)が広がり、他の三方は始良カルデラに由来するシラス台地に囲まれている。鹿児島大学の敷地内には、郡元キャンパス、桜ヶ丘キャンパス、入来牧場、唐湊学生寮において埋蔵文化財が確認されており、本報告地点が含まれる郡元キャンパス内の遺跡を鹿児島大学構内遺跡郡元団地と呼称している。

郡元団地は、沖積平野部の自然堤防帯に立地し、標高は約7mである。昭和26年の県立医大遺跡(現在の鹿児島大学附属中学校敷地内)の調査¹⁾以降、現在までに56回に及ぶ発掘調査が行われている。なお、埋蔵文化財調査室設置以前の昭和59年までは、「釘田」遺跡や「水町」遺跡など旧小字名等が遺跡の名称として用いられている²⁾。

郡元団地は、縄文時代前期～近世の複合遺跡であるが、特に古墳時代の竪穴建物跡群が多数発掘されている。現在、5か所の居住域が確認できるが、いずれも微高地上に立地している(Fig. 2)。郡元団地中央部には東西方向に流れる埋没河川がみられ、河川跡埋土からは弥生～古墳時代の木製品や木杭列などの遺物が出土している。その一部は、井堰跡と考えられ、本報告で掲載する弥生時代の水田遺構に関連する。古墳時代と特定できるの水田跡は検出されていないが、古墳時代包含層には、多量のイネプラントオパールが含まれている³⁾。古墳時代の遺物・遺構包含層より上位では、古代から近代に至るまでの水田・畑地跡が連続的に認められ、この地では継続的に農耕が行われていたことが推定される。

第2章 調査に至る経過

鹿児島大学では、平成9年度に工学部校舎新営工事が計画された。過去の調査をみると、本地点東側では弥生時代中期～古墳時代の竪穴建物跡が密集する居住域が確認され、また北側では弥生時代～古代の河川跡から井堰跡と考えられる木杭列が3か所確認されている。これらの成果から周辺是水田稲作農耕を生業とする集落であったと推定され、本工事地点も同時期の遺構が良好に残存していると予想されたため、校舎建設地の発掘調査を実施する事が決定された。



1 掘削開始前(南西から)



2 表土掘削後(東側)



3 表土掘削後(西側)

PL. 1 調査開始時の状況

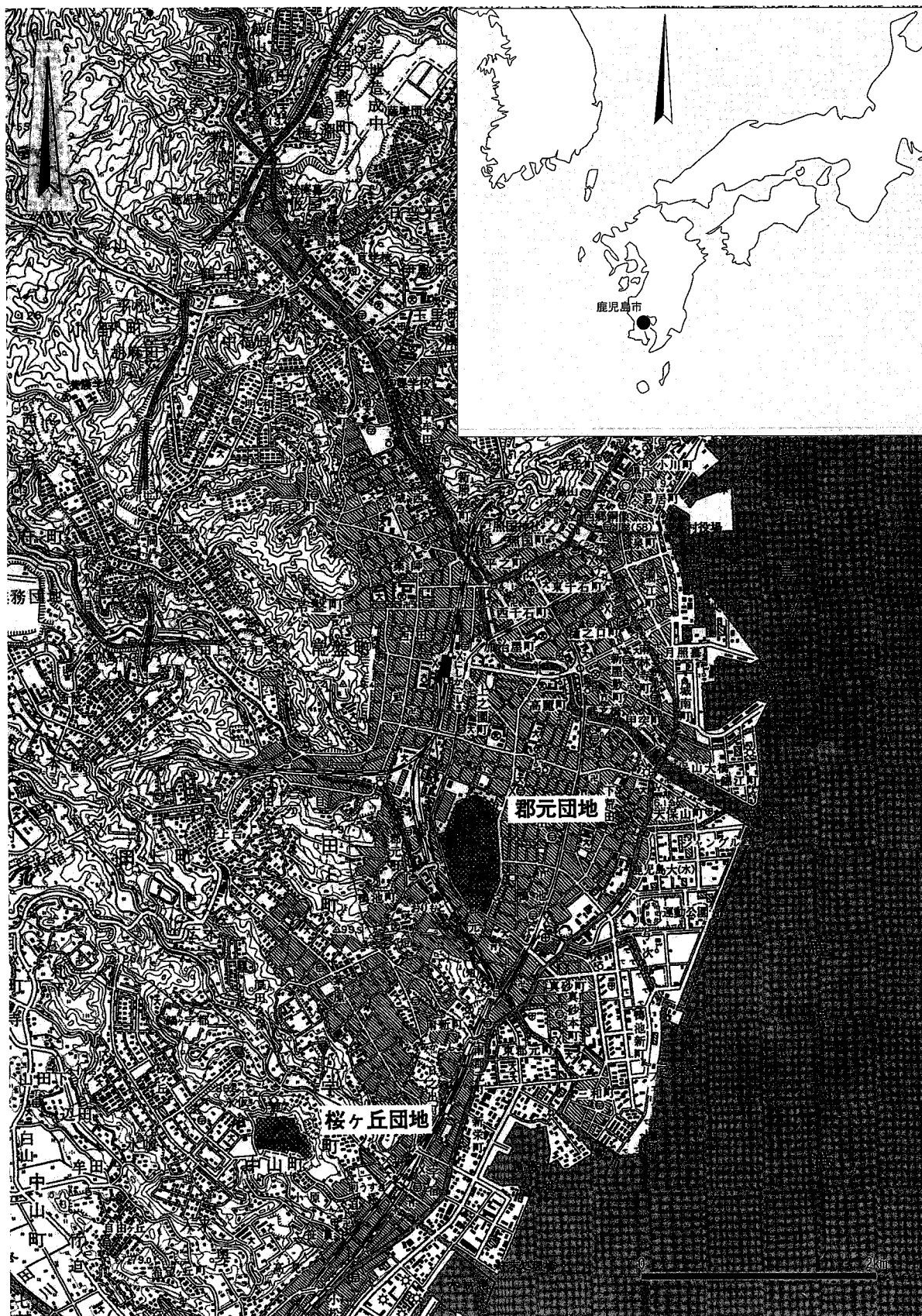


Fig. 1 遺跡の位置 S= 1/ 50,000

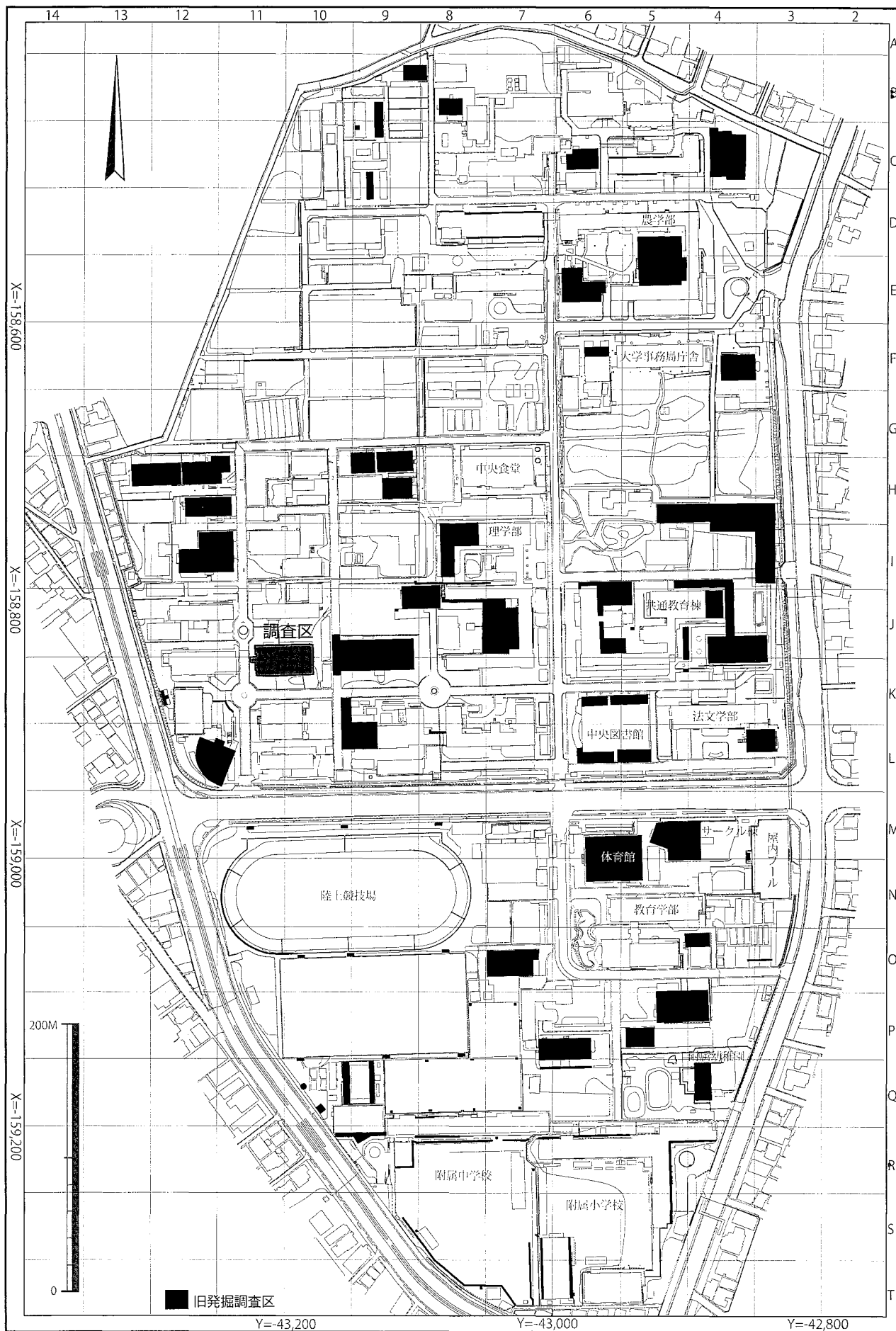


Fig. 2 調査区の位置 S = 1/4000

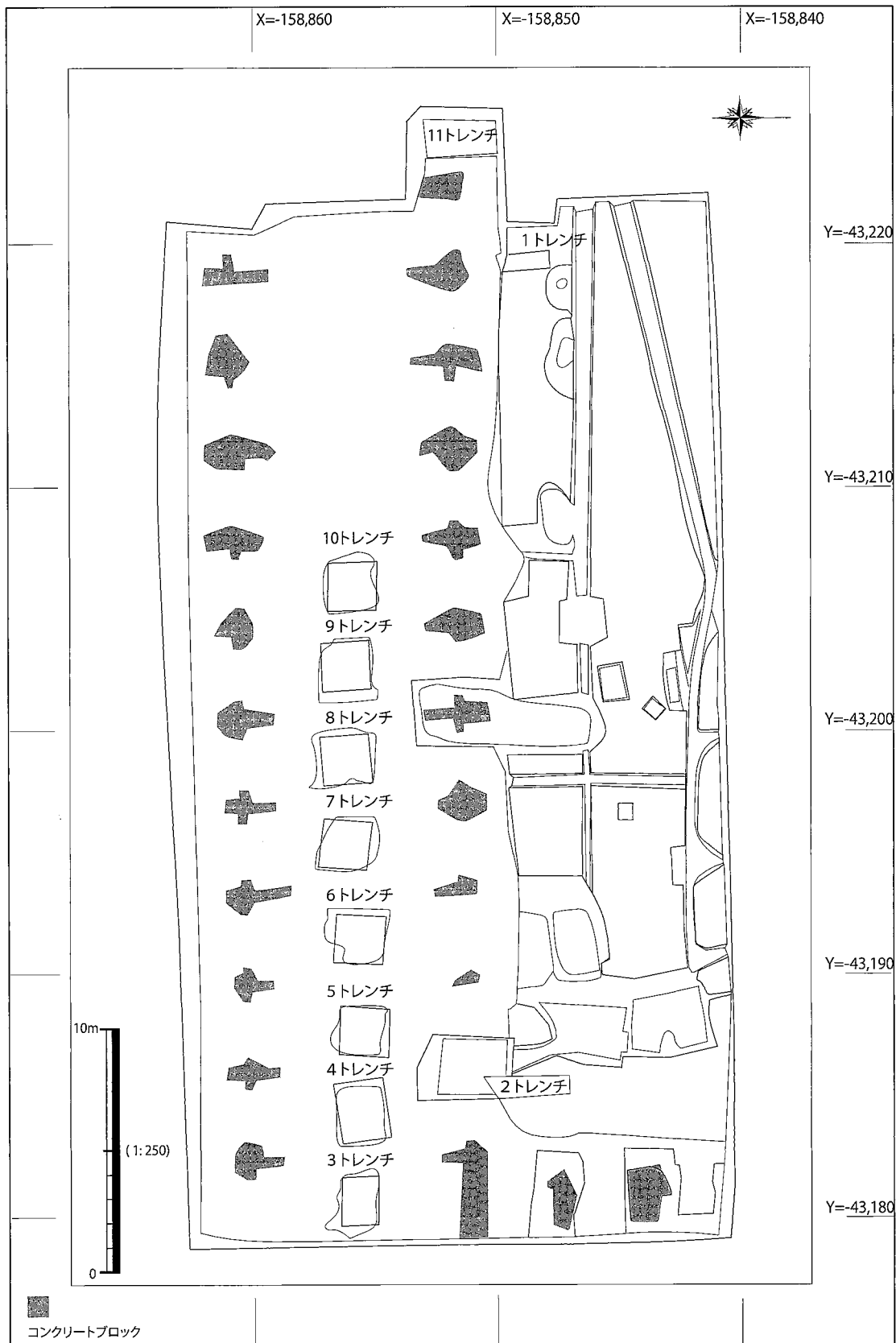


Fig. 3 表土除去後の調査区平面図 S=1/250

第3章 調査体制と期間

発掘調査は、以下の体制と期間で実施された。

所在地：鹿児島市郡元1丁目21番40号

調査起因：工学部校舎建設

発掘期間：平成9年6月16日～12月8日

調査面積：800m²

調査主体者：鹿児島大学埋蔵文化財調査室 室長 上村俊雄

調査担当：鹿児島大学埋蔵文化財調査室 主任 中村直子・鮎川章子

作業員：安倍松伊都子・石谷トキエ・襲谷ミエ子・岩戸エミ子・岩戸トシ子・岩戸トミ子・岩戸ミツ子・請園アキエ・請園チリ・上床久美子・坂口ミエ子・寒川朋枝・寺光ミツ子・新海ミチ子・新里貴之・末吉ナミ・末吉ナミ・末吉ミヤ・瀬戸口論・谷口ノリ・中村いつ子・名越ヒデ子・西庄司・野下かず子・野下チリ・福永シノブ・増満ミエ子・松下郁美・松下ミキ・峰山いづみ・盛満アイ子・矢住純子・柳田キミ子・柳田照子・柳田二三子・吉永幸子・脇カツ子・脇俊子・脇ツルエ

第4章 発掘調査の経過

調査に先立ち、現代の客土である第1層を重機によって掘削した。調査区南側は旧校舎のコンクリート製基礎が埋没し、攪乱を受けていた。ただし、基礎間はプライマリーな層が残存していたため、そこに8個のトレンチ（3～10トレンチ）を設定し、8層上面までの調査を実施した。トレンチ調査終了後、基礎を再び重機にて除去した。

また、調査区東側と西側に、層位確認のための先行トレンチを設けた（1・2トレンチ）。

基本層位としては、1～15層までを確認したが、2層以下は層ごとに掘削を実施し、遺構の確認を行った。主要な成果としては、9・10層で弥生時代中期の水田跡を検出し、14層では縄文時代中期の遺物がまとまって出土した。調査区東側に堆積していた泥炭層（13層）は、湿地に堆積した無遺物層であると確認できたため、全面の調査は行わず、4個のトレンチを設定し（27～30トレンチ）、トレンチ部分のみ調査を実施した。28トレンチでは14層下部から樹根が検出されたが、遺物の出土はなかった。樹根は樹種同定と放射性炭素年代測定を実施した（第8章）。27トレンチでは13層中に砂層を埋土とした足跡を検出した。調査区西側では15c層上面を検出した面で掘削を終了し、調査区壁面の層位断面図を作成して調査を終了した。

第5章 層位（Fig. 4～6, PL. 2）

基本層位としては、1～16層までを確認した。

- 1層 客土、現代による攪乱を受けている。ブロック・土管などを多く含む。
- 2層 褐灰色（10YR6/1），0.5cm大の軽石を含む。
- 3a層 黄褐色，シルト質砂。0.5～1cm大の軽石を含む。鉄分浸透。
- 3b層 褐灰色（10YR6/1），シルト質砂。1～2cm大の軽石含む。マンガン浸透。
- 4層 灰白色（10YR7/1），シルト質砂。黄色の軽石含む。マンガン浸透。
- 5層 にぶい黄橙色（10YR7/2），砂質シルト。マンガン含む。2cm大の軽石含む。
- 6層 灰褐色（7.5YR5/2），シルト質砂。0.5～2cm大の軽石を多く含む。
- 7層 にぶい黄橙色（10YR7/3），シルト質砂。砂っぽく，1cm大の軽石を含む。
- 8a層 灰黄褐色（10YR6/2），シルト層。鉄分含む。
- 8b層 にぶい黄橙色（10YR7/2），シルト層。断面が筒状の鉄分見られる。
- 9層 淡黄色（10YR4/1），シルト。
- 10a層 褐灰色 10YR4/1，砂質シルト。微細な炭粒を含む。
- 10b層 暗灰黄色（2.5Y5/2），砂質シルト。0.5～2cm大の軽石含む。

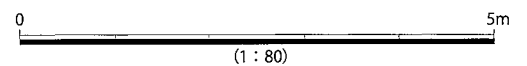
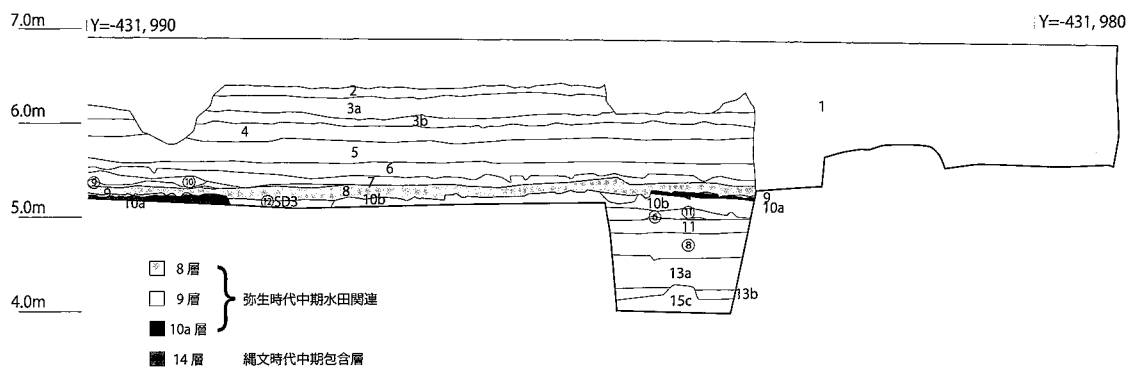
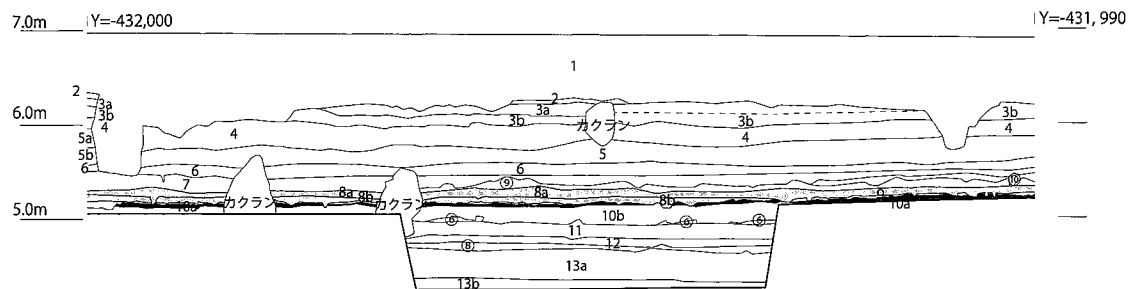
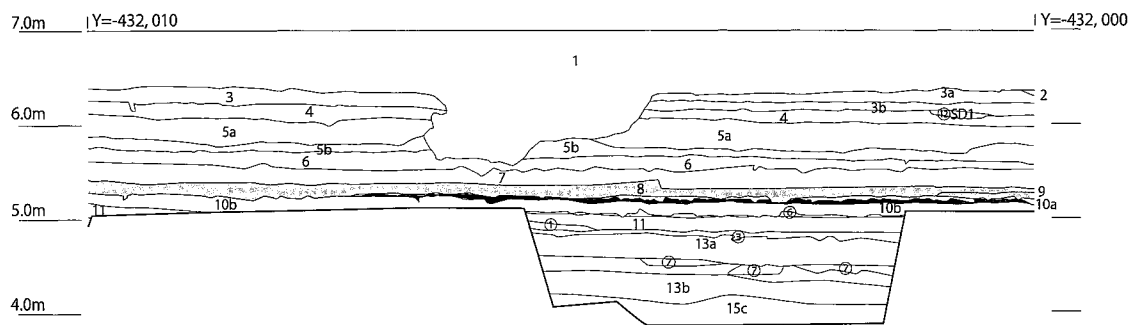
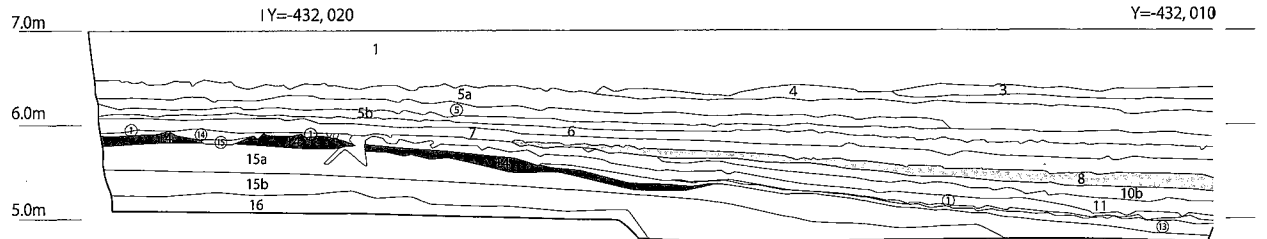
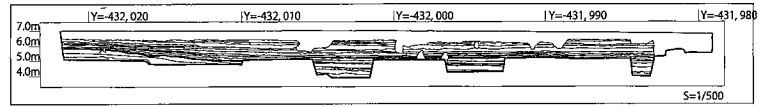
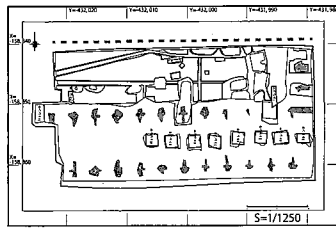


Fig. 4 北壁層位断面図 S=1/80

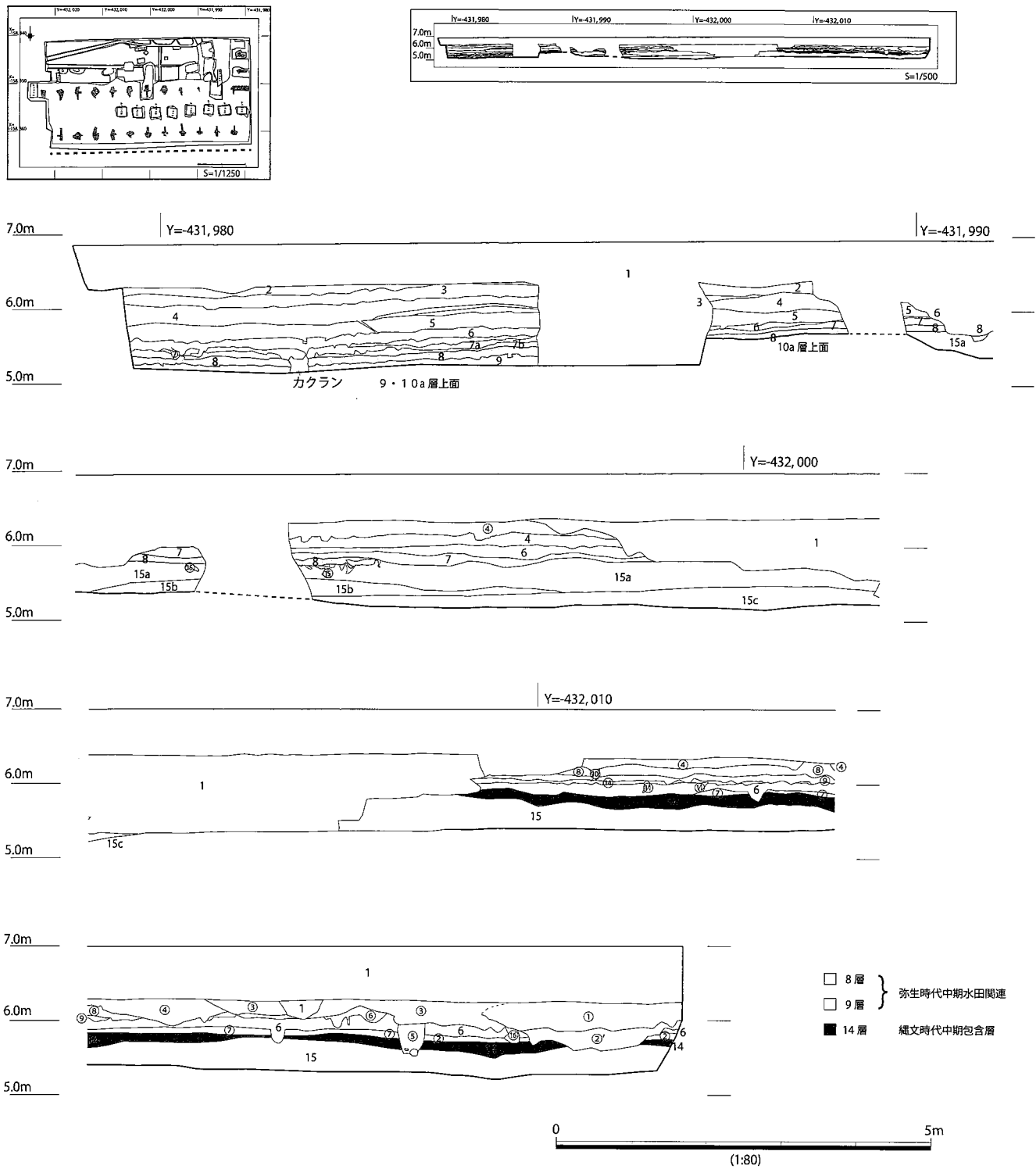


Fig. 5 南壁層位断面図 S=1/80

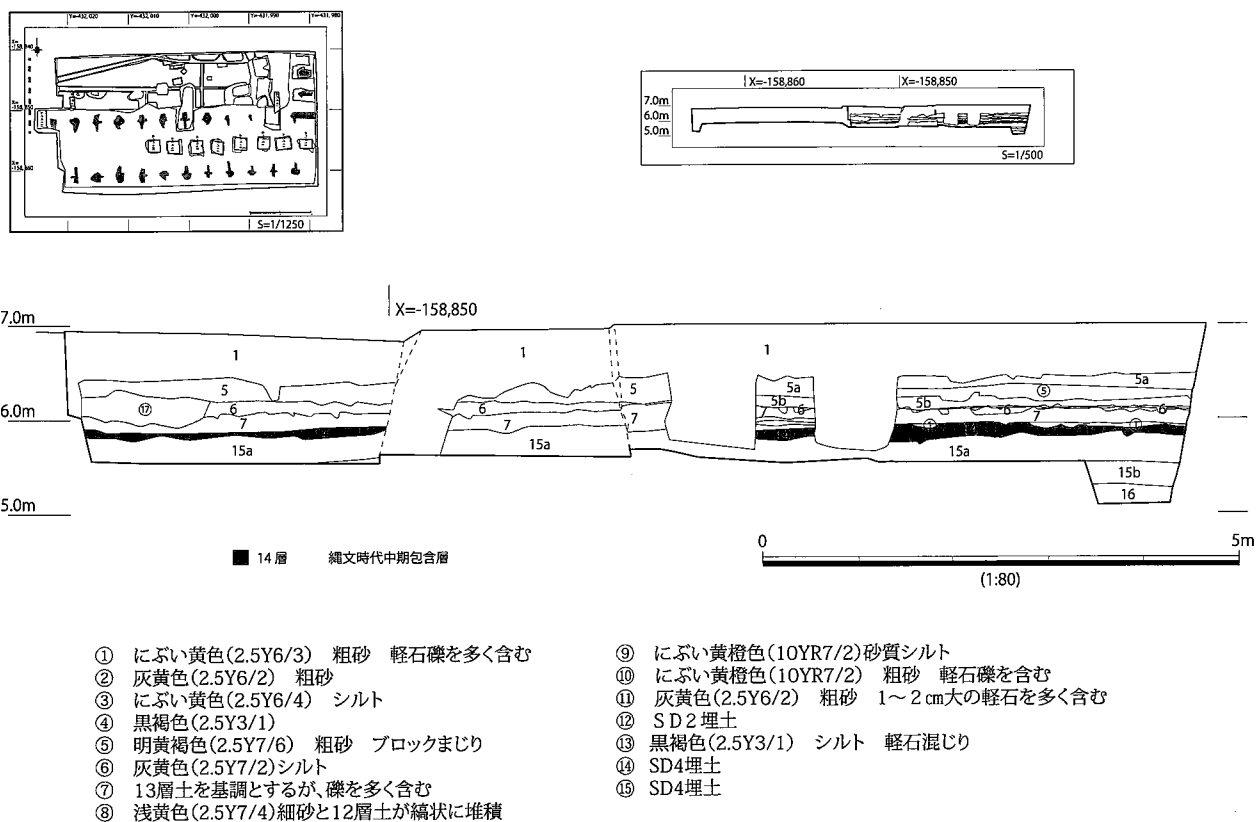


Fig. 6 西壁層位断面図 S=1/80

11層 黒褐色(2.5Y3/1), シルト。

12層 にぶい黄褐色(10YR5/4), 泥炭とシルトの混土。

13a層 黒褐色(10YR2/2), 泥炭層。一部赤褐色(2.5YR4/6)。

13b層 泥炭層混じり粗砂

14層 灰黄褐色(10YR4/2)に類似, 粗砂混じりシルト質砂。

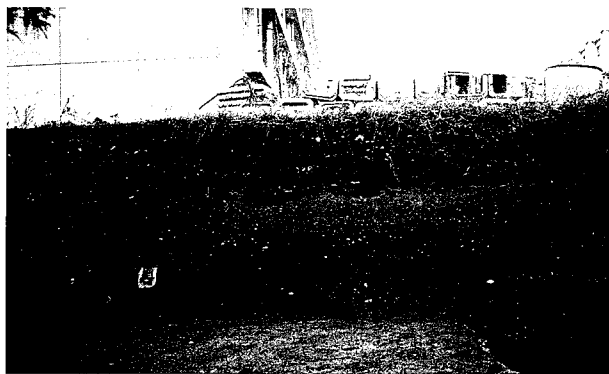
15a層 明黄褐色(10YR6/6), 粗砂。

15b層 軽石礫を多く含む粗砂層。

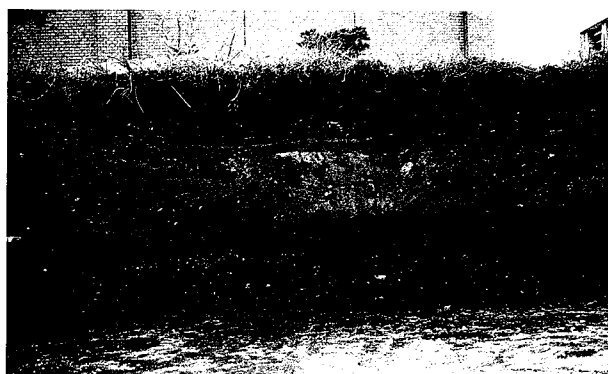
15c層 黄灰色(2.5Y4/1)に類似, 粗砂。

校舎基礎部分などの現代の掘削によって残存状況は異なるが、2～7層はほぼ水平に堆積している。遺構として確認できなかったものの、灰褐色でシルト質を基調としていることや、鉄分やマンガンの浸透具合から、そのほとんどが水田層であった可能性が高い。一方、基盤層である15層が西から東に傾斜しており、8層～13層は東側の低い部分にしか存在しない。なお、8～10層は7層堆積時に大幅な掘削を受け、東側の低位に堆積していたものののみ残存したと考えられる。さらに、13層は泥炭層で、もともと低地に形成された湿地であったと推定される。14層は15層上部の砂層が土壌化したもので、縄文時代中期の遺物を多く含んでいるが、15層が高く盛り上がっている西側部分に存在し、13層泥炭層が厚く堆積する部分には存在していない。

遺構や遺物は、1～15層にまで包含されているが、遺物の時期からおおよそ、1層は現代、2層は近代、4層は古代、6・7層は古墳時代、8・9層は弥生時代中期、14層は縄文時代中期、15層は縄文時代前期と推定される。



1 西壁（北側）



2 西壁（中央部）



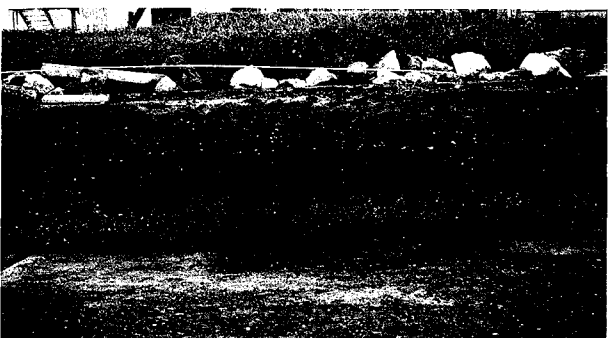
3 北壁（西側）



4 北壁（東側）



5 東壁



6 南壁（東側）



7 南壁（西側）

PL. 2 層位写真

第6章 各層の遺構と出土遺物

層位の堆積状況から便宜的に8つのグループに分け、検出遺構や出土遺物についての説明を行う。

第1節 1層出土遺物 (Fig. 7 PL. 3)

1層は現代の攪乱を受けており、コンクリートブロックやなど建築資材の混入が多くみられた。校舎建て替えなどに伴ったものと考えられる。ただし近代以前の遺物も多く出土しており、17点を図化した。

1は縄文時代中期の深浦式深鉢の胴部片である。外面には、横位の細い刻み目突帯の下には列点文が施されている。

2は弥生時代後期～古墳時代前期の小型甕もしくは鉢の口縁部である。短く屈曲し、端部平坦面はしっかりしており、角張っている。3は東原式甕の口縁部である。外反するが、屈曲部はゆるい。4は甕の脚部で弥生時代後期

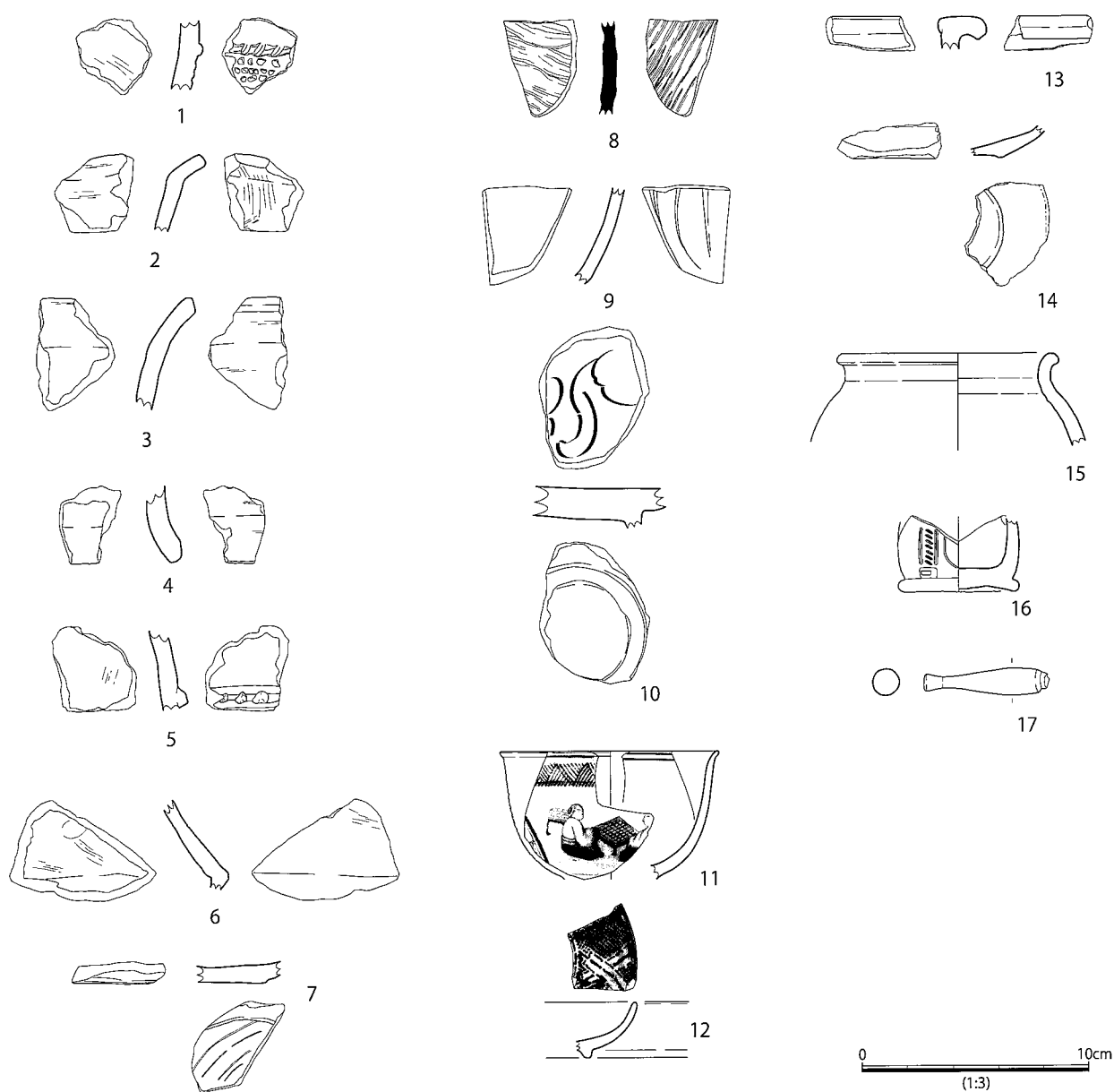
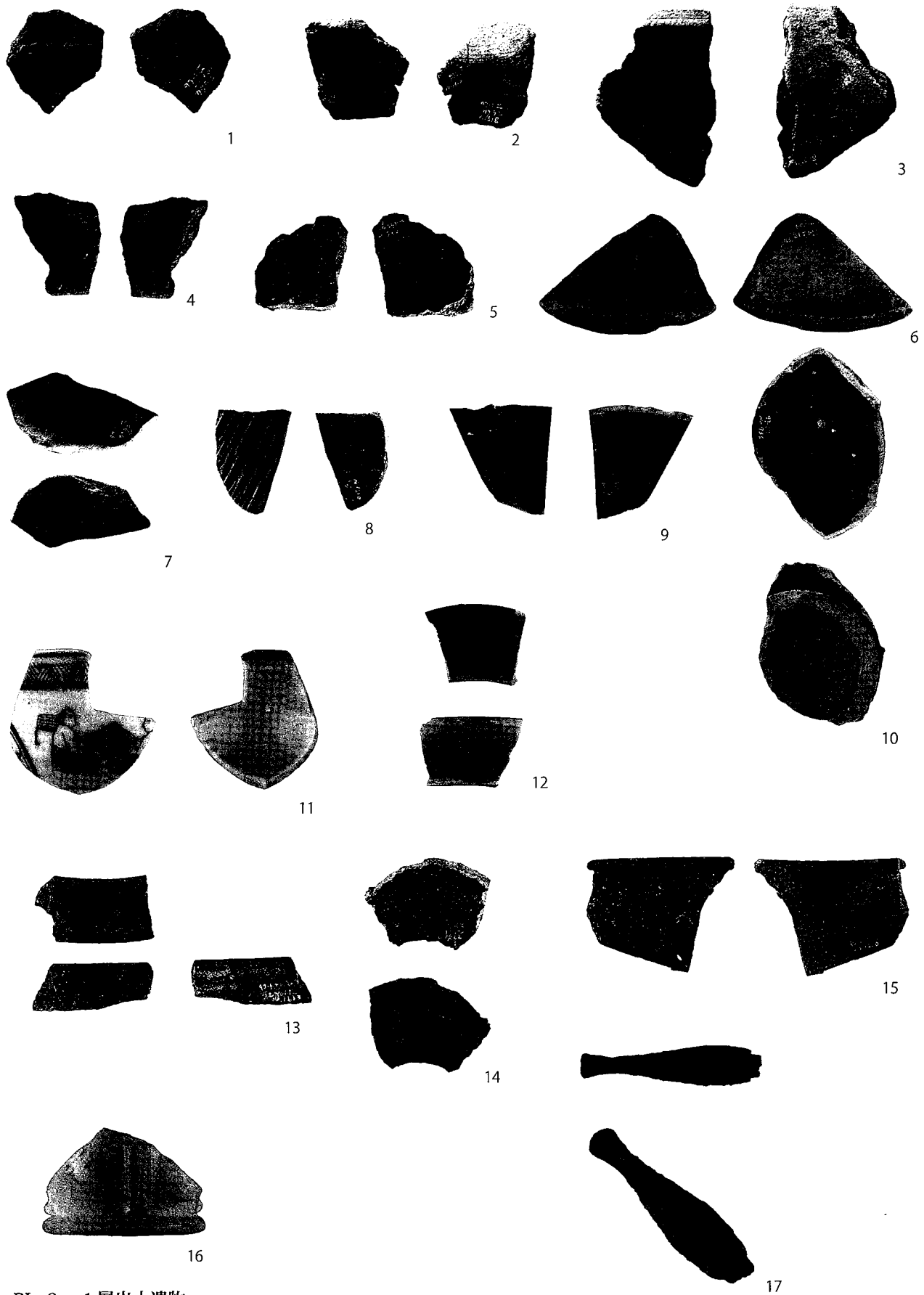


Fig. 7 1層出土遺物 S= 1/3



PL. 3 1層出土遺物

～古墳時代のものである。5は壺胴部で1条刻目突帯が施されている。突帯断面が三角形状を呈し、刻目が小さい事から弥生時代終末期～古墳時代前期段階のものであると推定できる。6は埴の肩部付近で、屈曲部がきつく算盤玉状の器形を呈する。古墳時代後半期のものである。

7は土師器杯の底部である。平底で、底面は糸切りである。8は須恵器胴部片である。外面には平行文のタタキ痕が、内面には同心円状の当て具痕が認められる。

9・10は竜泉窯系青磁である。9は碗胴部で外面に鎬蓮弁文が認められる。10は内面に片切り彫りの曲線文が施されている。

11・12は染付磁器である。11は碗で、外面と内面口縁部端部に施文が施されている。12は皿で内面にのみコバルトブルーの呉須で施文されている。

13～15は陶器である。いずれも苗代川窯系で紫がかった赤褐色の胎土にオリーブ色気味の釉が施されている。13は甕の口縁部で上面の釉は帯状に拭き取られている。14は底部で、底面は削りによって上げ底上を呈する。15は甕の口縁部～肩部で、緩やかに短く屈曲し、端部が丸く仕上げられている。

16はガラス容器である。不透明な白色ガラスで外面には陽刻文が認められる。化粧品用容器であろうと推定される。

17は青銅製の煙管吸い口部分である。内部にラウの一部が残存している。端部に向かってすぼまっているが、最端部は少しラッパ状に少し広がる形状を呈する。

第2節 2層出土遺物 (Fig. 8 PL. 4)

18は口縁部で、端部は丸く、外面に2本の沈線文が施されている。縄文時代後期のものであると推定される。

19は弥生時代中期後半～後期段階の甕口縁部で、短く外反し、端部が丸い形状を呈している。

20～22は土師器で、いずれも摩滅が著しい。20は高台杯の底部付近で、高台端部は欠損している。外面には赤色顔料が施されている。21・22は平底の杯底部でヘラ切りである。22は底部が厚い。

23・24は苗代川窯系陶器である。23は土瓶蓋の端部付近、24は急須の注口部である。

第3節 3層出土遺物 (Fig. 9 PL. 5)

25は弥生時代中期の入来Ⅱ式甕口縁部である。口縁部は断面三角形状に肥厚し、端部はわずかにヨコナデによる面を持つ。口縁部上面には、細い2条の沈線文が認められる。

26～30は土師器である。26・28は摩滅が著しい。26は杯の口縁部である。他の土師器に比べて、赤みが強い色調を呈する。27は高台付杯の底部付近で、高台は欠損している。他の土師器に比べると比較的硬質である。28も高台付杯で、高台付近のみ残存している。29・30は皿で糸切り底である。30の底面は、中央部付近がくぼんで大きくゆがんでいる。31は須恵器胴部片である。内外面ともタタキ痕が確認できる。

第4節 4・5層検出遺構・出土遺物

1 4層上面検出遺構 (SD 1) と出土遺物 (Fig. 10・11, PL. 6)

4層上面では、溝状遺構SD 1のみが検出された。SD 1は調査区の南東側から北西側へ走る。幅約50cm、深さ5cmを測り、非常に浅い。上部は掘削され消失したものと思われる。遺物は、土器小片が1点のみ出土している。

2 4層出土遺物 (Fig. 12, PL. 7)

32～37は土師器である。32は皿の小片だが、口縁部から底部まで残存している。底面はヘラ切りである。33は杯の口縁部である。34・35は平底の杯底部である。34は内面立ち上がり部に小さな段を持つ。35は底部が厚く、外面立ち上がり部に段を有する。底部はヘラ切りである。37は高台付杯の完形品である。ハの字状に開く高台を持ち、体部はやや内湾気味に立ち上がる。底面中央部には、焼成後穿孔が認められる。この遺物は、口縁部が土圧のためつぶれていたが、正置された状態で検出された (PL. 6-4)。関連する遺構遺物などは周辺にはなかったが、

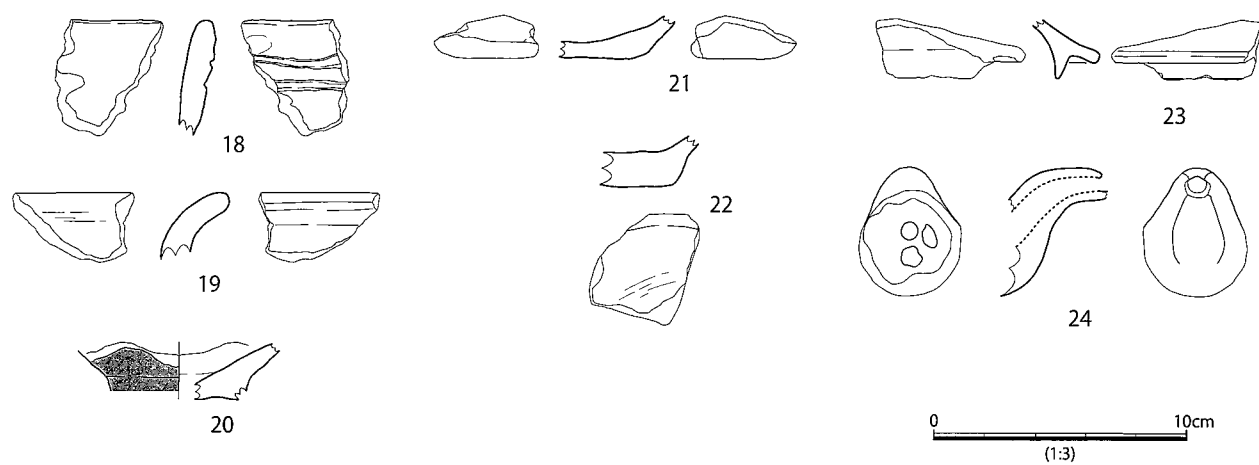
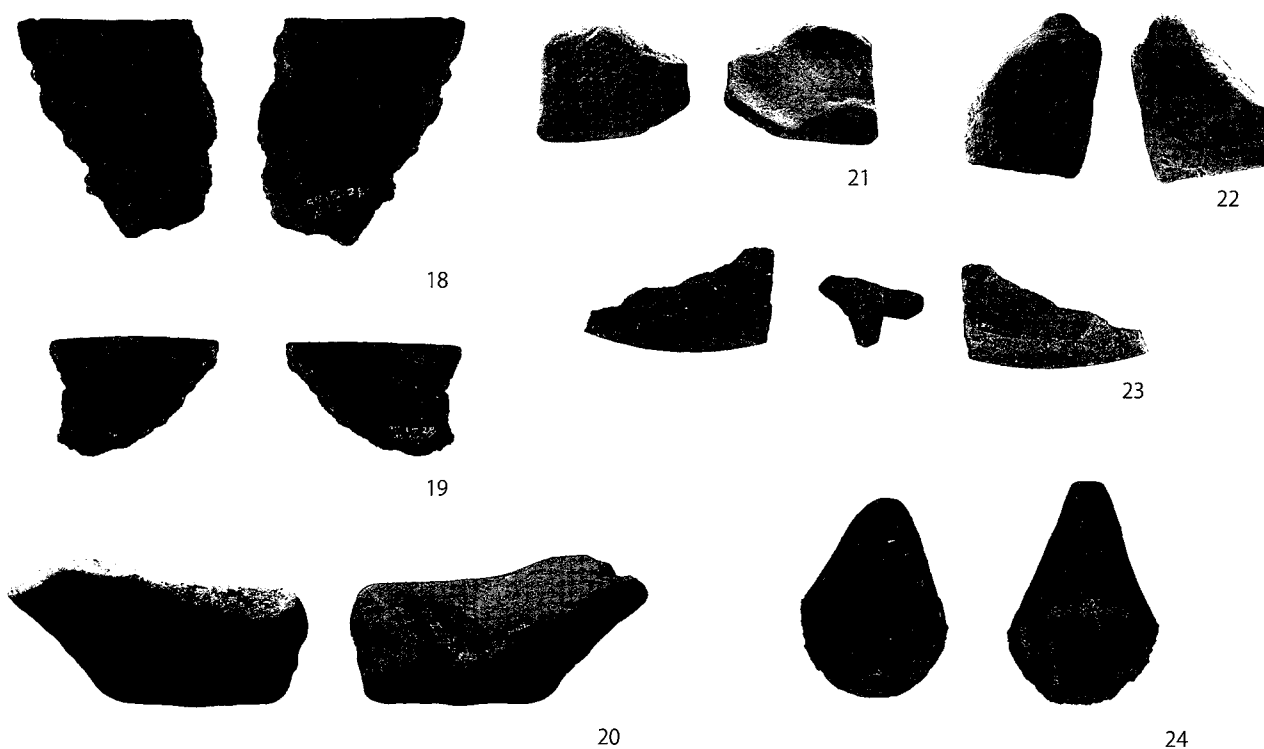


Fig. 8 2層出土遺物 S=1/3



PL. 4 2層出土遺物

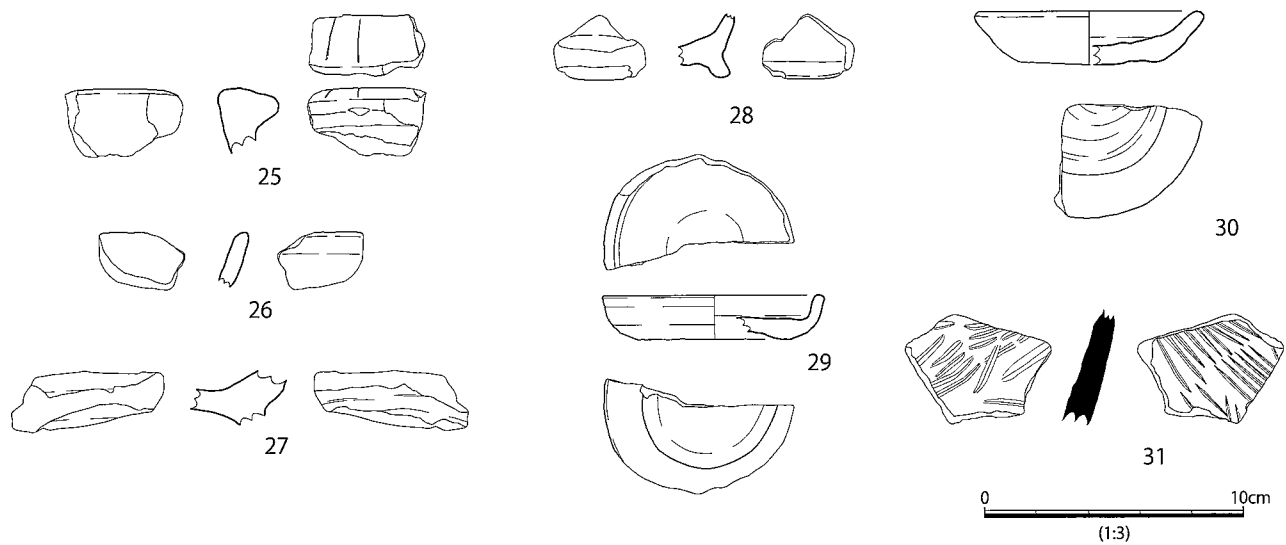
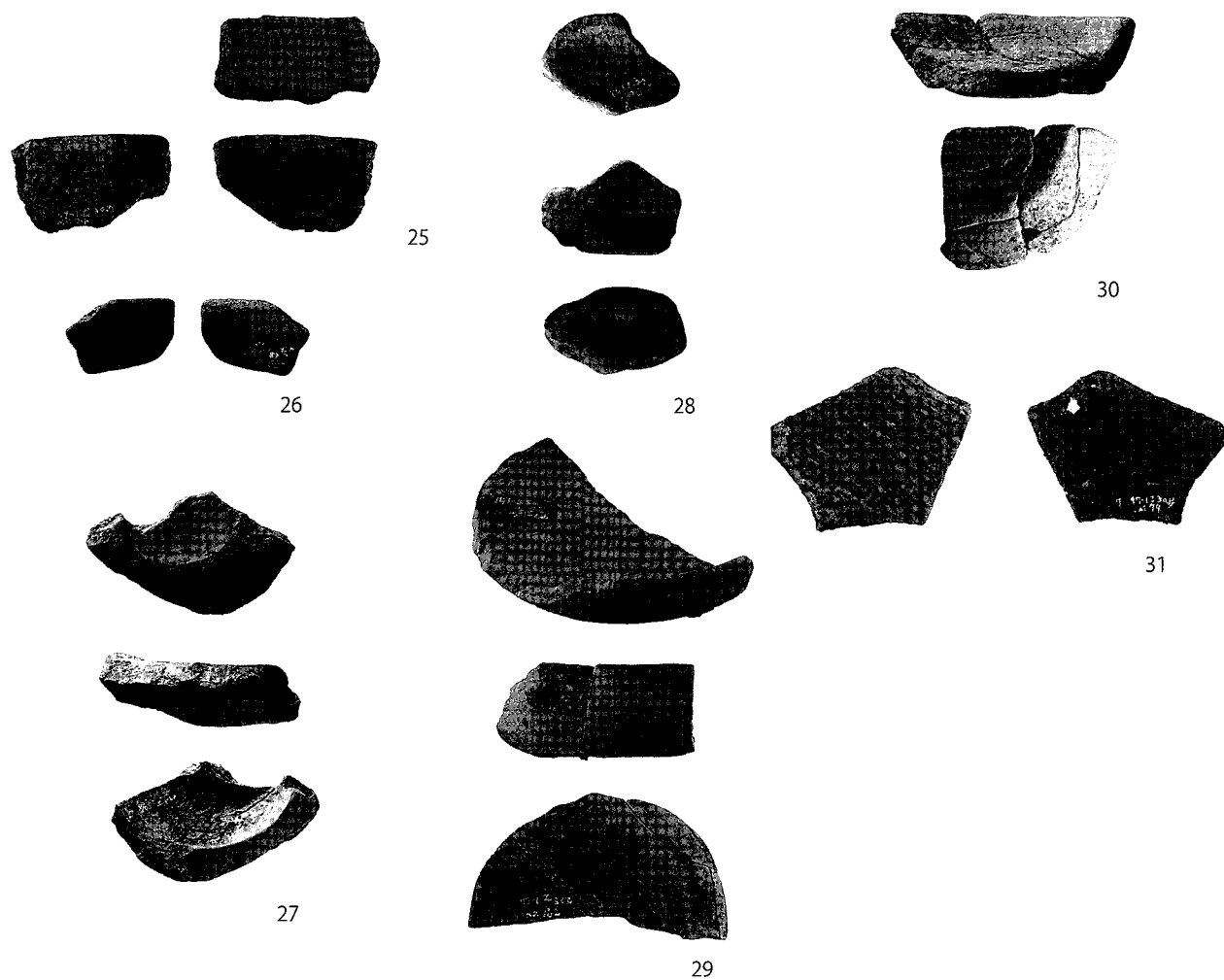


Fig. 9 3層出土遺物 S=1/3



PL. 5 3層出土遺物

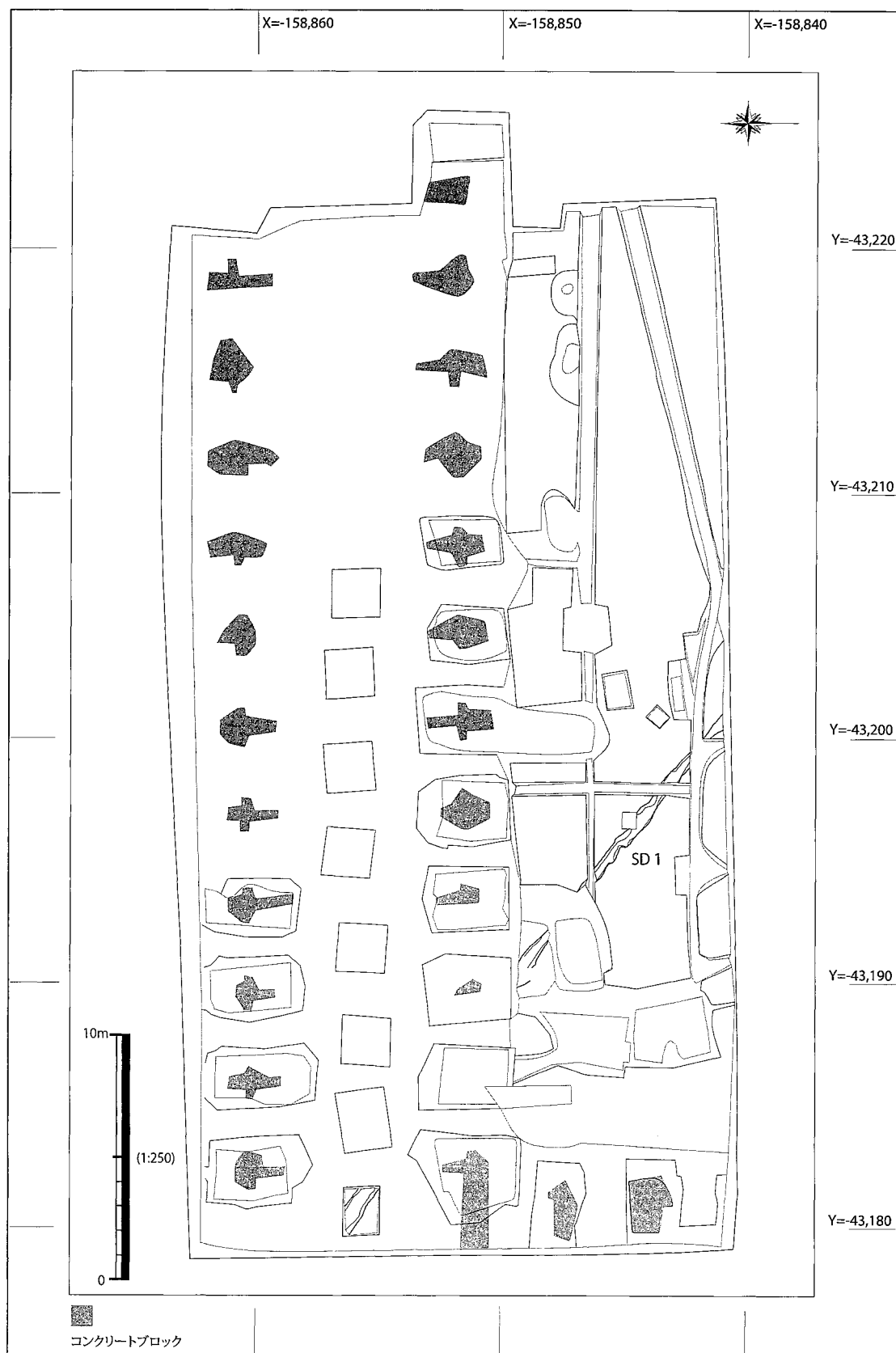


Fig. 10 4層上面検出状況 S=1/250

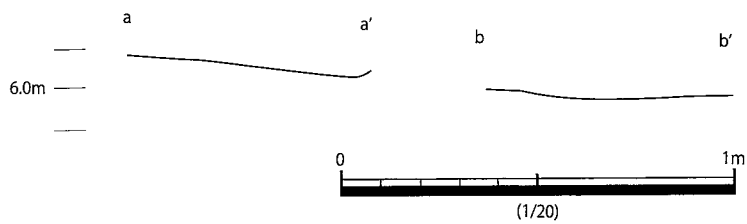


Fig. 11 SD1 断面図 S=1/20



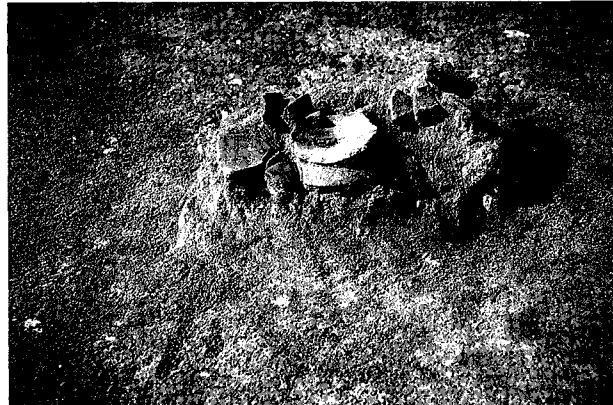
1 SD 1 検出状況 (北から)



2 SD 1 完掘状況 (北から)



3 SD 1 埋土



4 No.37 出土状況

PL. 6 4層検出遺構・遺物出土状況

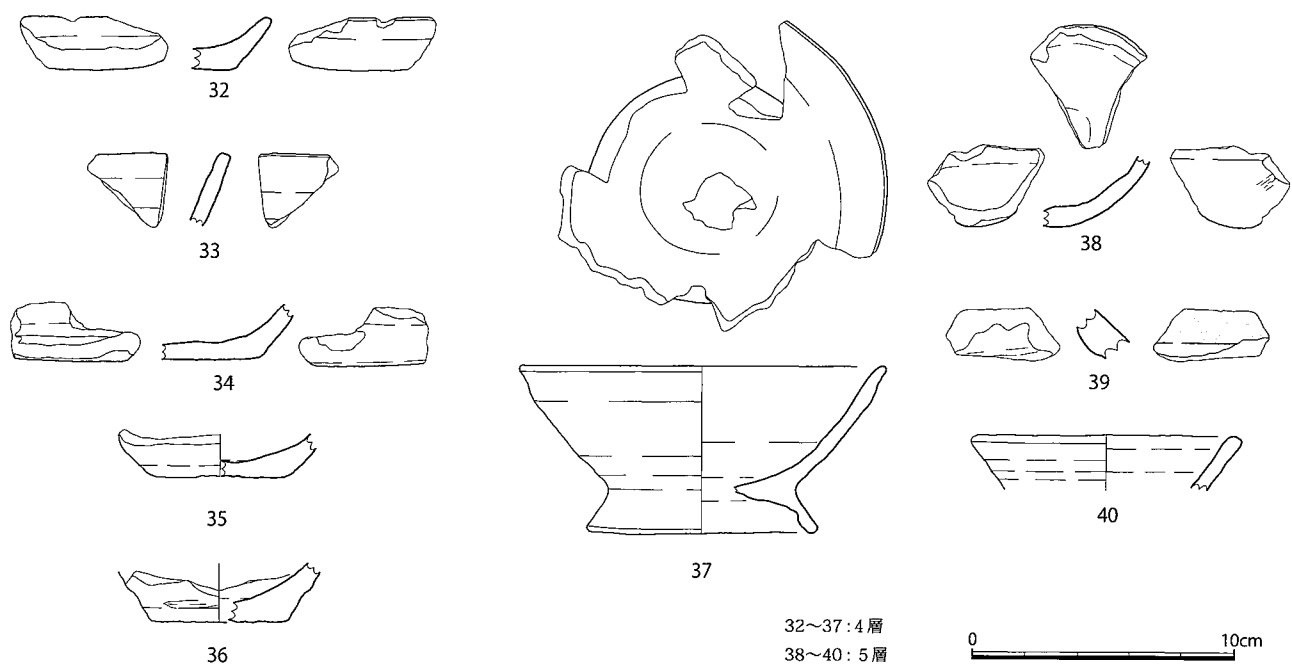
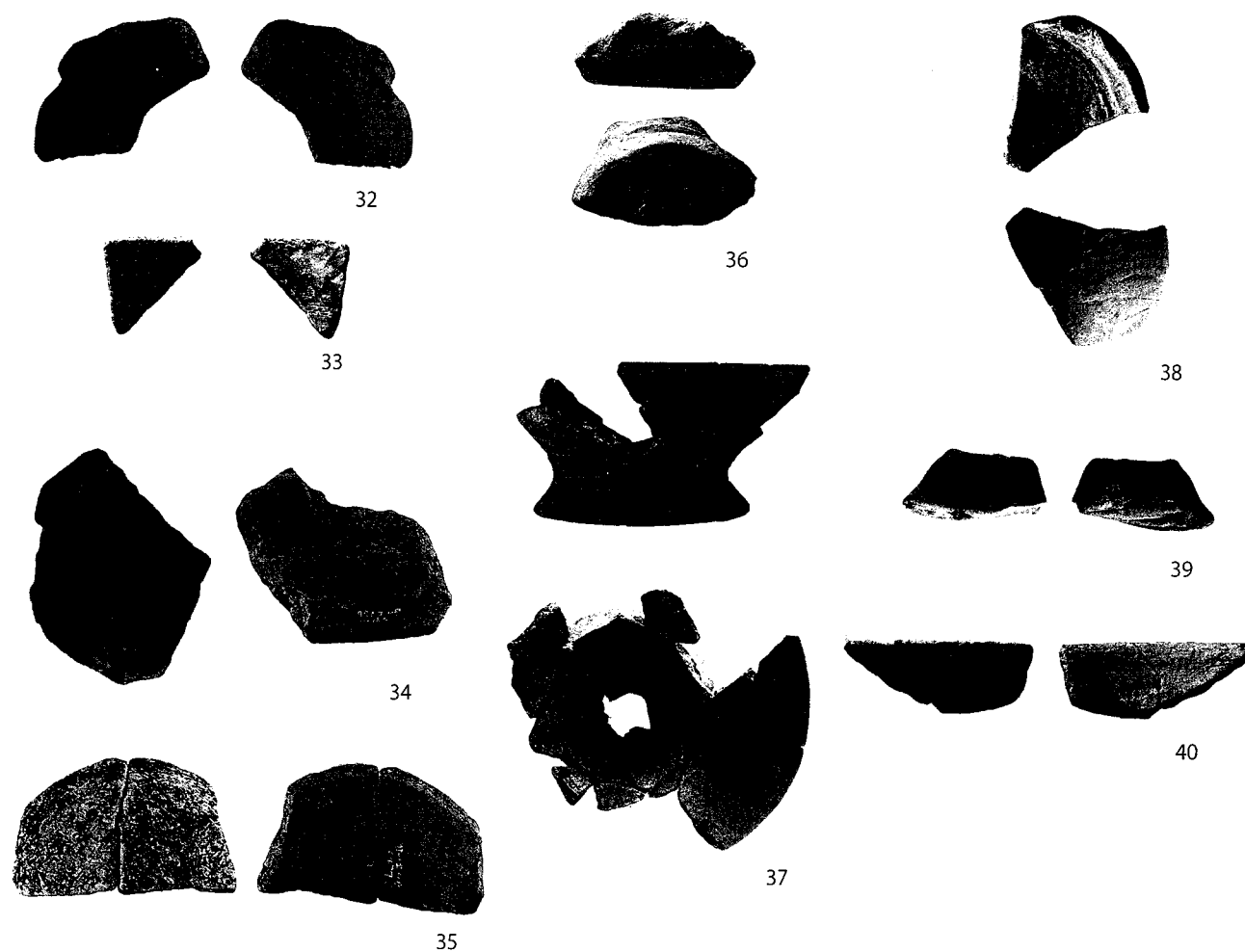


Fig. 12 4・5層出土遺物 S=1/3



PL. 7 4・5層出土遺物

人為的に置かれた可能性もある。

3 5層出土遺物 (Fig. 12・PL.7)

34は古墳時代前半期段階の小型丸底壺の底部である。丸底を呈し、胴部で明瞭に屈曲するが、屈曲部直上で欠損している。35は古墳時代後半期段階の埴の肩部である。屈曲部直下で欠損しており、外面には赤色顔料が塗布されている。

40は土師器杯の口縁部である。外反する形状を呈する。

第5節 6～8層検出遺構, 出土遺物

1 6層中検出遺構 (Fig. 13・14, PL. 8・9)

6層中では、調査区南西隅でSK 3・4が検出された。

SK 3

直径約67cm、深さ32cmの土坑状遺構である。断面形は、底面が凸レンズ状に丸みを帯び、ほぼ垂直に立ち上がる。埋土中より土器片が1点出土している。出土土器(41)は壺の胴部である。胴部最大径付近で、外面に1条刻目突帯を持つ。突帯は細く断面三角形状を呈し、刻目は小さい。外面の器面調整であるハケ目が比較的幅広で明瞭に残っていることから、弥生時代終末期から古墳時代前期の段階であると考えられる。

SK 4

直径約42cm、深さ27cmの土坑状遺構である。断面形は、底面が平らで逆台形状を呈する。遺物の出土はなかった。

2 6層出土遺物 (Fig. 15・16, PL. 10・11)

42～44は弥生土器である。42は入来Ⅱ式の小型甕口縁部である。摩滅が著しいが、口縁部端部は幅広い面を持ち、断面形は方形を呈する。43は口縁部端部が欠損しているがほぼ水平方向に屈曲しており、中期段階の小型甕口縁部であろう。外面と口縁部上面にはススが付着している。44は鉢口縁部で、短く斜め上方に立ち上がる形状を呈する。口縁部直下外面に細い一条突帯が施されている。口縁部端部は強いヨコナデによって窪んでおり、中期～後期前半の特徴を備えている。

45～53は弥生時代終末期から古墳時代前期の甕口縁部である。緩やかに外反し、外面に1条の突帯を持つものもある。49・50は刻目に布目圧痕が認められる。52は外面に赤色顔料が塗布されている。

54は甕の脚台上部である。内面にコゲが付着している。55～57は甕脚台の脚部である。いずれも、少し外反気味に広がり、端部は丸い。

58～63は弥生時代終末～古墳時代の壺である。58は口縁部で、外反する形状を呈し、口縁部端部はヨコナデによってゆるい面を持つ。59～61は細い刻目突帯で、刻みも小さい。弥生時代終末～古墳時代前期頃のものと思われる。62・63はいわゆる幅広突帯に分類されるもので、突帯断面系は蒲鉾状を呈する。古墳時代後半期のものである。62は2つの細長い刻目を組み合わせた文様を施している。63は細長い刻目を格子状に組み合わせた文様を施している。

64は平底鉢の底部である。器面は比較的丁寧にナデているが、器壁の厚みが一定しておらず粗雑な作りである。65は鉢の底部である。底面が少し丸みを帯びた平底で、器壁が厚い。底面がコブ状に突起するタイプのもので、古墳時代前期に多いタイプである。

66・67は古墳時代の埴である。66は口縁部で、やや内湾気味に立ち上がる形態を呈する。67は算盤玉状に屈曲する胴部である。表面の摩滅が著しいが、外面に赤色顔料が塗布されている。

68は小型丸底壺の底部である。底部近くに明瞭な屈曲部があり、そこからやや外反気味に立ち上がる器形を呈すると推定される。屈曲部直上で欠損している。古墳時代前期に多いタイプである。

69は高杯の杯部もしくは鉢である。少し深いタイプで、外面に低い段を持ち、そこから大きく外反する器形を呈する。弥生時代終末期から古墳時代前期段階のものである。

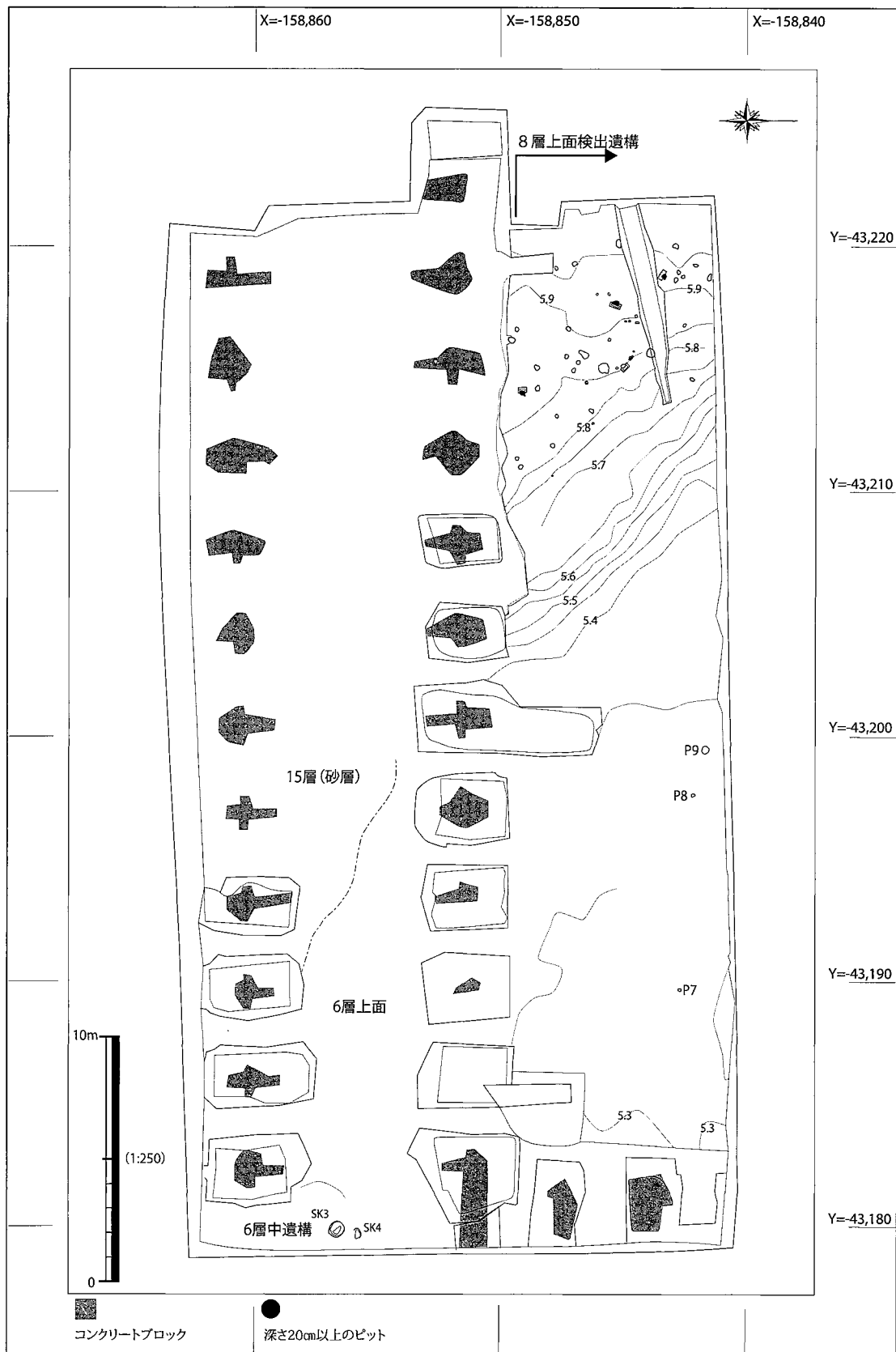


Fig. 13 6層～8層上面検出状況 S=1/250

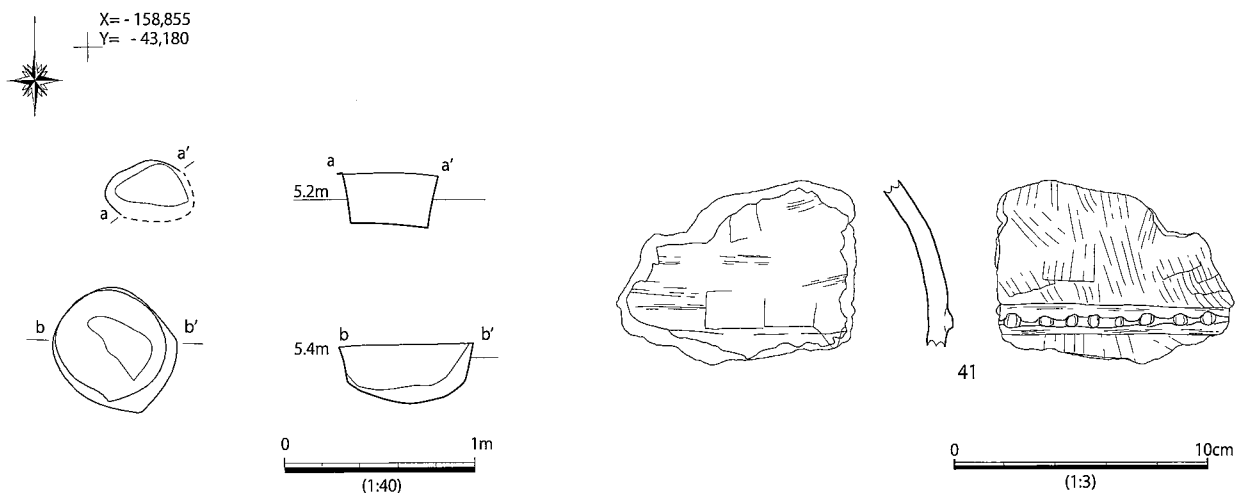
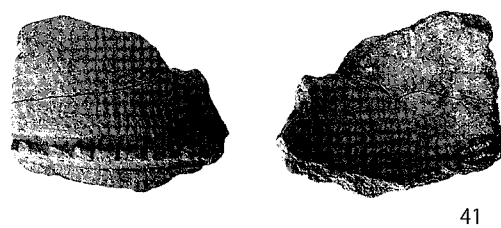


Fig. 14 6層中検出遺構 SK3・4 S=1/40, SK3 出土遺物 S=1/3



PL. 8 SK 3 出土遺物



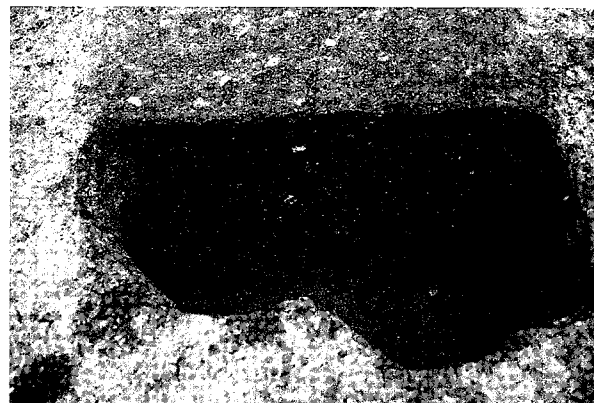
1 SK 3・4 検出状況 (西から)



2 SK 3 埋土断面 (北から)



1 SK 3・4 完掘状況 (東から)



2 SK 4 埋土断面 (南東から)

PL. 9 SK 3・4

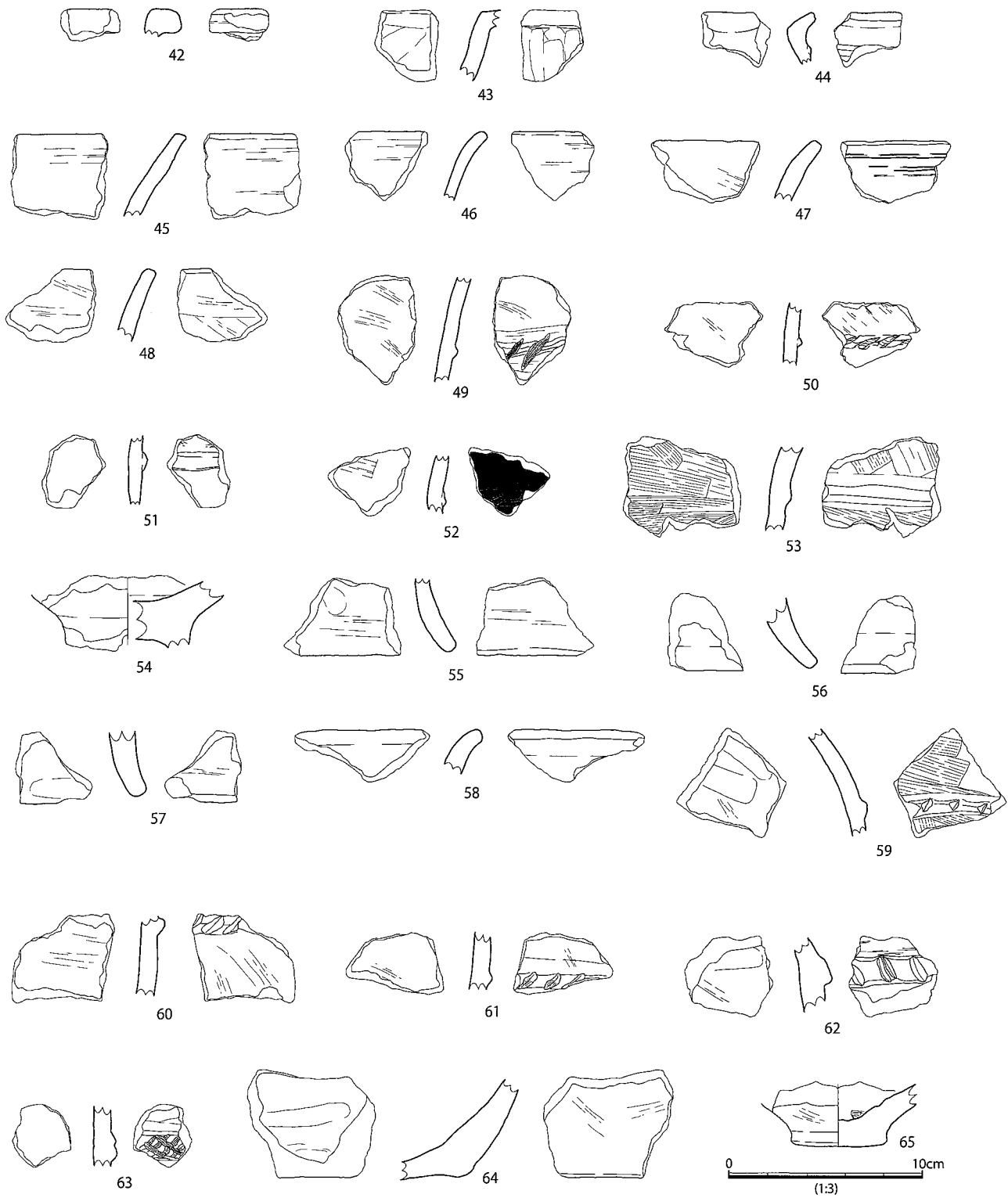
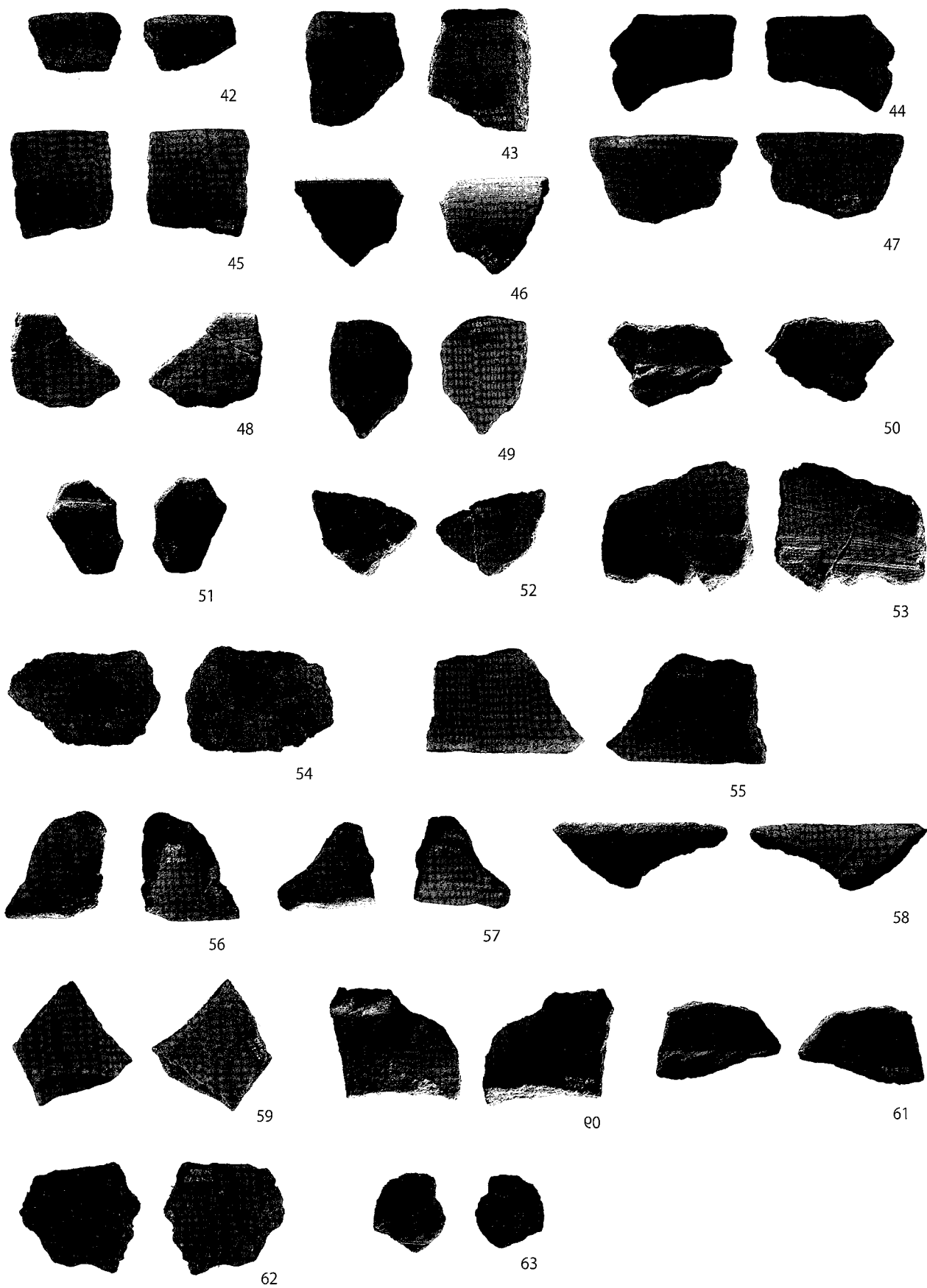


Fig. 15 6層出土遺物 (1) S=1/3



PL. 10 6層出土遺物(1)

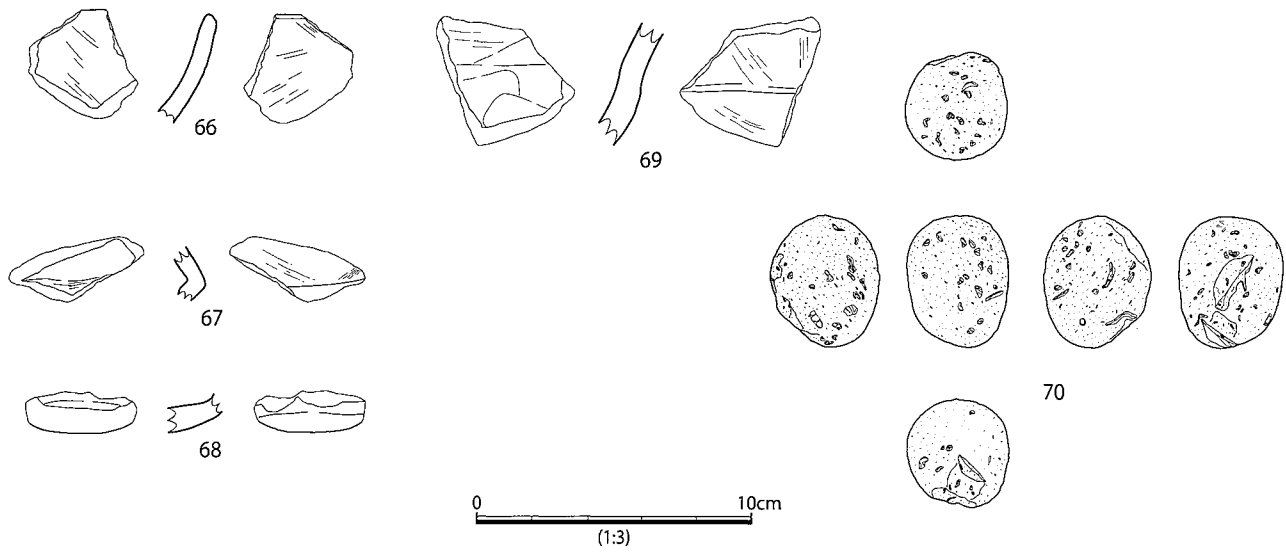
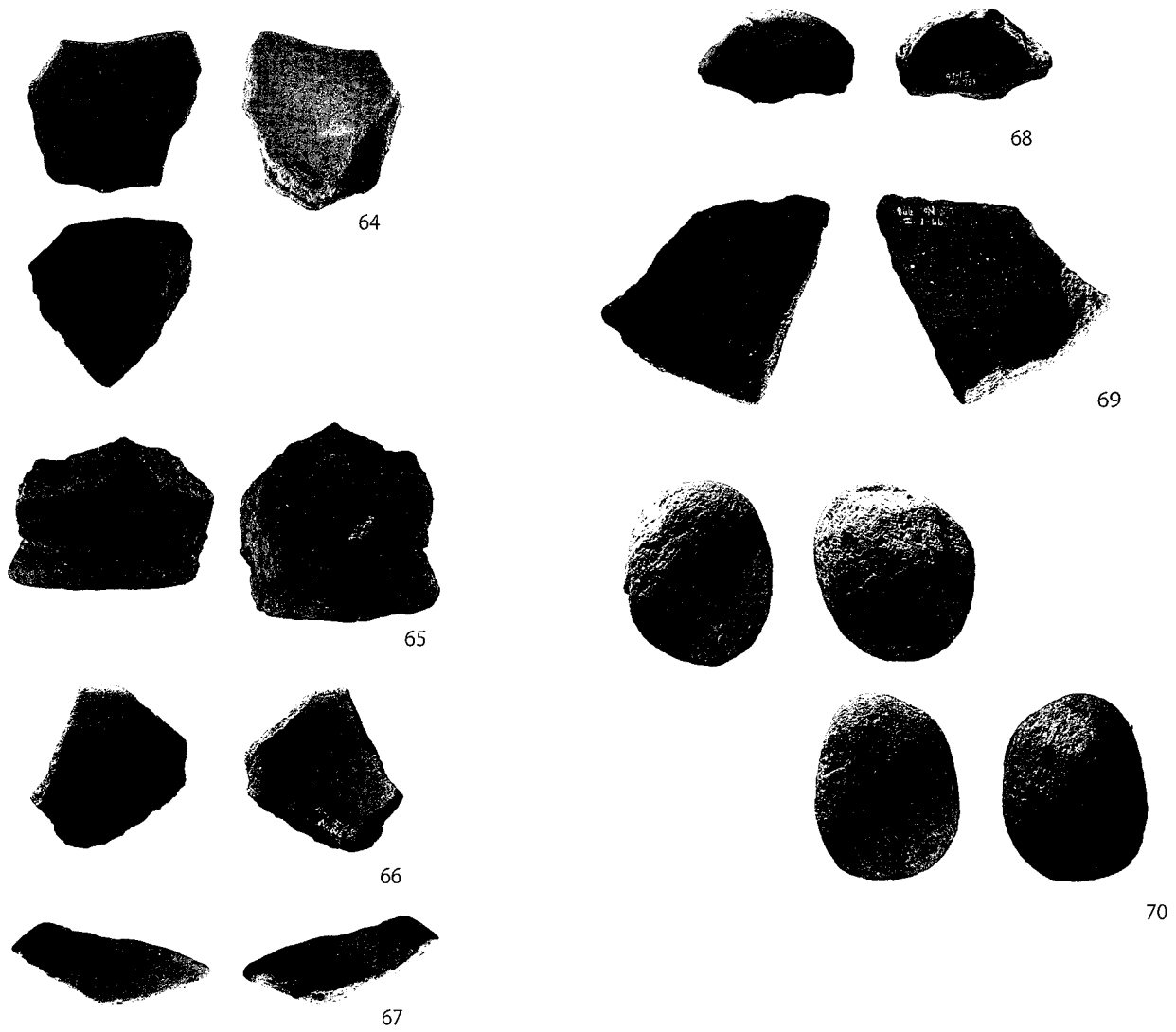


Fig. 16 6層出土遺物（2） S=1/3



PL. 11 6層出土遺物（2）

70 は軽石製品である。手のひらに収まるぐらいの卵形を呈し、表面に整形した磨り面が認められる。

3 7層出土遺物 (Fig. 17・PL. 12)

71 は弥生土器で、壺の口縁部である。口縁部端部が上下二つに分かれており、二叉状口縁である。中期後半～後期前半段階のものと考えられる。色調が茶褐色で胎土中に金色の雲母が認められ、本遺跡在地のものとは異なっており、搬入品である可能性も考えられる。72 は古墳時代平底鉢の底部である。胎土は精製されており、古墳時代後半期の埴や高杯のものに近い。

4 8層上面検出遺構 (Fig. 18・19, PL. 13)

8層上面では、38基のピットが検出された。いずれも、調査区北西部で検出されている。8層上面は、西から東方向へ緩やかに傾斜しており、遺構は西側の高いレベルの部分に比較的集中していた。

ピットは、直径約10～50cm、深さは10cm未満と20cm以上のものがみられた。この中で深さ20cm以上のものは、P16・21・41である。これらは南東―北西方向に一列に並び(Fig. 18網掛け部)、P41-21間が2.2m、P21-16間は5.3mを測る。

ピット群から遺物は出土していないが、検出面を覆っている6・7層は古墳時代の包含層である事やピット埋土が6・7層に類似していることから、古墳時代の杭列の可能性が考えられる。

5 8層出土遺物 (Fig. 20, PL. 14)

73・74 は弥生土器である。73 は鉢の口縁部で、口縁部外側の角が少し突き出す形状を呈し、口縁部直下には断面三角形の突帯が1条施されている。中期段階のものであると推定される。74 は中期の入来Ⅱ式の甕口縁部である。口縁部端部は凹み気味の面を持つ。外面にはススが付着している。

75 は砥石である。側面・下面は整形されているが、上部は欠損している。片面にのみ磨面が認められる。

第6節 9・10層検出遺構・出土遺物

1 9・10層上面検出遺構 (Fig. 21～27, PL. 15～19)

9・10層上面は南西方向から北東方向に傾斜しており、低い調査区東側を中心に溝状遺構とピット群および小ピット群が検出された。9層は黄白色を基調とするシルト層だが、調査区東側にのみ堆積しており、層厚5cm以下と浅く、安定的に堆積している範囲は狭い。

SD 2

9層上面で検出された。幅約60cm、深さ7cmと浅く、浅い不定形の土坑が北東―南西方向に並んで検出された。

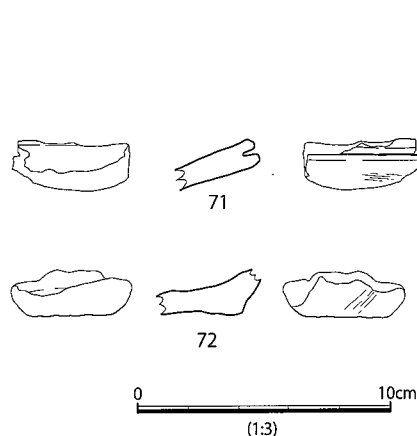
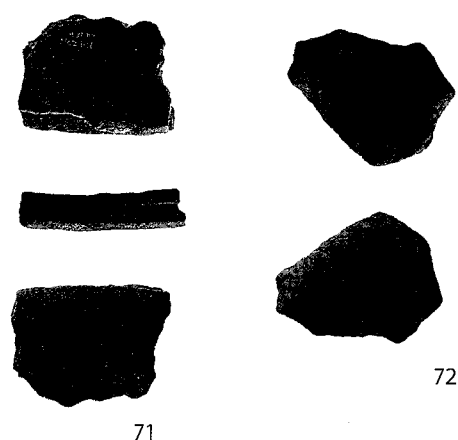


Fig. 17 7層出土遺物 S=1/3



PL. 12 7層出土遺物

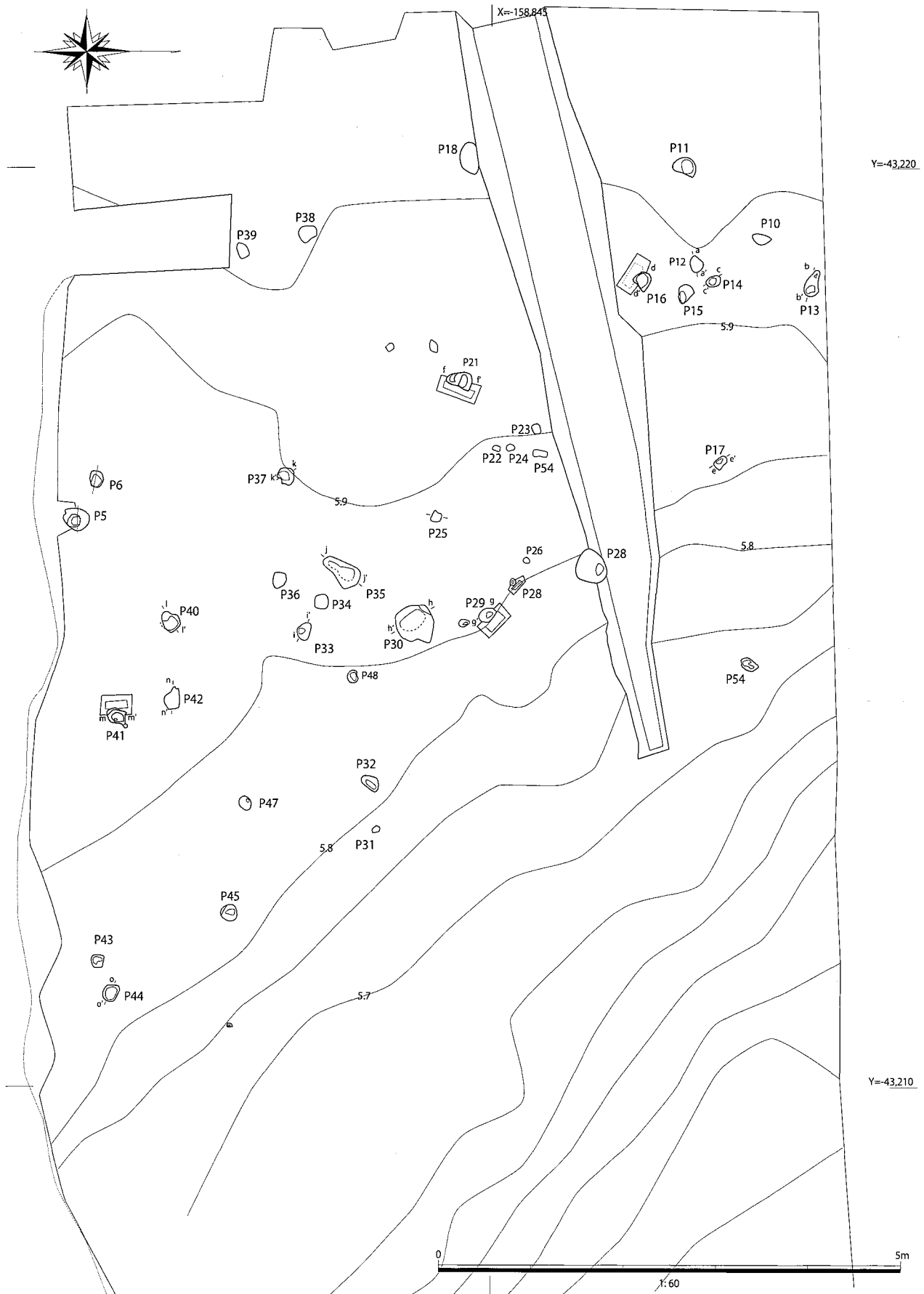


Fig. 18 8層上面遺構検出状況 S=1/100

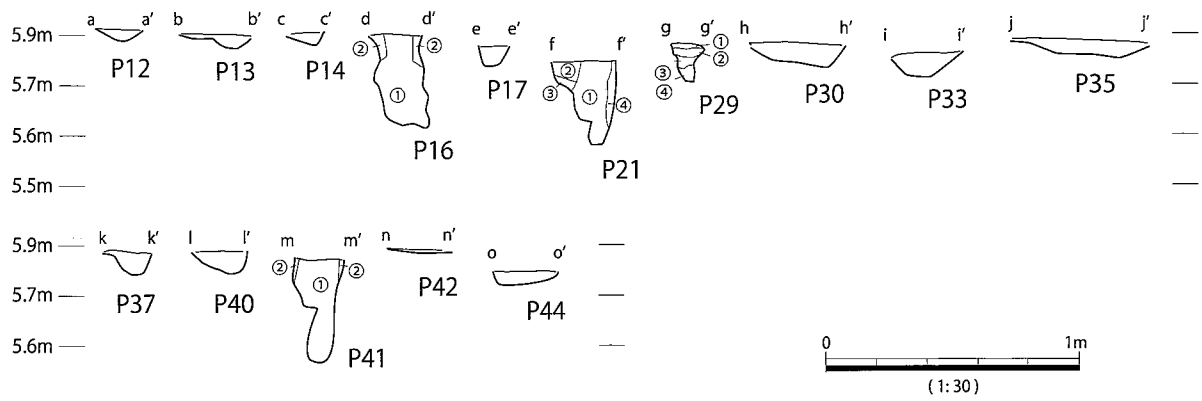
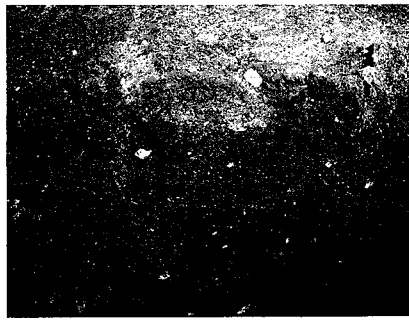


Fig. 19 8層上面検出遺構断面図 S=1/30



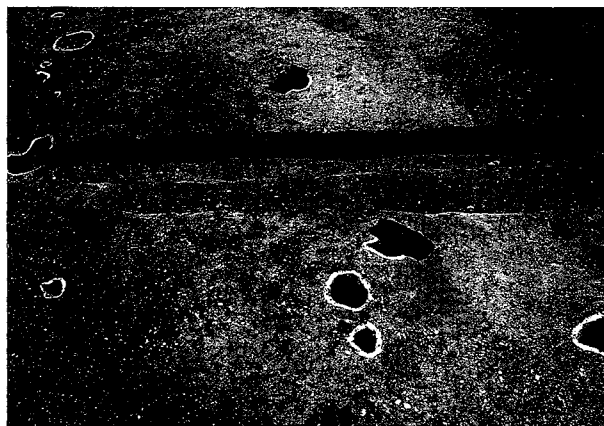
1 P16 埋土断面 (南西から)



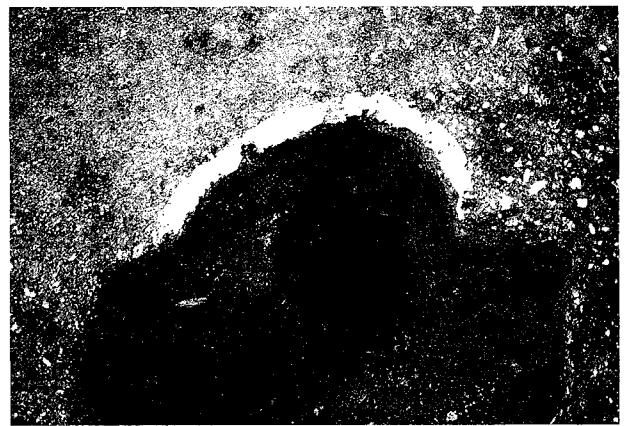
2 P41 埋土断面 (西から)



3 P21 埋土断面 (東から)



4 8層上面ピット間軌状況 (北から)



5 P16 完掘状況

PL. 13 8層上面の状況

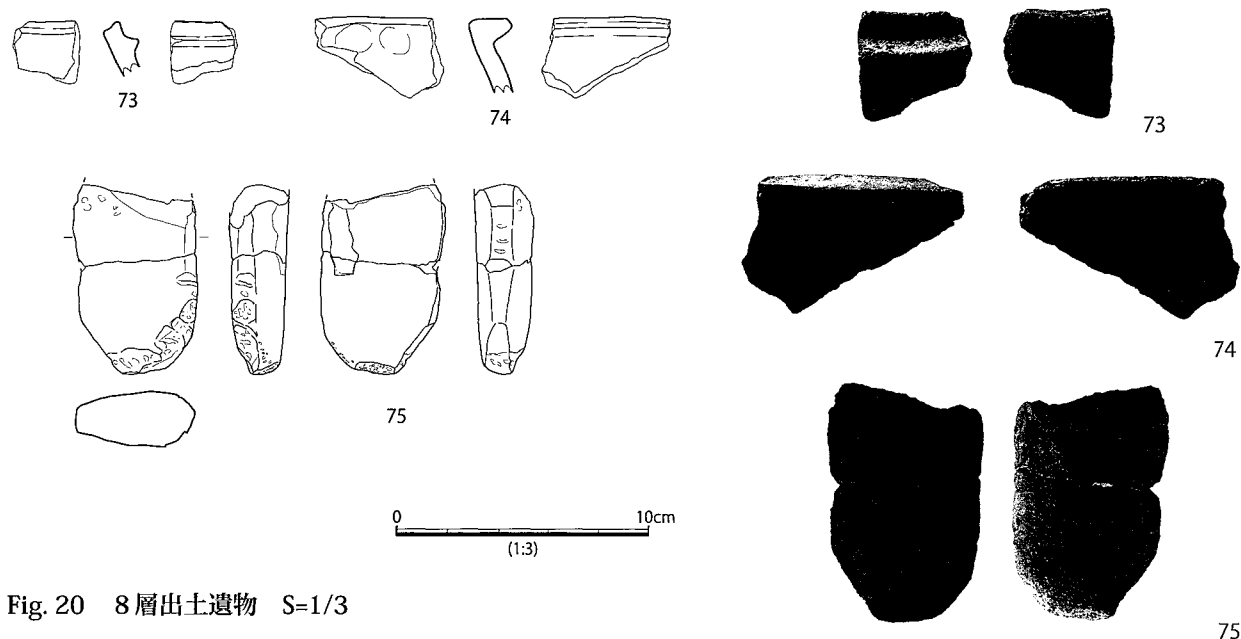


Fig. 20 8層出土遺物 S=1/3

PL. 14 8層出土遺物

遺構の上部は後世に削平を受け、底面の深い部分のみが残存していると推定される。埋土は、8層土に類似する。遺構内からは遺物は出土していない。

SD 3

9層上面で検出された。最大幅280cm、深さ10cmを測り、SD 2と平行して南西―北西方向に走る。SD 3内には、幅約50cmの細い溝が複数状認められるため、複数のSD 2の規模の溝が少しずつずれながら重なり合った結果であると推定される。いずれもSD 2と同様、遺構上部は後世の削平を受けていると考えられる。

SD 3中より遺物は数点出土しているが、そのうち図化したのは1点のみである (Fig. 24・PL. 15)。76は、弥生時代中期甕の底部である。いわゆる「充実脚台」で端部はM字状にくぼんでいる

SK 9

10層上面で検出された。SK9は調査区南東部に位置する。直径約36cm、深さ9cmで浅い。

ピット群

9層上面では37基の、10層上面には28基のピットが検出されたが、SD 2・3同様、いずれも深さが10cm未満で浅い。配置を見ると、P124とP79はSD 3に平行して並んでおり、SD 2と同様、溝状遺構底面付近の残存部である可能性もある。また、調査区南東隅のピット群は、SD 2・3と直行する線上に位置している。

小ピット群

直径約5cm、深さ2～8cmほどの小ピットが9層上面・10層上面のほぼ全面で検出された。ランダムに散布しているようなものと、列状に並ぶもの (PL. 16- 2) も認められた。平面図を見ると、SD 2・3に平行もしくは直行する線上に偏っているようにも見受けられる。重なり合っているものも多い。断面観察のため、2つのサブトレンチを設定した (PL. 16- 3～5)。埋土は、8層土を基調とするものが多いが、9層や10層土の小ブロックが混在しているものも見られた。また、断面形態は円錐形のものの他、底が横方向に曲がるものもあり、いわゆる「稲株痕」であるかは不明である。

足跡状遺構密集エリア

10層上面において、8・9層に類似する土が埋土となった細長い窪みが密集する範囲が検出された (Fig. 25・26, PL. 17- 2・3)。残りのよいものは足跡状を呈しており、また窪みの断面が8～10層土がマーブル状に混在している事から (PL. 17- 1・2)、粘性の高いシルト層を歩き回った痕跡だと考えられる。足跡状遺構がほとんど

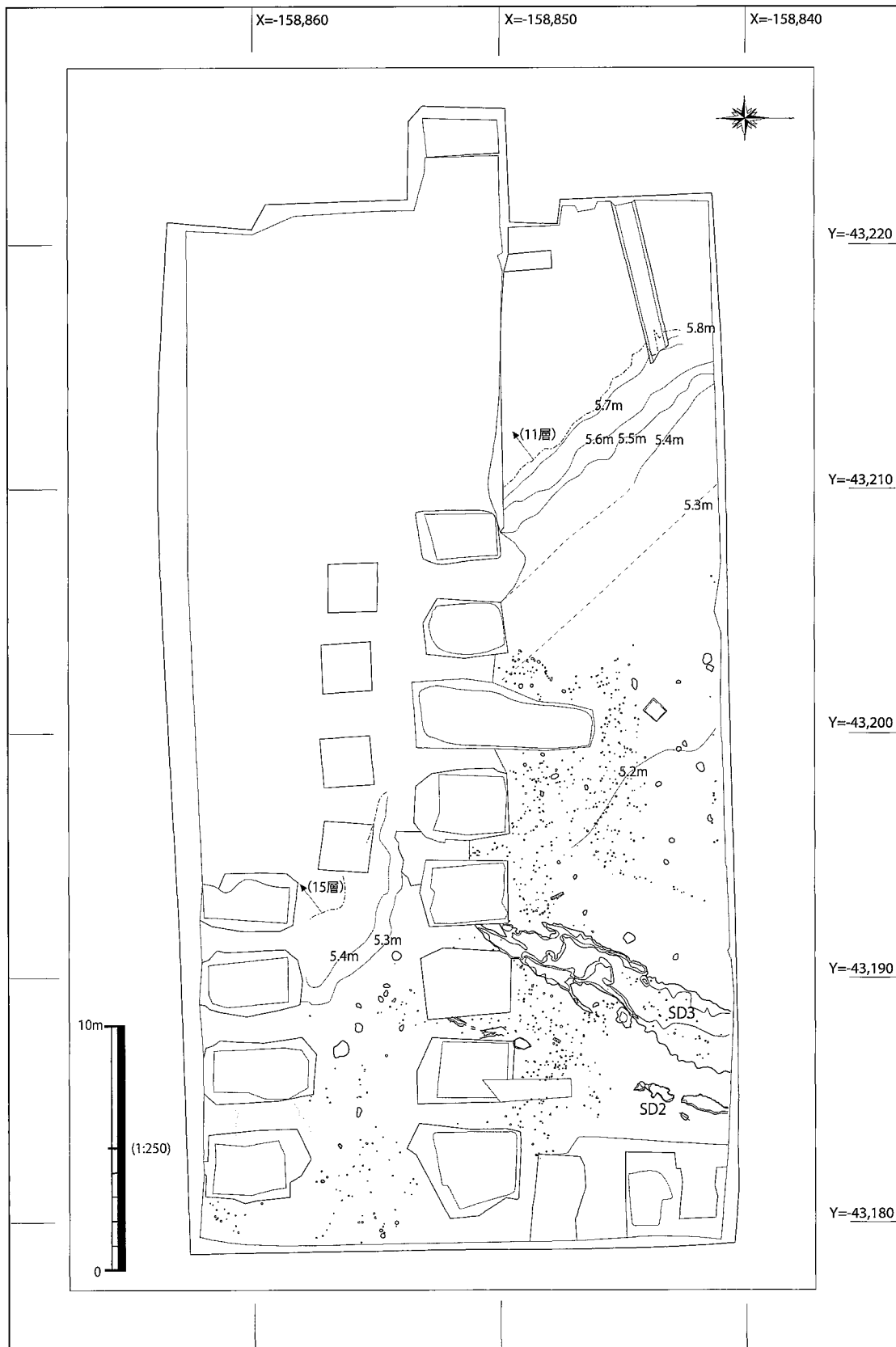


Fig. 21 9層上面遺構検出状況 S=1/250



Fig. 22 9層上面遺構検出状況（東部） S=1/100

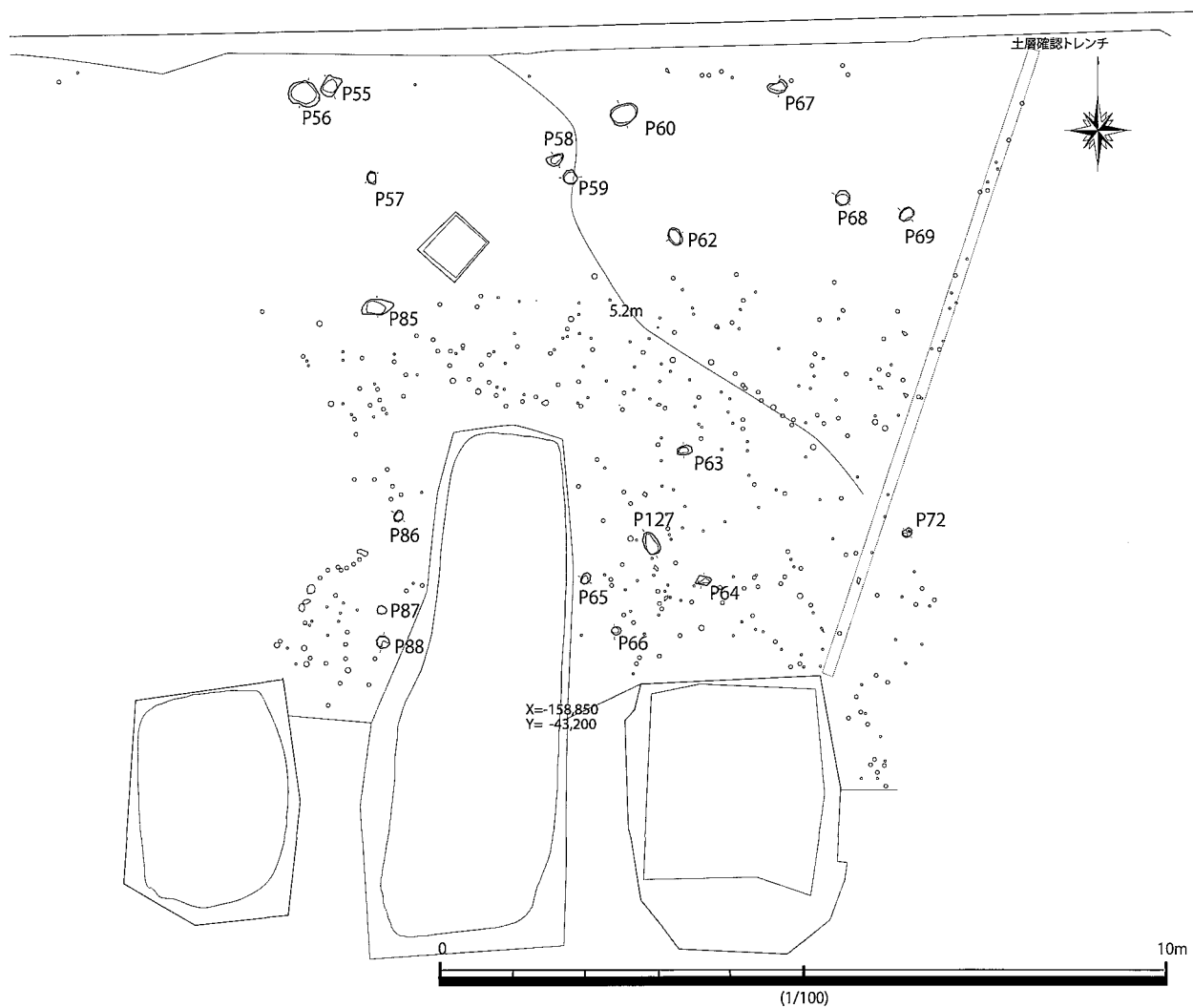


Fig. 23 9層上面遺構検出状況（西部） S=1/100

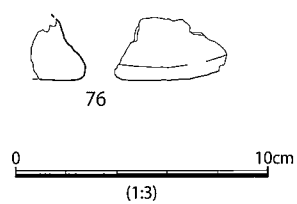
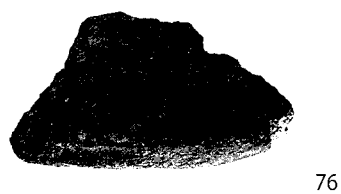


Fig. 24 SD 3 出土遺物



PL. 15 SD 3 出土遺物

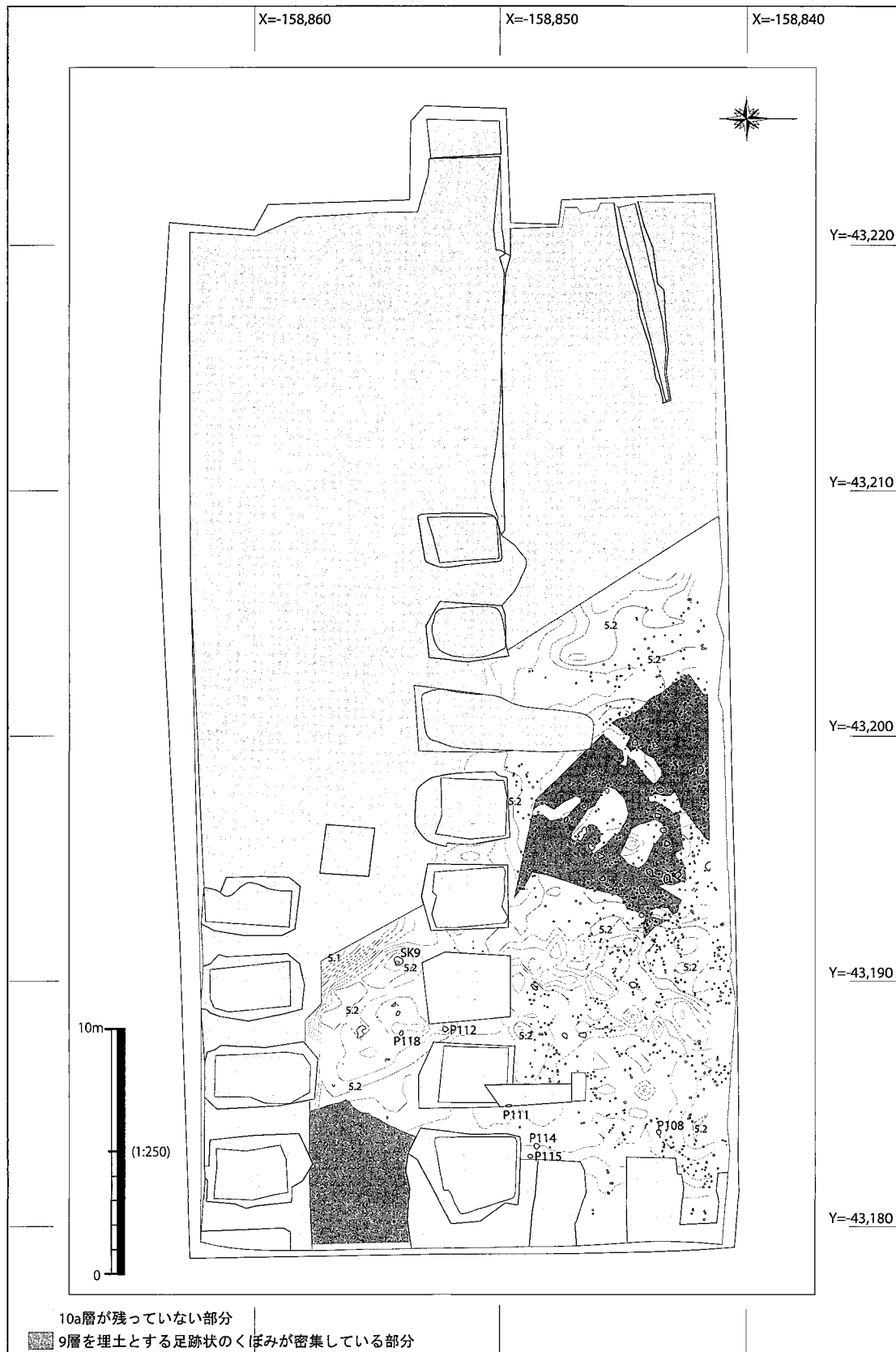


Fig. 25 10層上面遺構検出状況 S=1/250

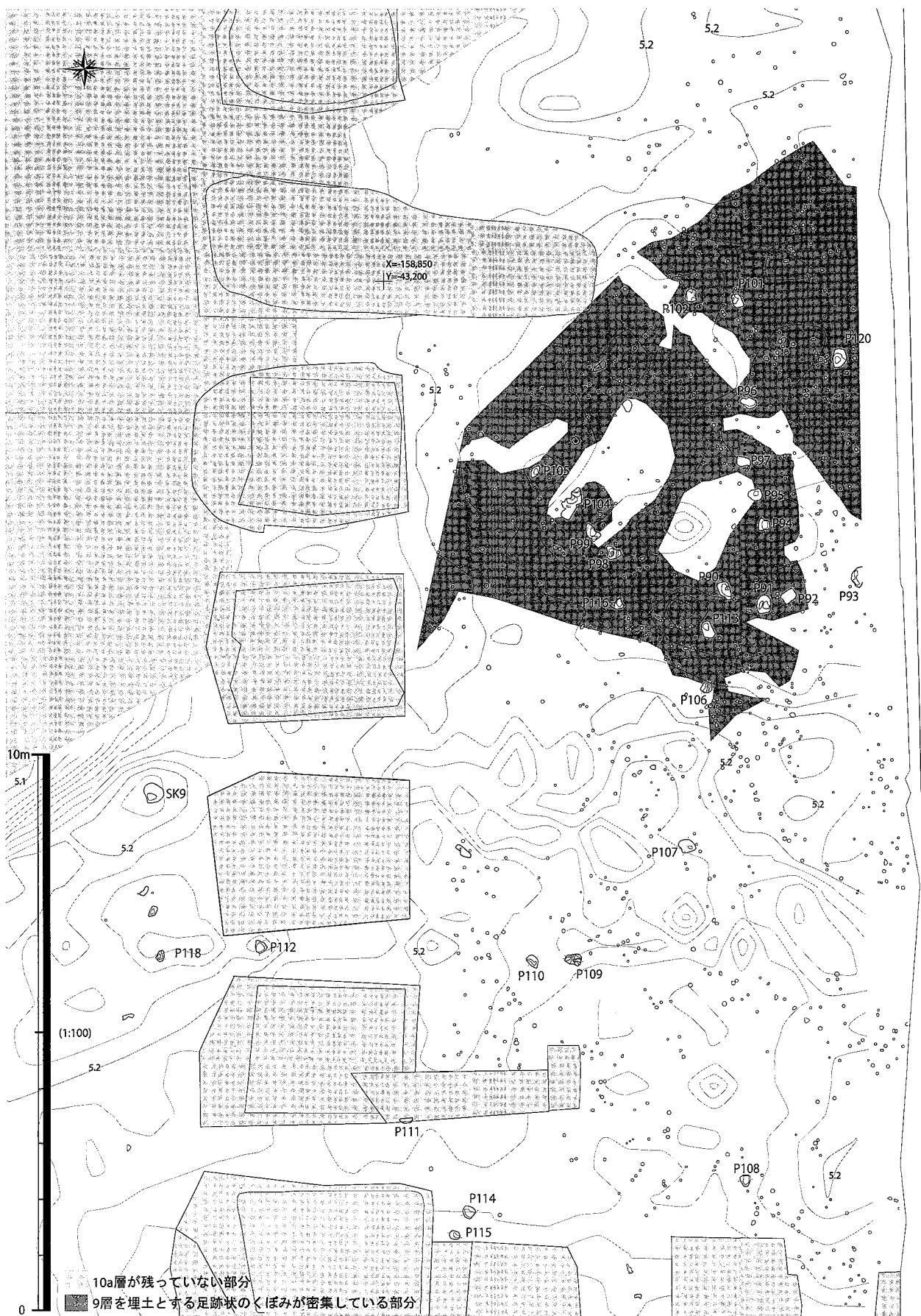


Fig. 26 10層上面遺構検出状況（調査区北東部） S=1/100

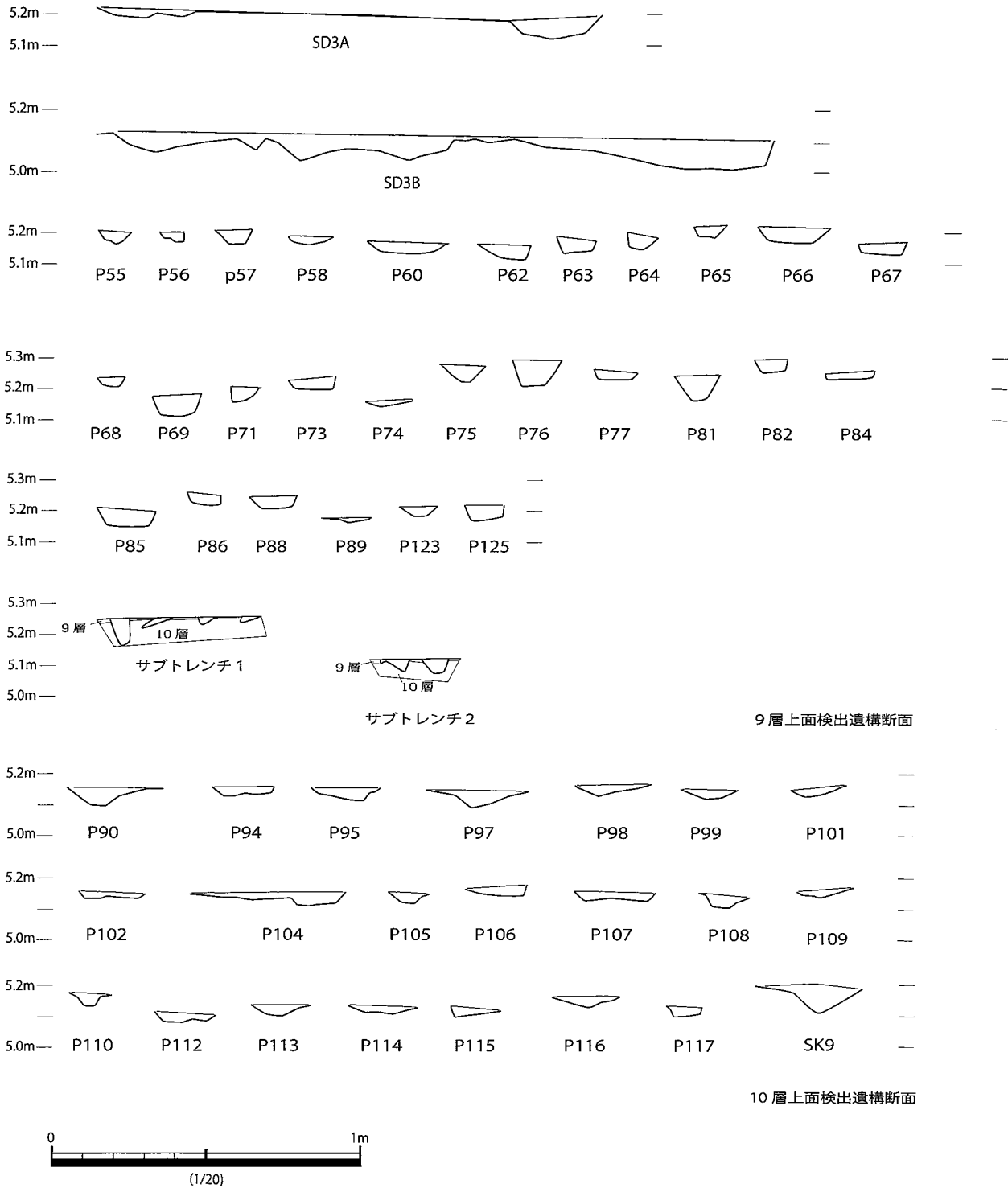
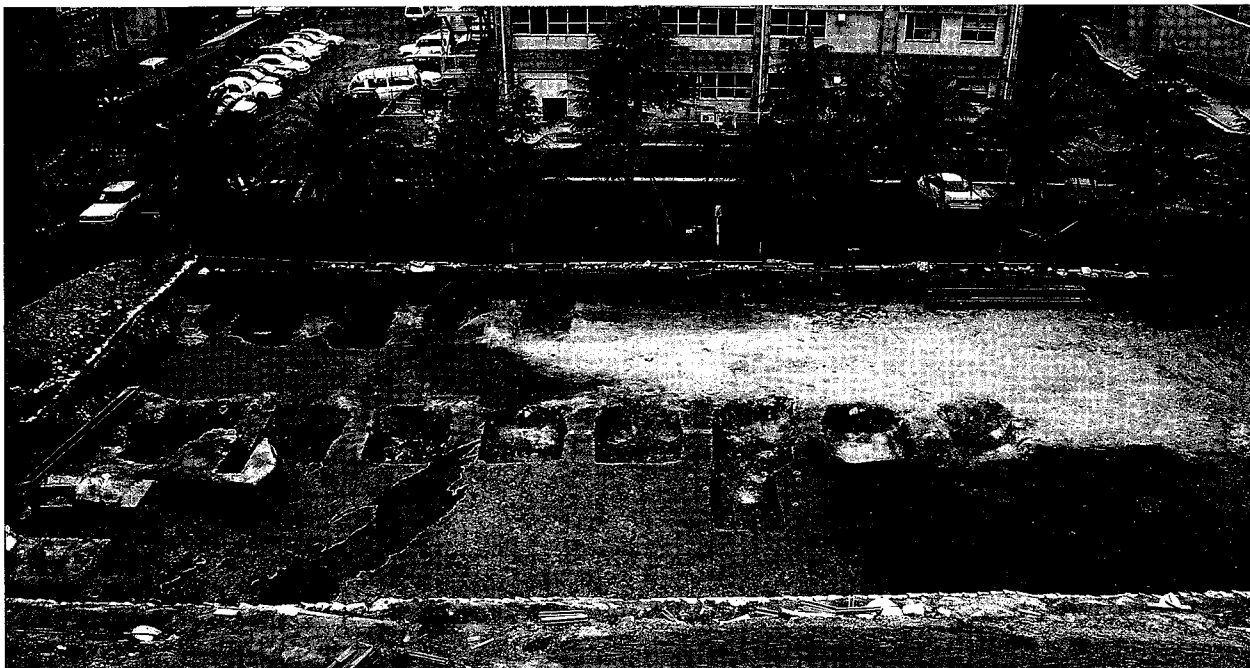


Fig. 27 9・10層上面検出遺構断面図 S=1/20

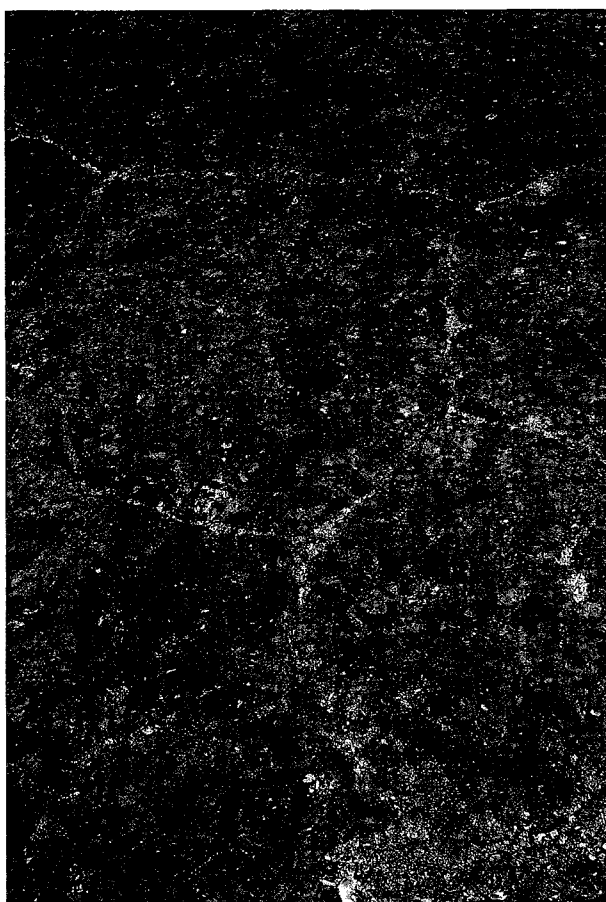
ない部分が带状に検出できた事から、足跡状遺構が密集している部分が水田内で、確認できない部分が畦畔の範囲であったと推定される。

2 9・10層出土遺物 (Fig. 28・PL, 20)

77は9層出土遺物で弥生土器である。細い三角突帯に細かい刻目が施されている。甕か壺の胴部であると考え



1 9層上面検出状況（北から）



2 9層上面小ピット検出状況



3 小ピット断面 サブトレンチ1（南西から）

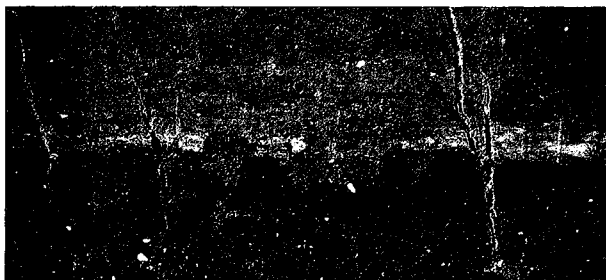


4 小ピット断面 サブトレンチ2（西から）



5 小ピット断面

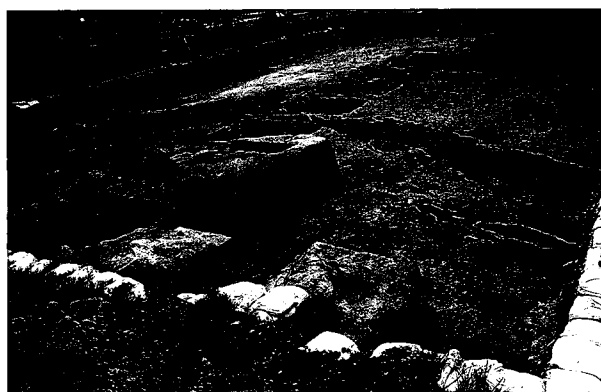
PL. 16 9・10層の状況（1）



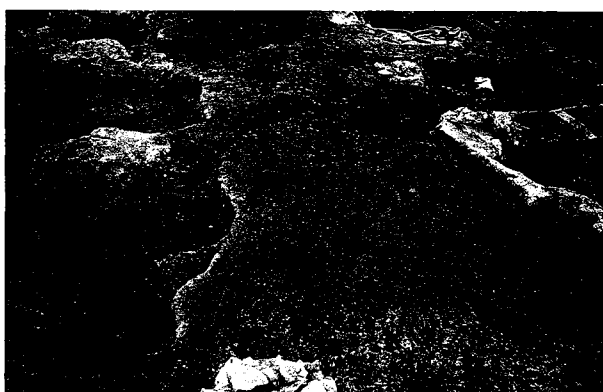
1 8～10層の混在状況(1)



2 8～10層の混在状況(2)



3 9層上面遺構完掘状況_SD 2・3 (北東から)



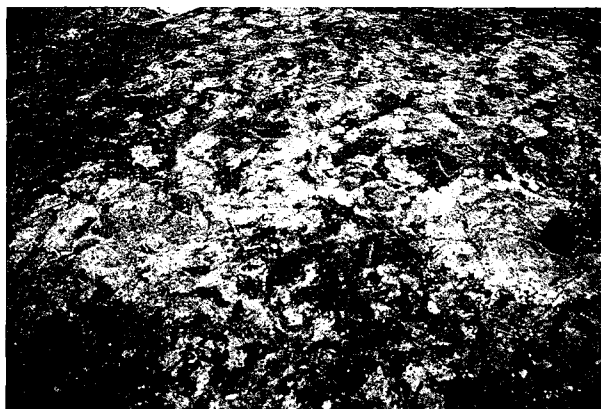
4 10層上面検出状況(東から)



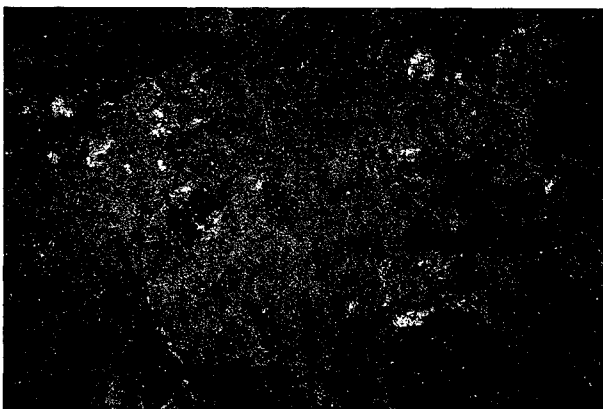
5 10層上面検出状況(南から)



6 10層上面小ピット検出状況(北から)

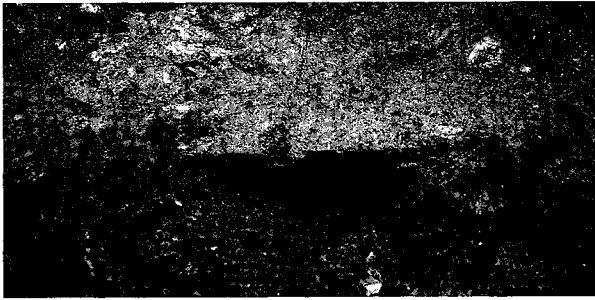


7 SK80・検出状況



8 9層上面小ピット検出状況

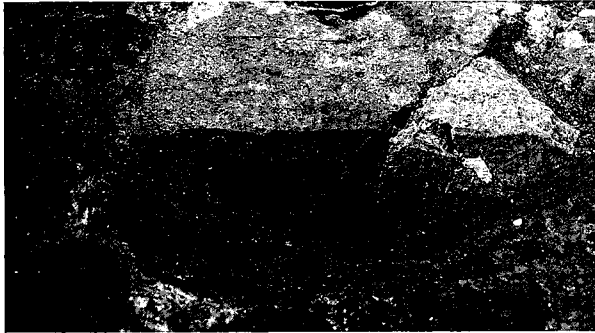
PL. 17 9・10層の状況(2)



1 SK9 埋土



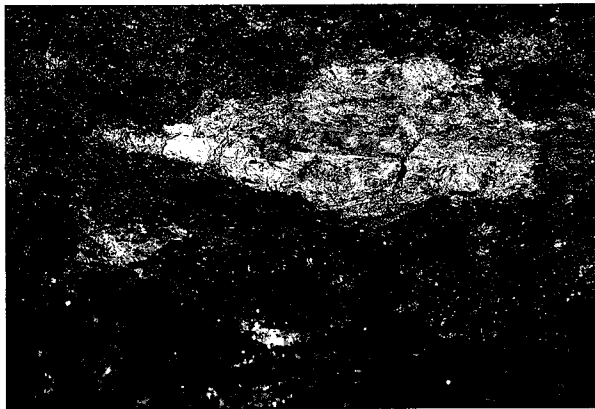
2 P90 埋土



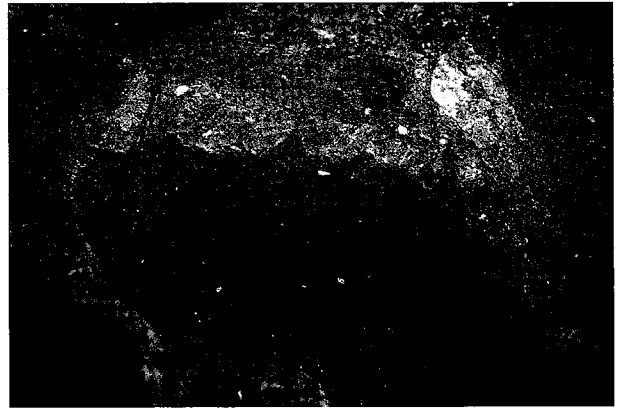
3 P105 埋土



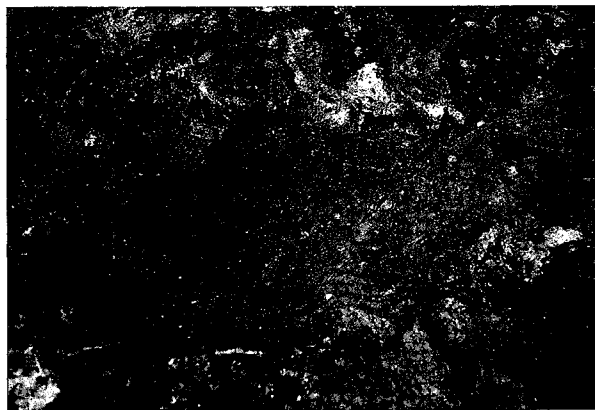
4 P111 埋土



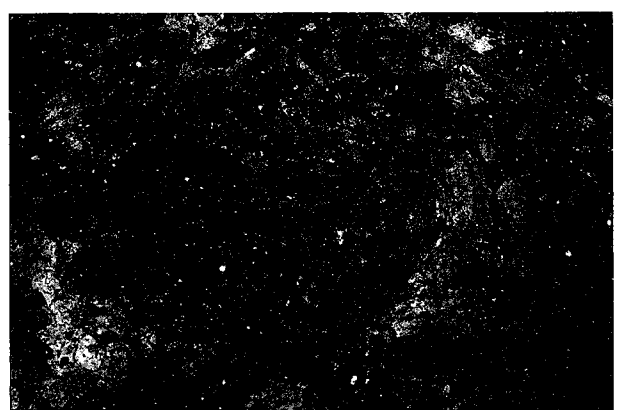
5 P116 埋土



6 P119 埋土

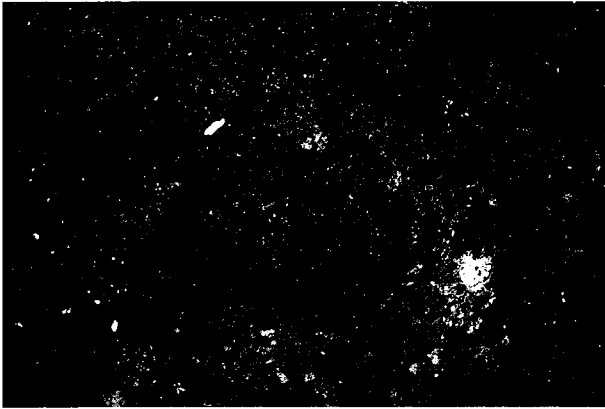


7 P90 完掘



8 P106 完掘

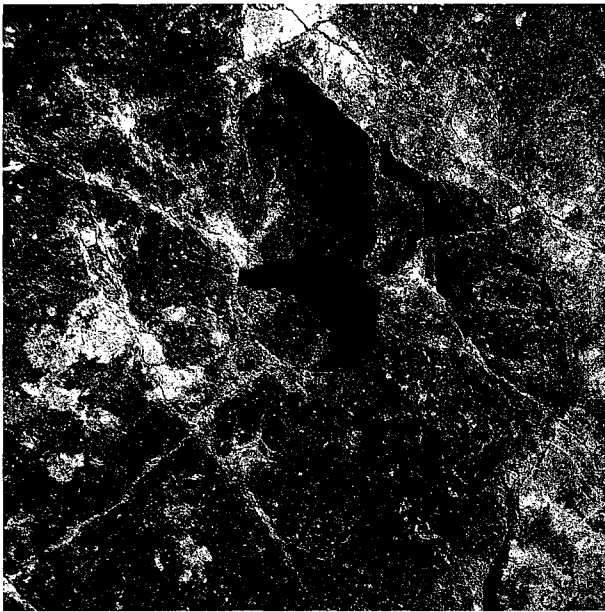
PL. 18 9・10層の状況(3)



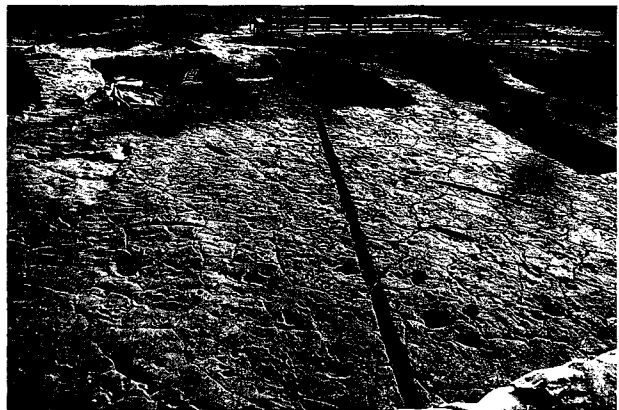
1 P108 完掘



4 10層上面完掘状況（東から）



2 SK9 完掘



5 10層上面完掘状況（北から）



3 10層上面完掘状況（北から）



6 10層上面完掘状況（北から）

PL.19 9・10層の状況（4）

られる。78は10層出土遺物である。弥生～古墳時代の壺胴部であると考えられる。外面には細いが丸い断面形の突帯に丸い刻目が施されている。

第7節 11層～13層検出遺構・出土遺物

1 11層出土遺物 (Fig. 28 PL. 20)

79は11層から出土した。外面に1条の横沈線が施されている。また、外面はススが付着しており、甕だと推定される。弥生中期土器の可能性が高い。

2 13層中検出足跡状遺構 (Fig. 30 PL. 21)

調査区北東隅に設置した27トレンチにおいて、泥炭層である13層中より足跡状遺構が検出された。遺構埋土は細砂で、河川氾濫によってもたらされたものであると考えられる。足跡状遺構は、東南東一西北西に並んでおり、窪みの形状を見ると西側が平らで東側が丸いことから、西側に向かって歩いていた痕であると推定される。周辺での遺物等の出土はなかった。

3 13層出土遺物 (Fig. 32 PL. 22)

13層中からは、軽石製品が2点出土している。80は舟形の平面形で、上面中央に深い凹みを有するものである。表面に磨面が認められる。81は、平面形は五角形状を呈し、側面は磨って平坦面を作り出しているものである。上面のみ少し窪んでいる。

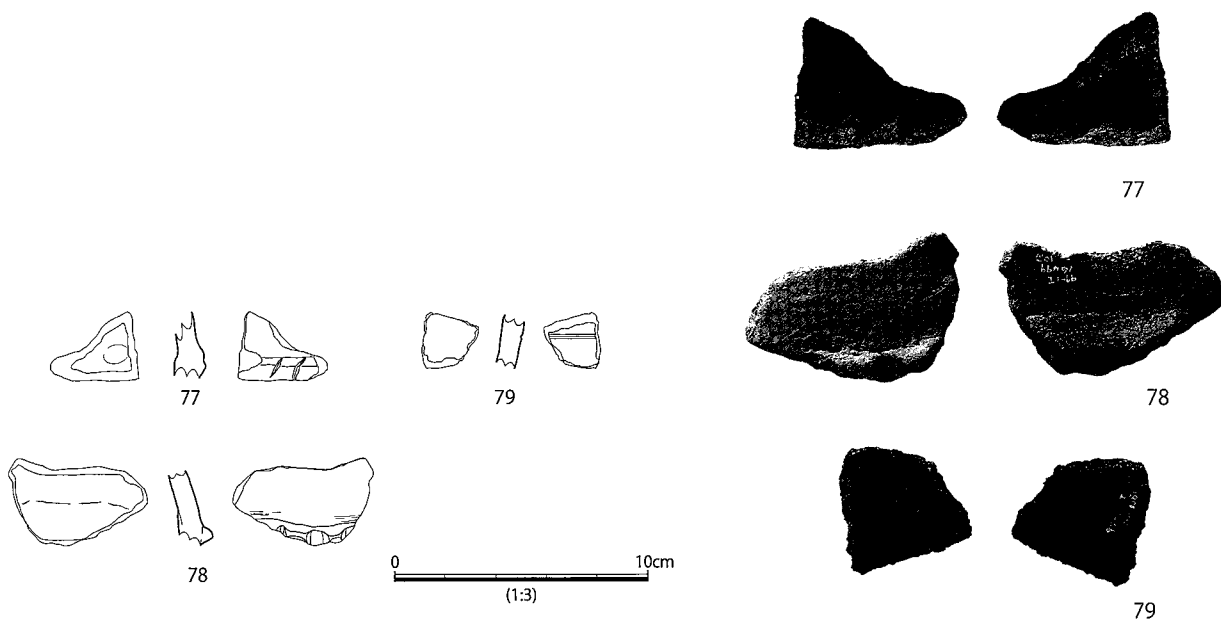


Fig. 28 9・10・11層出土遺物 S=1/3

PL. 20 9・10・11層出土遺物

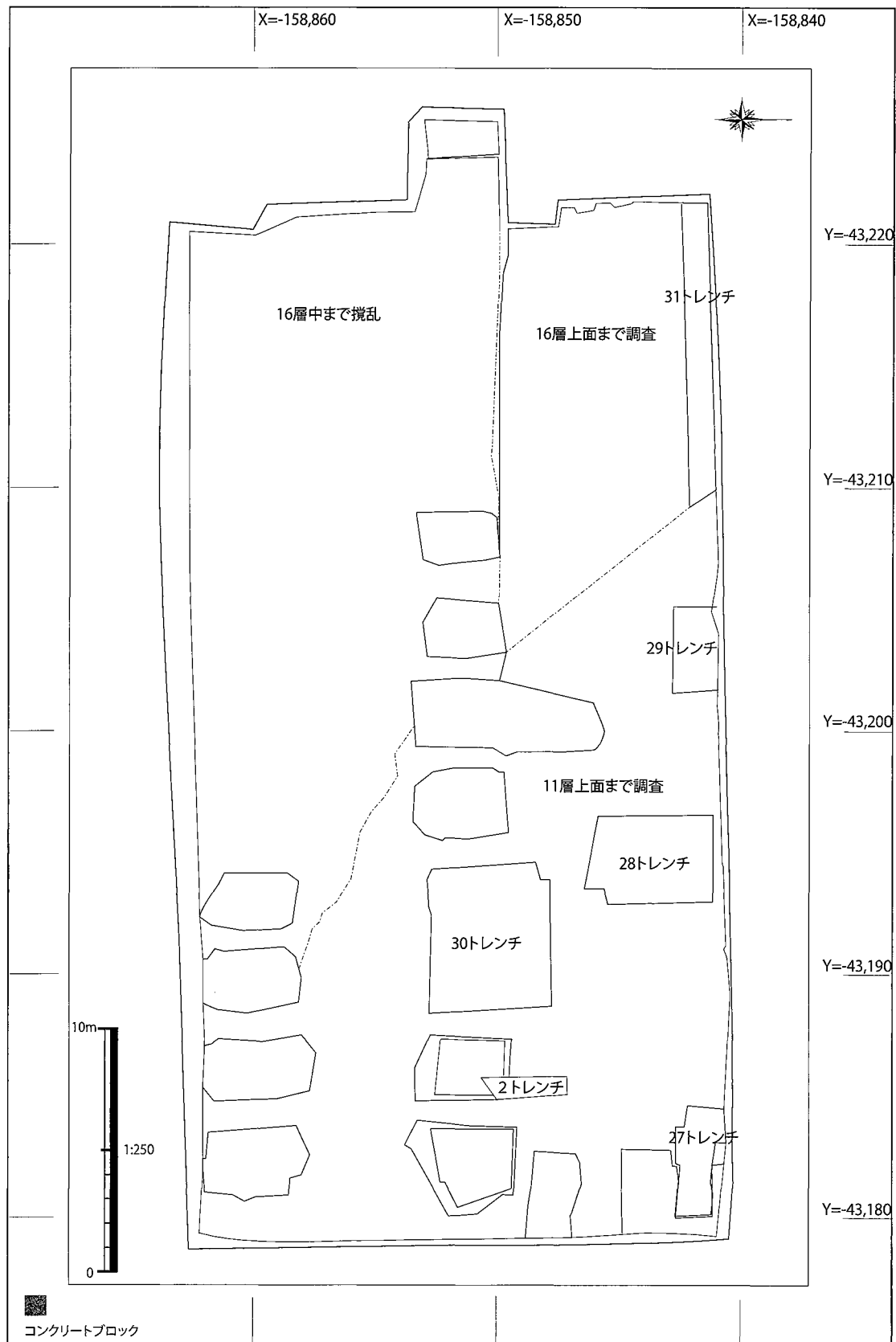


Fig. 29 11層以下の調査区 S=1/250

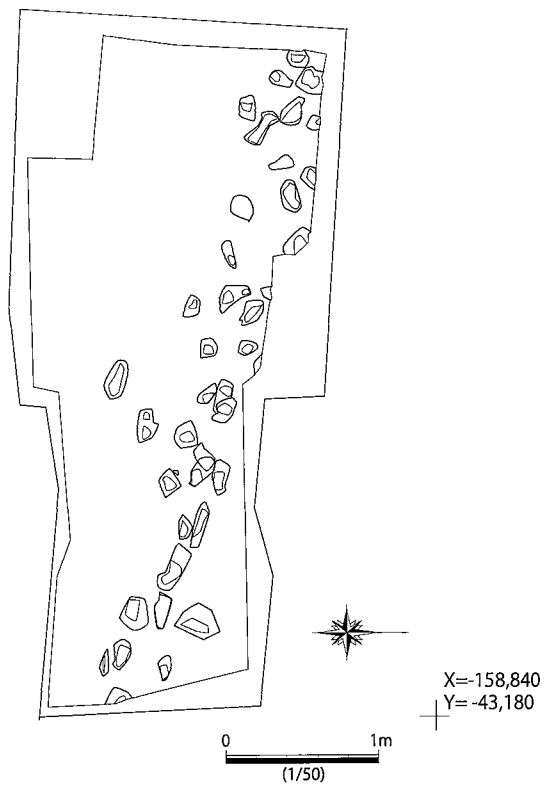


Fig. 30 27 トレンチ 13 層中検出足跡状遺構 S=1/50



1 13 層中足跡状遺構検出状況 (東から)



3 13 層中足跡状遺構完掘状況 (東から)



2 13 層中足跡状遺構検出状況 (南から)

PL. 21 13 層中検出足跡状遺構

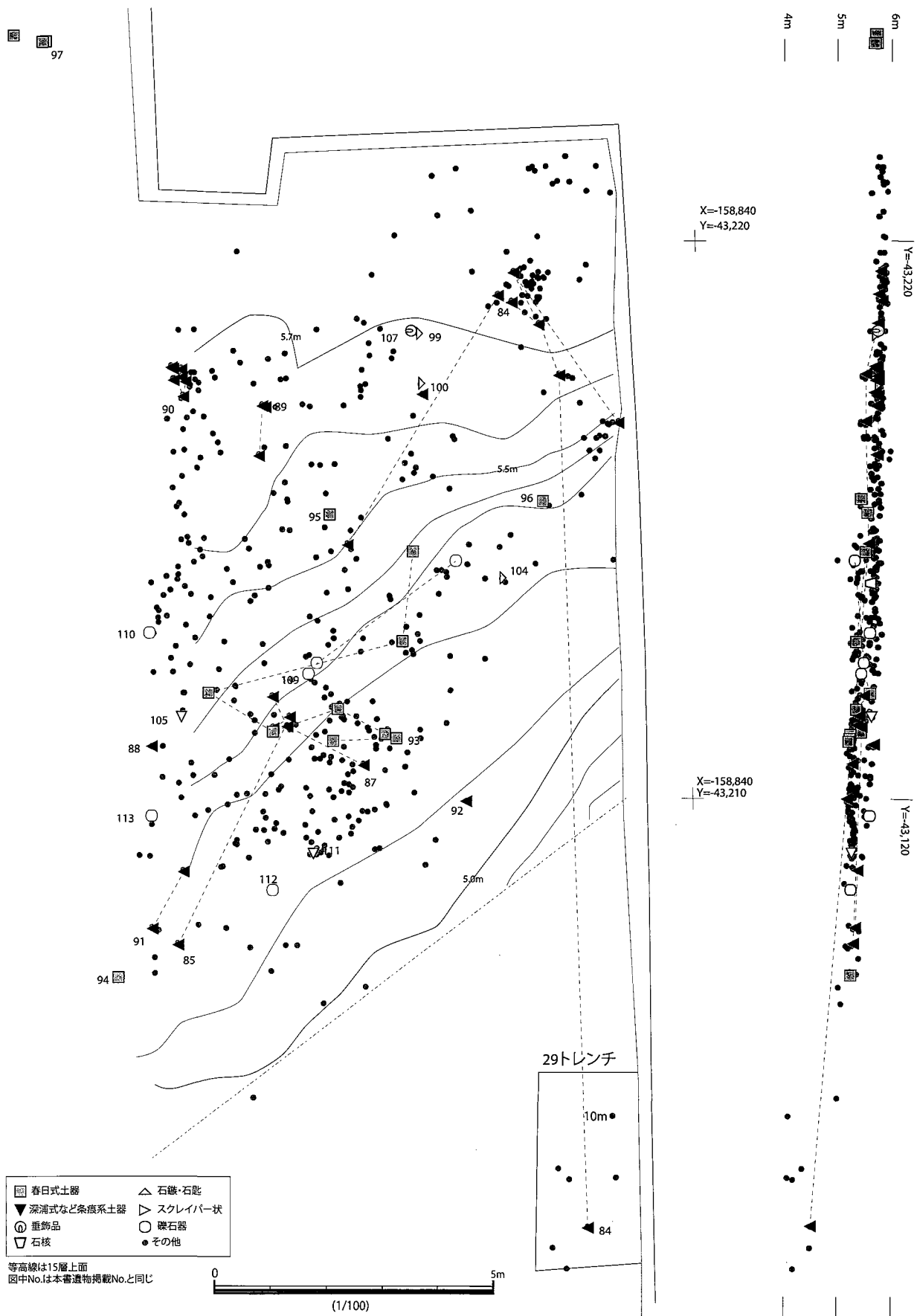


Fig. 31 13～15層出土遺物分布図 S=1/100

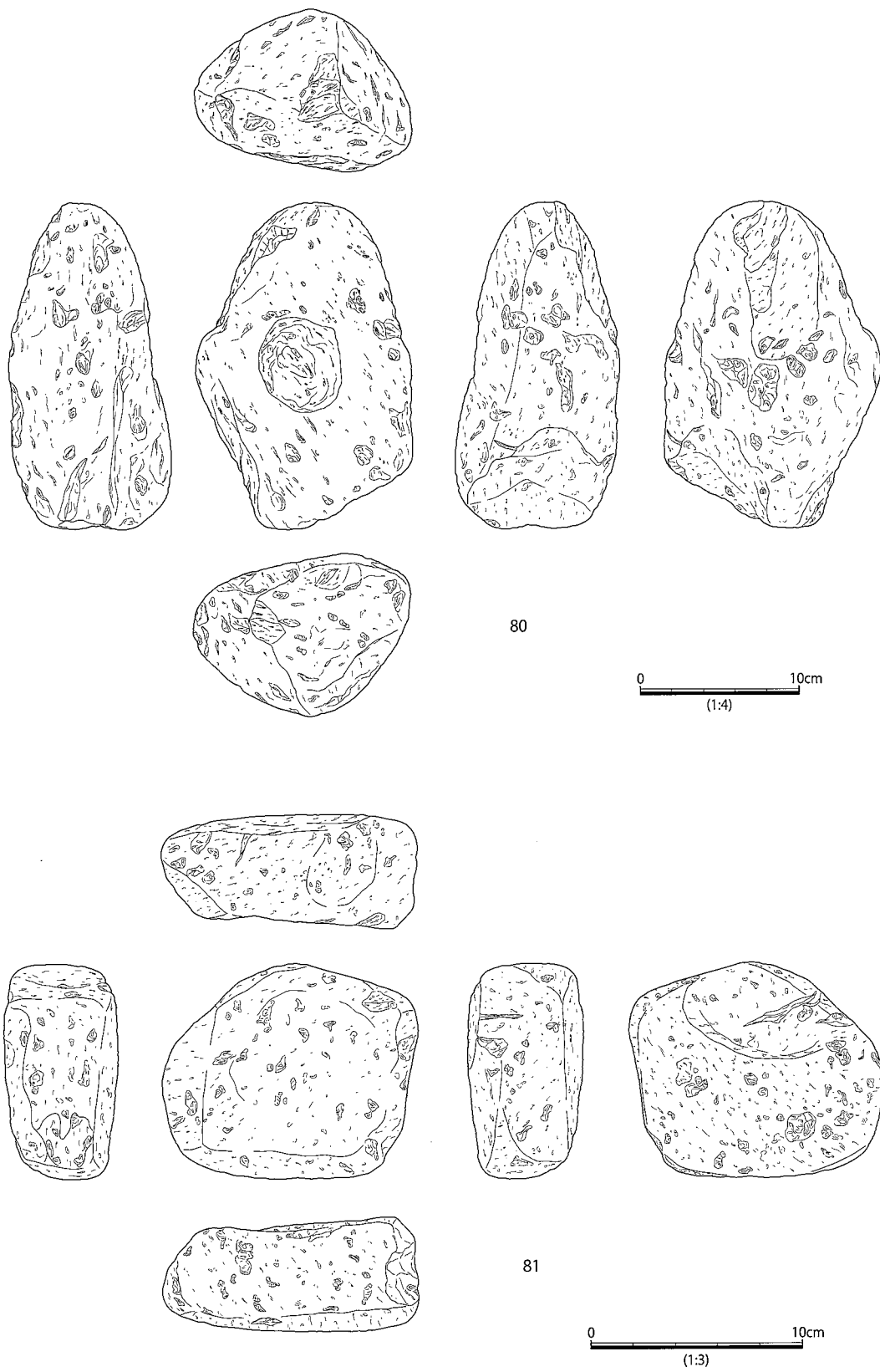
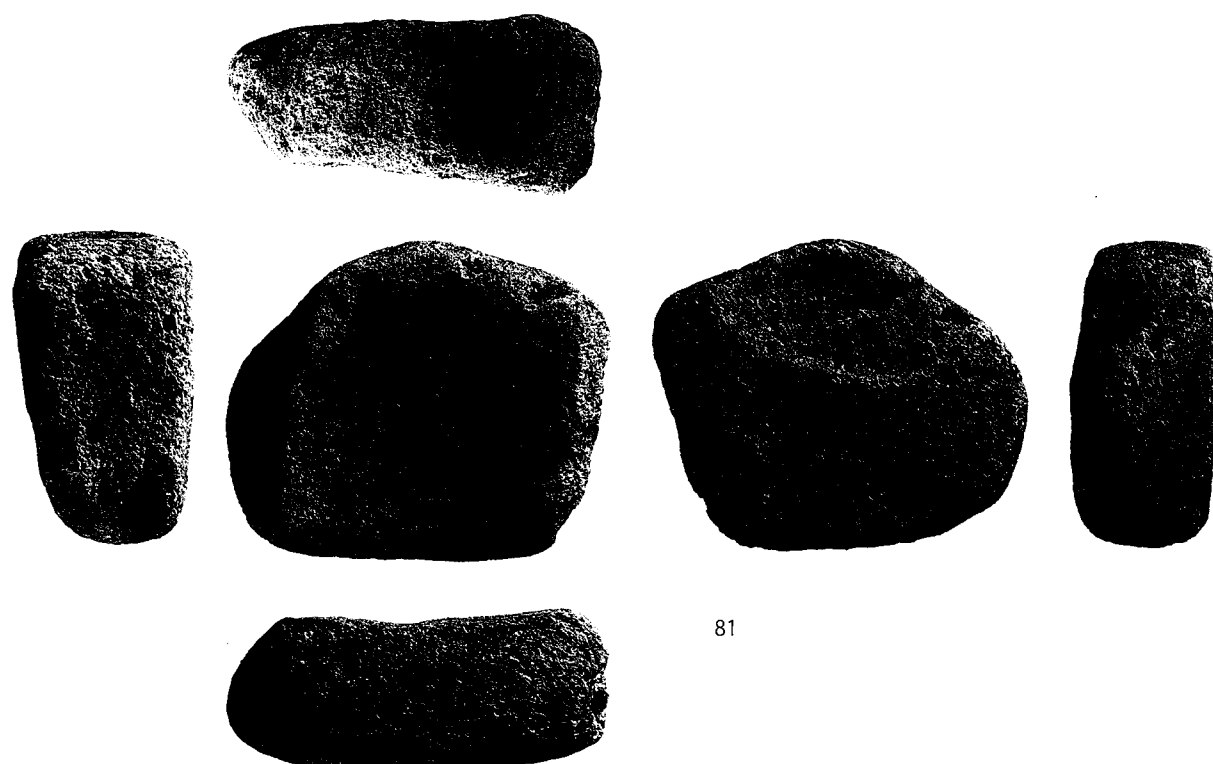
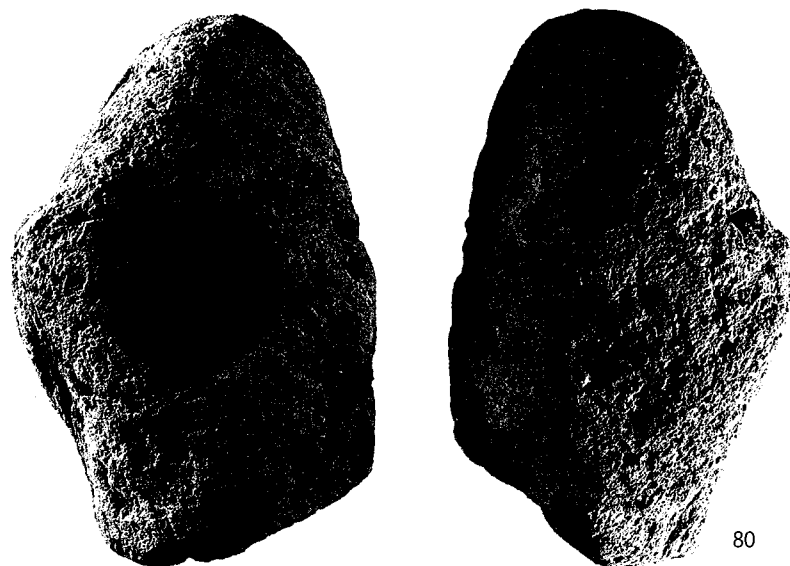


Fig. 32 13層出土遺物 80: S=1/4, 81: S=1/3



PL. 22 13層出土遺物

第8節 14・15層出土遺物

1 14層出土遺物 (Fig. 33～37 PL. 23～27)

14層は縄文時代中期の遺物が出土しており、調査区北西部にその分布が集中した (Fig. 30)。

土器

84・86・89は深浦式の日木山段階の深鉢である。84は同一個体と考えられる破片が多く出土したが、全てを接合することができなかったため、図化できた部分の実測図を84-1～4に分割して掲載した。口縁部から胴部だが、外面全面に斜位と横位の貝殻刺突文を交互に施し、外面口縁部付近には横位と波状の貝殻刺突による刻目突帯が貼り付けられている。内面は、口縁部付近に縦位の連続した貝殻刺突文とその直下に一部、横位の1条の貝殻刺突文が認められる。波状口縁を呈すると推定される。89は胴部で、外面には横位の2条の貝殻刺突による刻目突帯を貼付し、それぞれの突帯の直下に貝殻連点文が施されている。86は外反気味の口縁部で、外面にランダムな貝殻連点文が施されている。

85は野久尾式の深鉢口縁部である。外面には、4条の突帯による下向きの重弧文が施されている。87は無文の深鉢口縁部である。内外面ともに粗い条痕が施されている。88も無文の深鉢口縁部であるが、口縁部上面に、刻目が施されている。

90～92は深鉢胴部である。いずれも内外面ともに粗い条痕が施されている。器壁の厚さや胎土などから、上述した深浦式に伴うものと推定される。

82・83・93～98は春日式の深鉢である。いずれも器壁が薄く、胎土も深浦式に比べて、砂粒が細かく精緻である。93は口縁部でキャリパー状に内湾する形態を呈し、外面頸部以上に突帯と沈線による文様が施されている。突帯はゆるやかな波状を呈し、突帯以上は横位、波状、斜位の沈線で埋められている。94・95は無文のキャリパー状を呈する口縁部だが、94の口縁部上端は列点文を有する。82は胴部片だが、外面側から施された焼成後穿孔が認められる。83は外面に波状の突帯が貼付されている。96も外面に弧状の突帯が施されており、両者とも口縁部近くの部位であろうと推定される。97・98は平底の底部である。

石器

99～102は石鏃である。99・100・102は鋸歯状に加工されている。99・100は基部の挟りが深い形状を呈する。102は基部の挟りが浅く、二等辺三角形形状を呈する。101の脚部は欠損している。

103・104は小型の石匙である。つまみはほぼ中央部に位置し、刃部は平坦である。

105は剥片である。片面に連続する微小剥離痕が分布し、下縁刃部に横方向の線状痕とまばらな微小剥離が認められる。

106は小礫を打ち欠いた痕跡が残る残核である。

107は垂飾品であるが、玦状耳飾りの転用品である。欠損部を再度丁寧に磨り、上面近くに両面穿孔を施している。

108・109は砥石であると推定されるものである。108は砂岩製で、高所部が磨られて平坦面が認められる。109は安山岩製で片面に平坦な磨り面が認められる。

110は硬質砂岩の礫器である。剥離により、刃部を作り出している。

111～113は安山岩製の薄片である。111は微小剥離痕の見られる。112は両側縁に加工が見られ、一側縁側は刃部がつぶれている。113は剥離により、刃部を形成している。

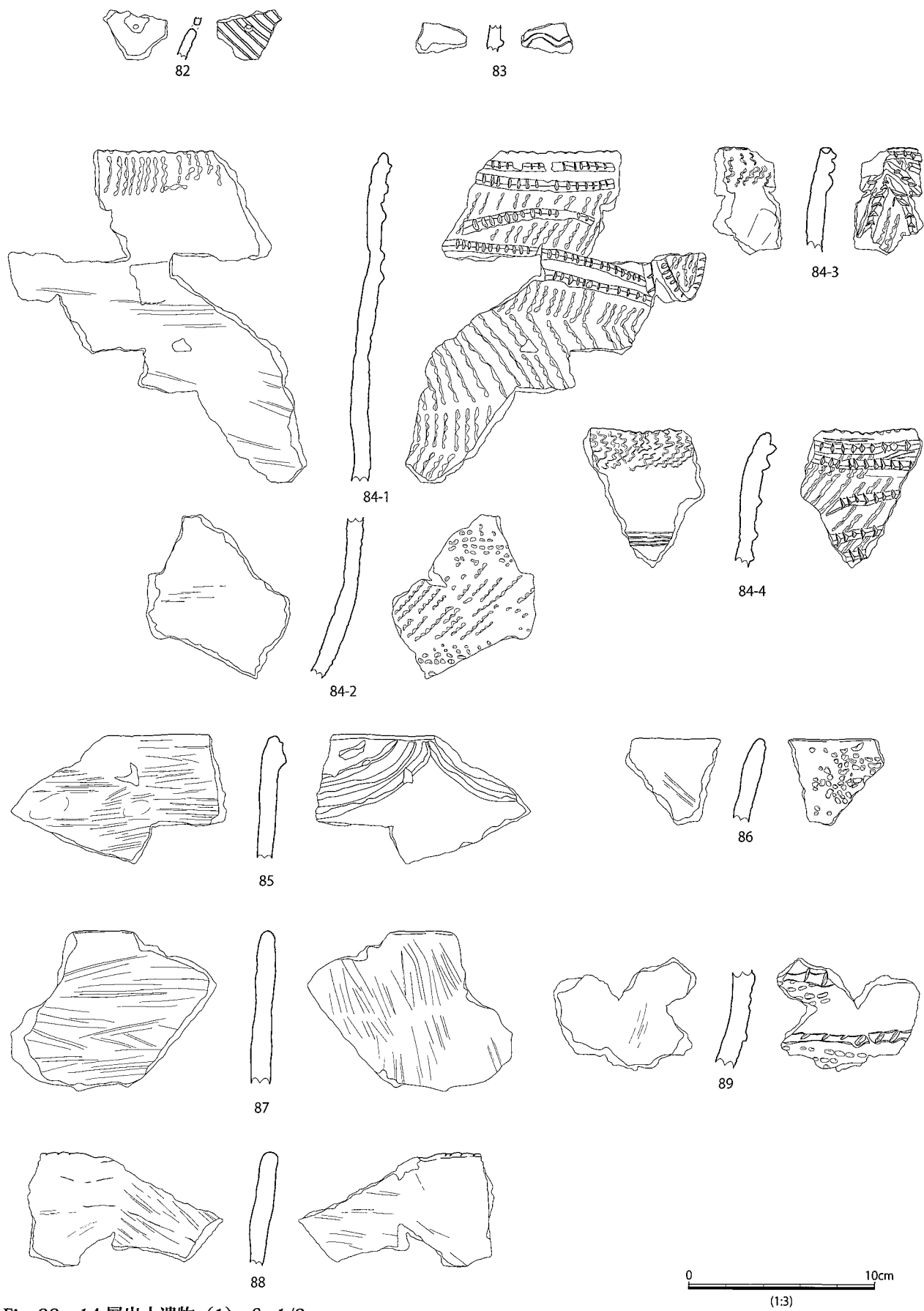


Fig. 33 14層出土遺物(1) S=1/3

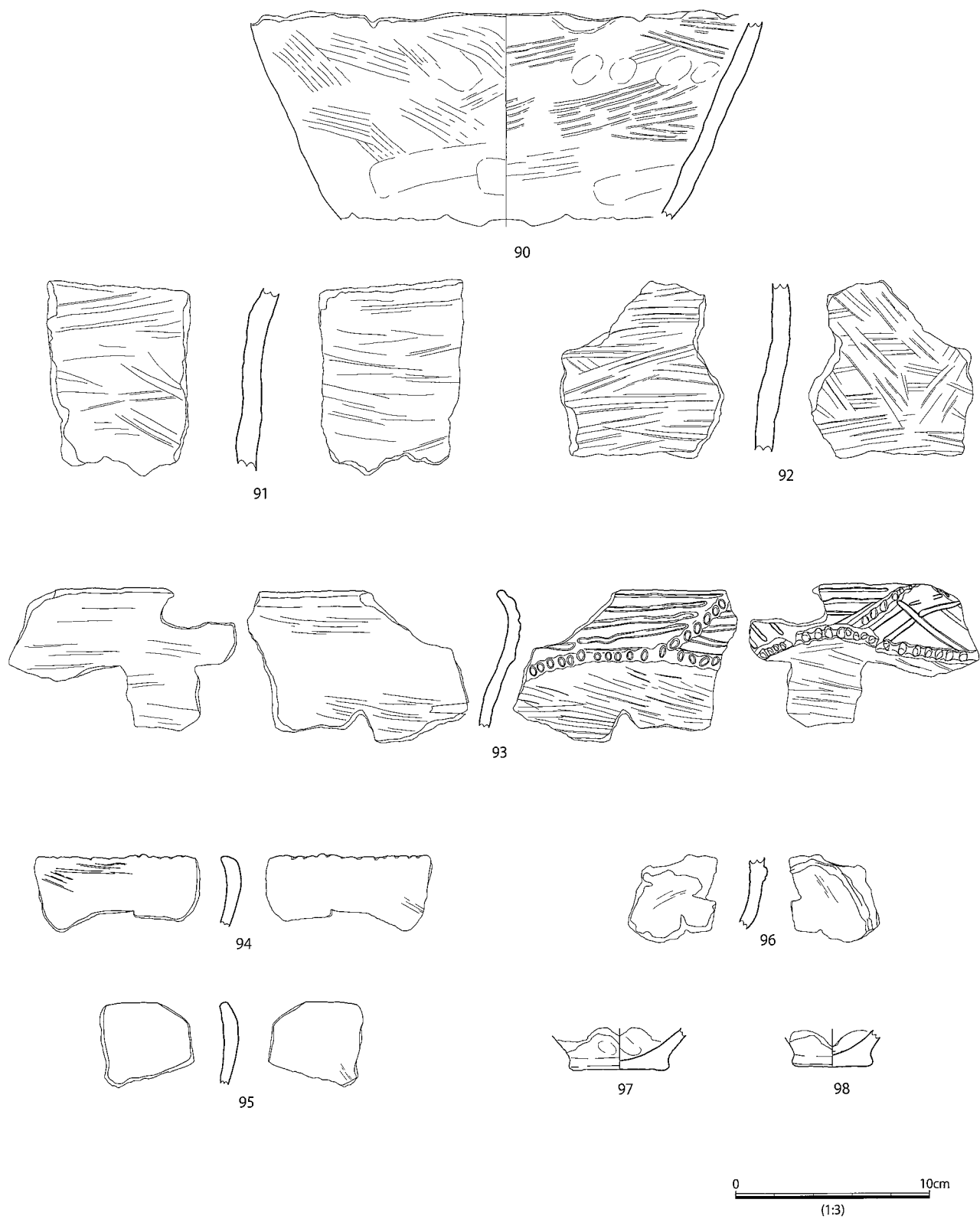


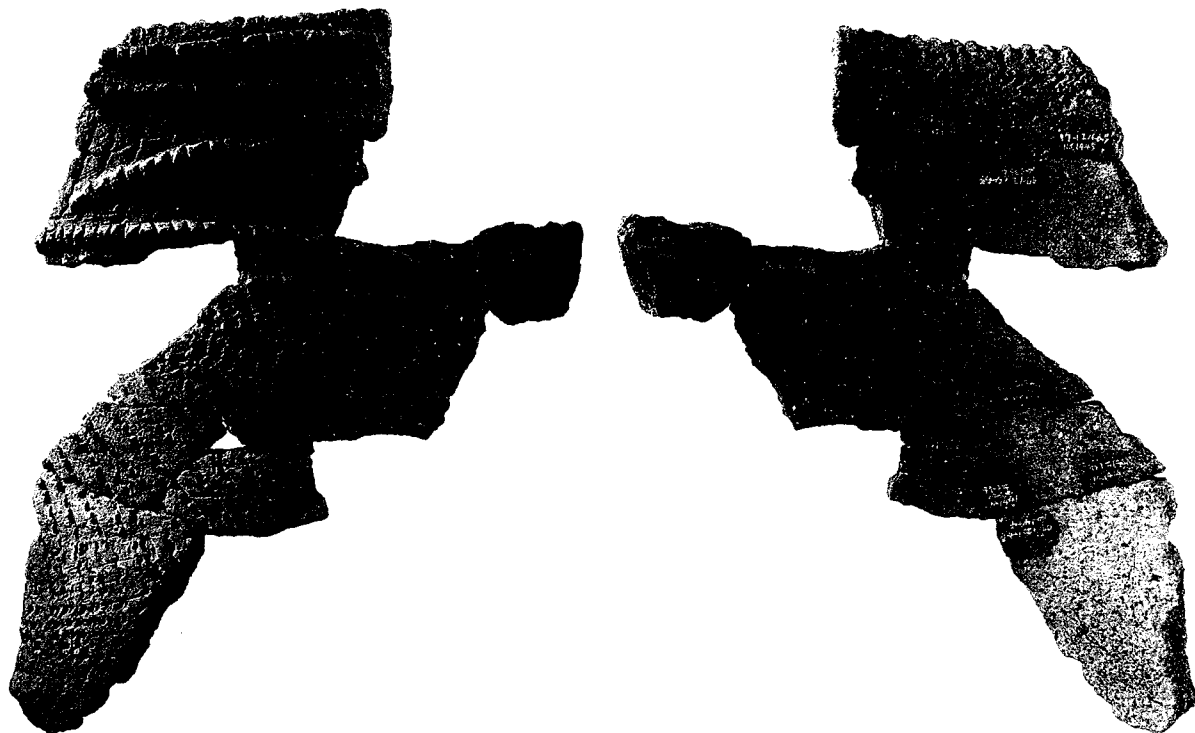
Fig. 34 14層出土遺物(2) S=1/3



82



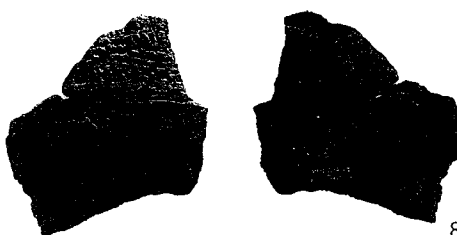
83



84-1



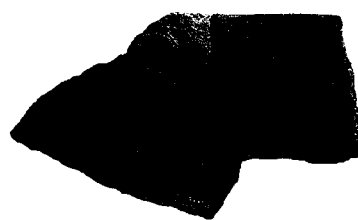
84-3



84-2



84-4

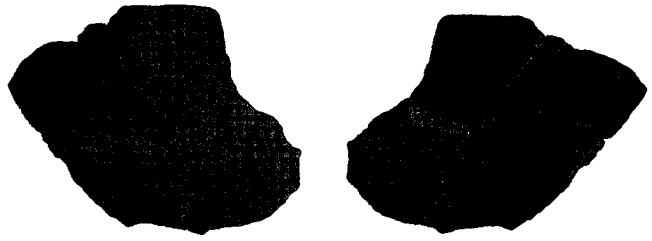


85

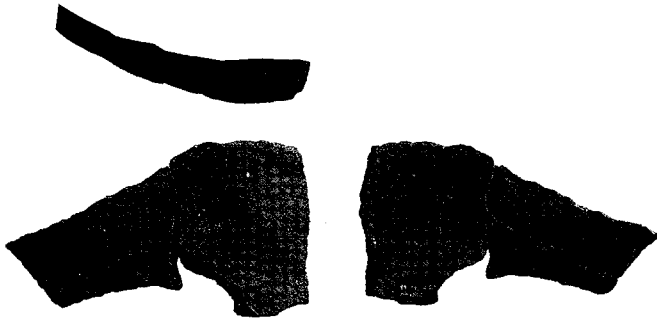
PL. 23 14層出土遺物(1)



86



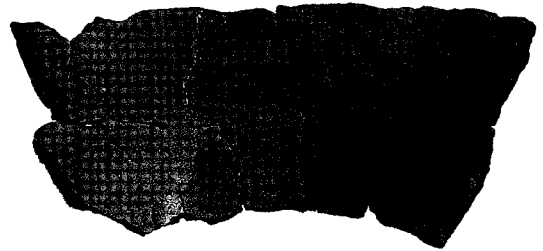
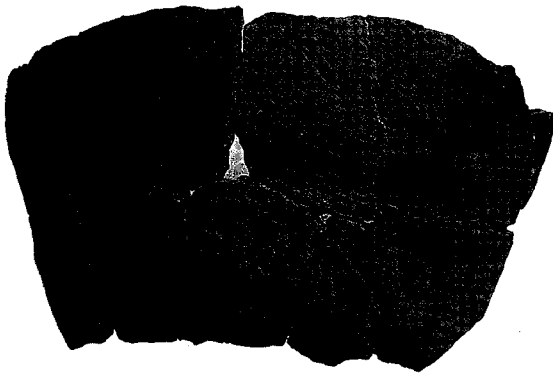
87



88



89



90

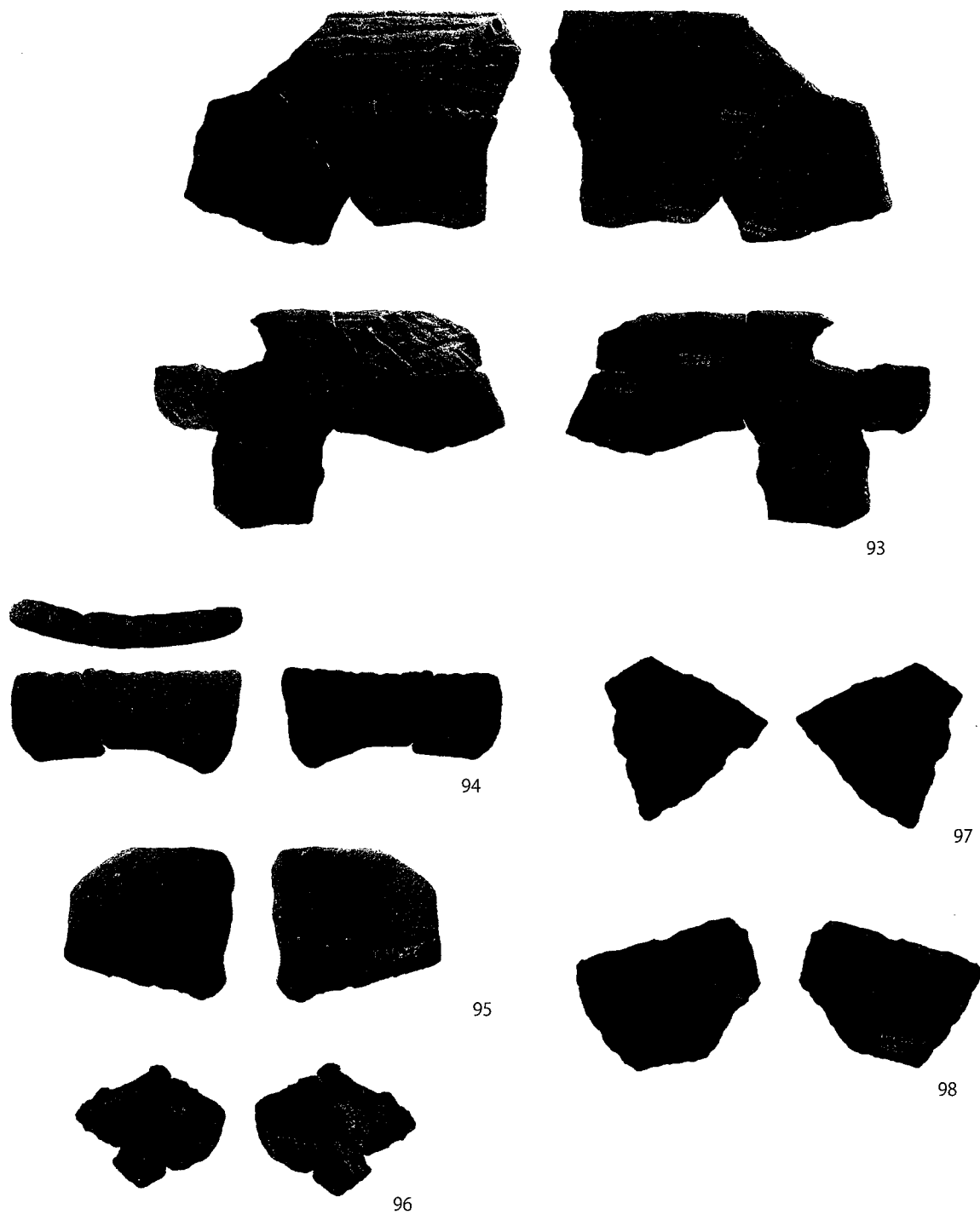


91



92

PL. 24 14層出土遺物(2)



PL. 25 14層出土遺物(3)

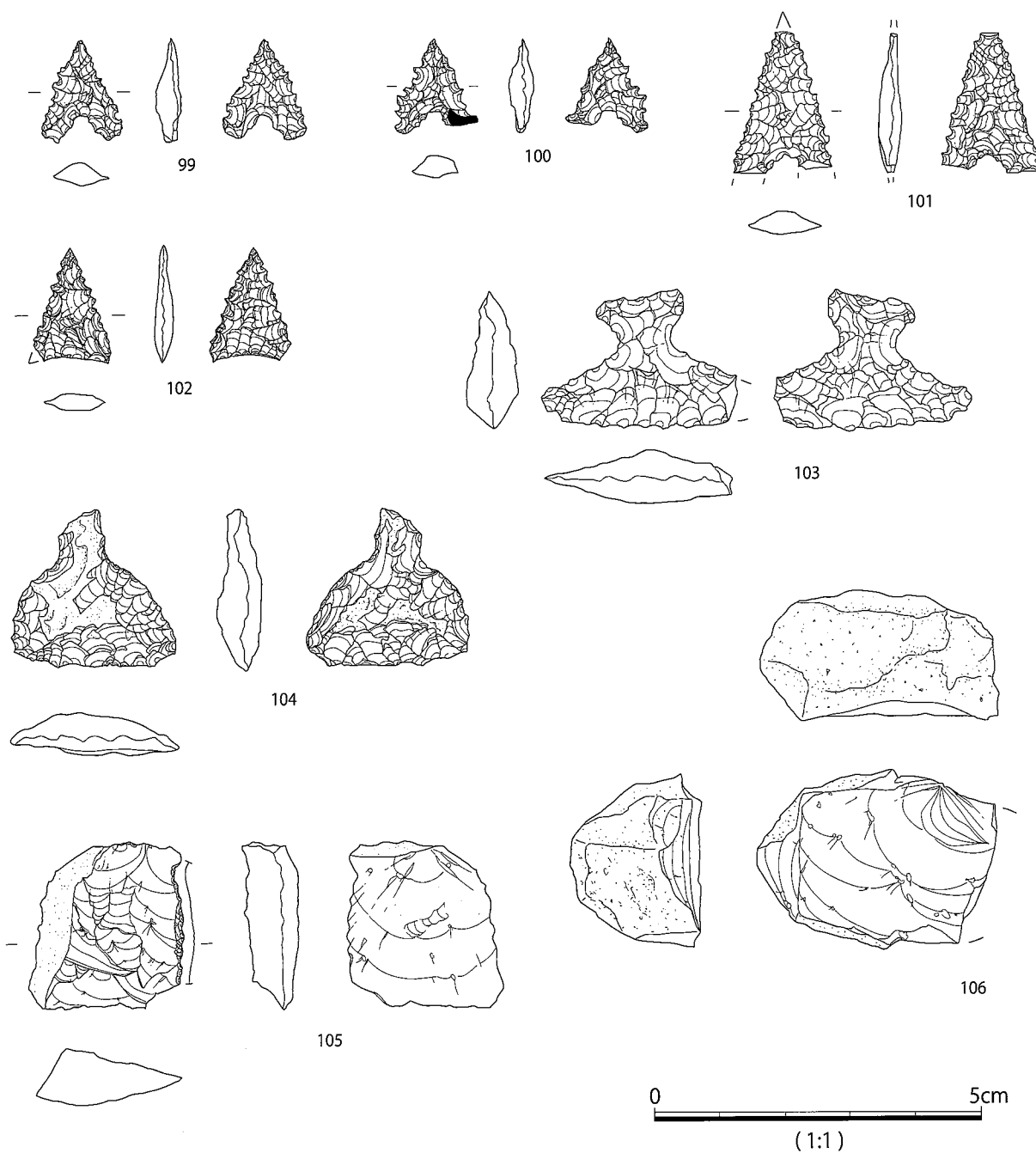


Fig. 35 14層出土遺物(3) S= 1 / 1

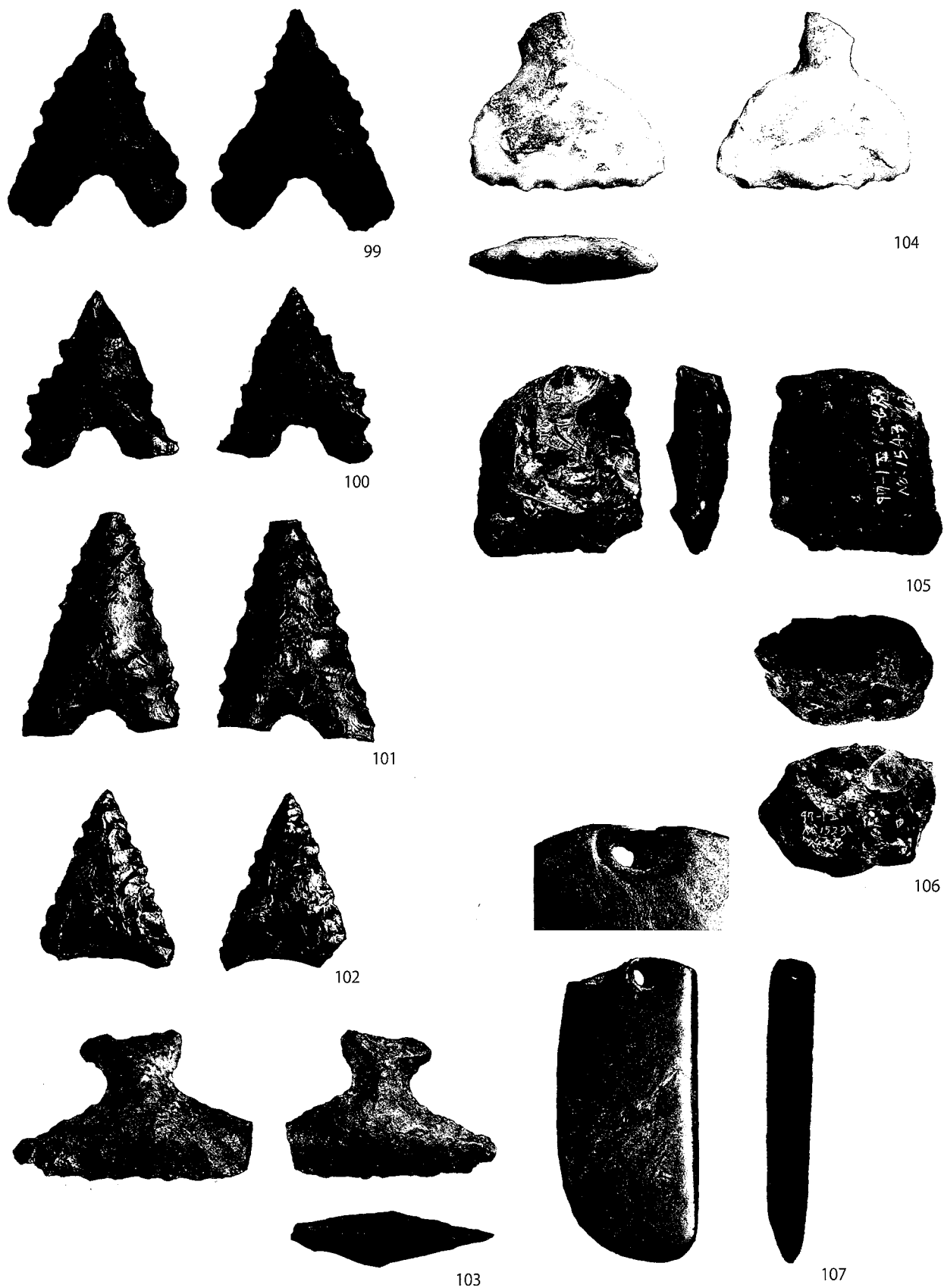


0 10cm
(1:3)

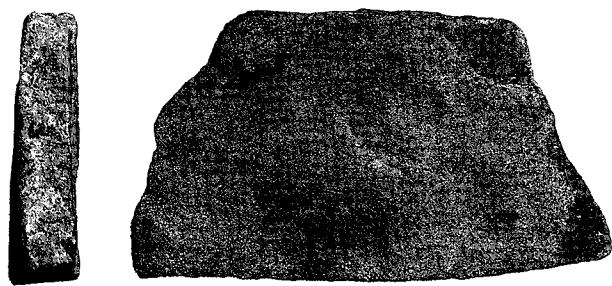
Fig.36 14層出土遺物(4) S=1/3



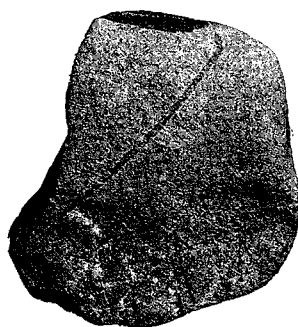
Fig. 37 14層出土遺物（5） S=1/3



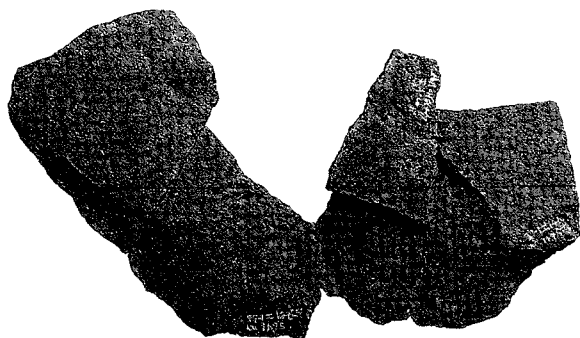
PL. 26 14層出土遺物(4)



108



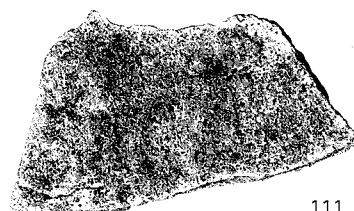
110



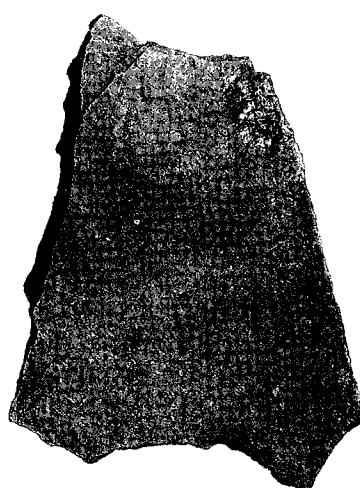
109



112



111



113



PL. 27 14 層出土遺物 (5)

2 15層出土遺物

調査区中央に位置する30トレンチでは、15層上面から樹痕が検出された（PL. 29）。泥炭層の最下層部にあたるため、泥炭層形成時期推定と、当時の環境復元のためのデータとして、放射性炭素測定と樹種同定を古環境研究所に依頼した（分析結果は本書第7章）。分析の結果、樹木はスダジイで、C 14年代は 4147 ± 70 B. P. 更正暦年代はBC2855～2820・BC2665～2485（1 σ ）という結果であった。現在の年代観では、縄文時代中期にあたる。

15層からは、土器1点と石器類が出土した。114は、曽畑式の深鉢口縁部付近の破片である。外面には横位、縦位、斜位を組合せたモチーフが、太めの短沈線によって施文されている。内面には、上部に横位の3条の沈線が認められる。摩滅が著しい。

115・116は凝灰岩製で風化が著しいが、片側に人為的なゆるいくぼみが認められる。117は軽石製品で、中央部に凹線が一条刻まれており、その面が部分的に擦られている。



PL. 28 15層上面検出樹痕



1 調査区完掘（北から）



2 調査区完掘（東から）

PL. 29 調査区完掘後の状況

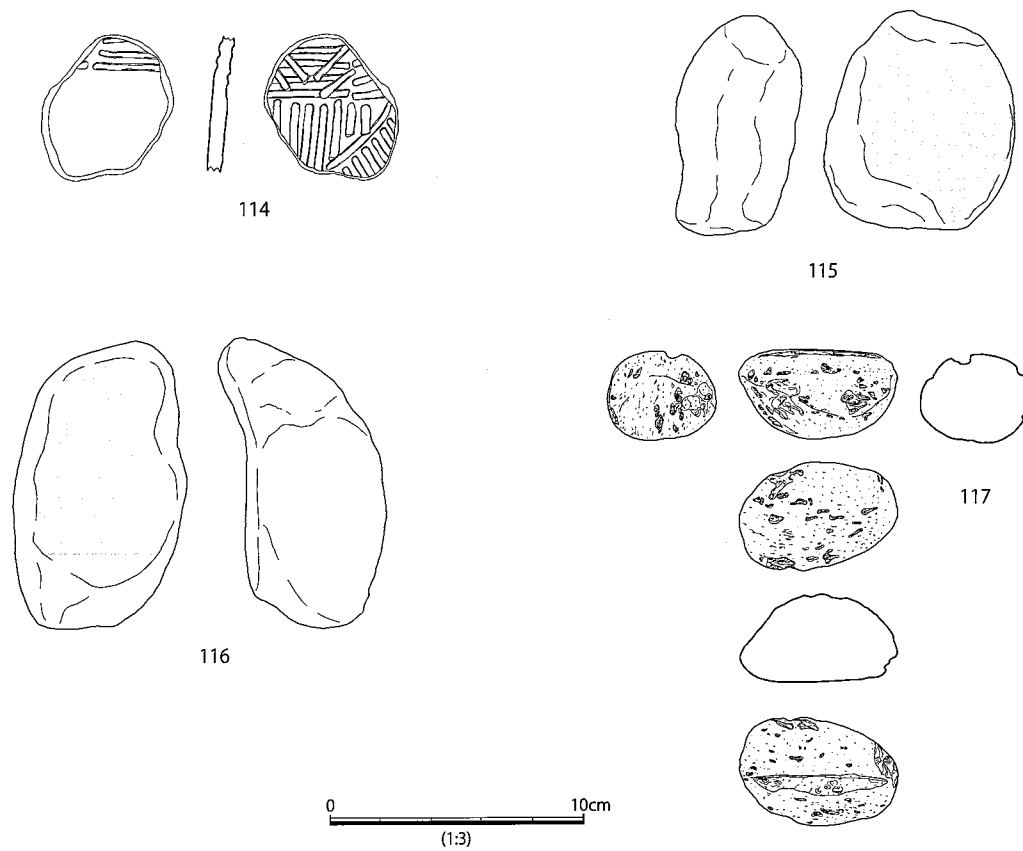
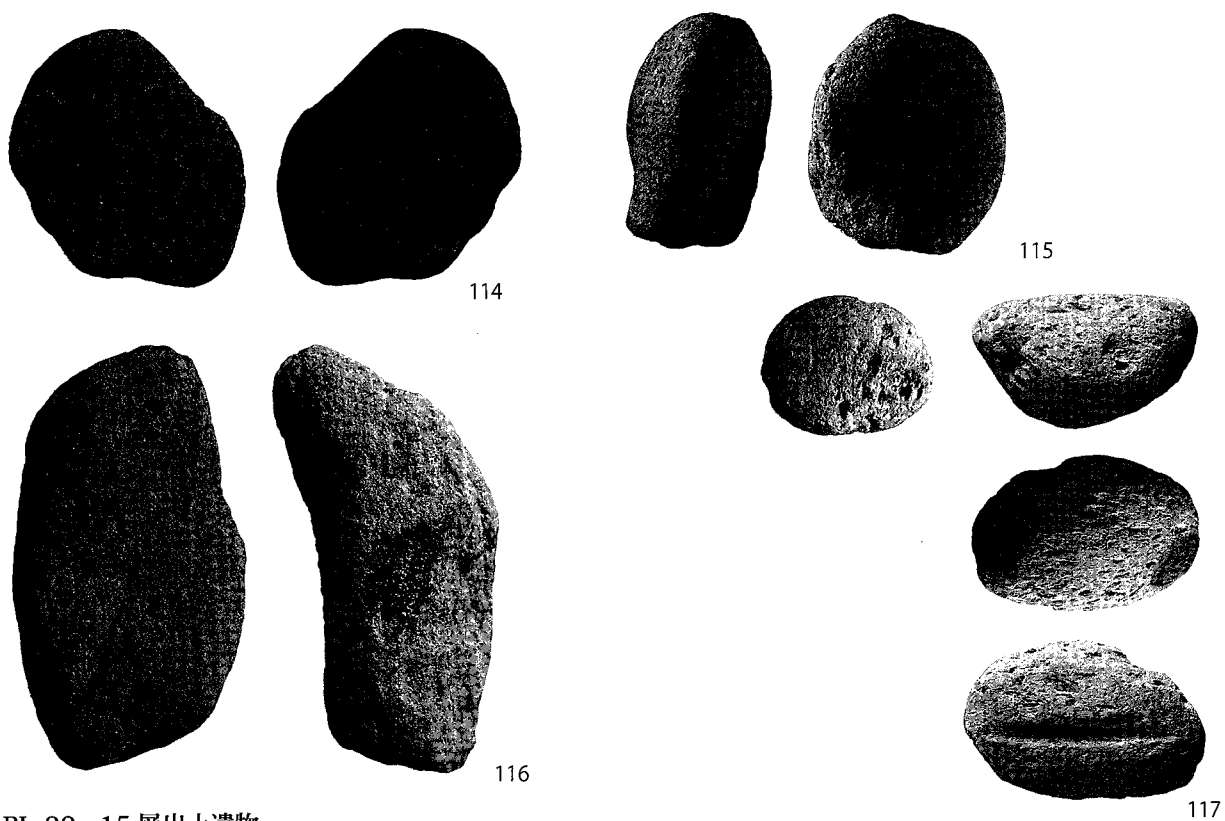


Fig. 38 15層出土遺物 S=1/3



PL. 30 15層出土遺物

Tab. 1 遺構リスト(1)

遺構名	検出面	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	埋土
P5	8層上面	26	18	41	灰褐色 5YR4/2 シルト質砂 軽石礫含む
P6	8層上面	17		13	にぶい黄褐色 10YR7/3 シルト
P7	8層上面	14		-	にぶい黄褐色 10YR7/3 シルト
P8	8層上面	16		-	にぶい黄褐色 10YR7/3 シルト
P9	8層上面	28		-	にぶい黄褐色 10YR7/3 シルト
P10	8層上面	21	11	5	褐灰色 10YR5/1 シルト質砂 5cm 大のパミスを少し含む
P11	8層上面	25		16	灰黄褐色 10YR4/2 シルト質砂 1cm 大のパミスを少し含む
P12	8層上面	18	14	10	褐灰色 10YR5/1 シルト質砂 5cm 大のパミスを少し含む
P13	8層上面	30	16	5	灰黄色 2.5Y6/2 シルト質砂 鉄分浸透
P14	8層上面	16	12	12	褐灰色 10YR5/1 シルト質砂 5cm 大のパミスを少し含む
P15	8層上面	21	16	32	灰黄褐色 10YR4/2 シルト質砂 1cm 大のパミスを少し含む
P16	8層上面	25	17	34	①: 暗褐色 10YR3/3 シルト質砂 上位に 1cm 大の軽石含む 下位は砂質 ②: 暗褐色 10YR 3/ 4 砂質 黄色パミス含む
P17	8層上面	15	10	6	灰黄褐色 10YR4/2 シルト質砂 1cm 大のパミスを少し含む
P21	8層上面	33	20	34	①: 黒褐色 10YR3/2 シルト質砂 1cm 大のパミスを少し含む ②: 灰褐色 10YR4/2 シルト質砂 ③: にぶい黄褐色 10YR4/3 シルト質砂 微小なパミスを含む ④: 暗褐色 10YR3/3 シルト質 1.5cm 大のパミスを含む
P22	8層上面	8		-	褐灰色 10YR5/1 シルト質砂 5cm 大のパミスを少し含む
P23	8層上面	10		-	褐灰色 10YR5/1 シルト質砂 5cm 大のパミスを少し含む
P24	8層上面	8		-	褐灰色 10YR5/1 シルト質砂 5cm 大のパミスを少し含む
P25	8層上面	10		-	にぶい黄褐色 10YR7/2 シルト質砂
P26	8層上面	7		-	にぶい黄褐色 10YR7/2 シルト質砂
P28	8層上面	39		12	灰黄褐色 10YR4/2 シルト質砂 1cm 大のパミスを少し含む
P29	8層上面	18	13	26	①: 灰黄褐色 10YR4/2 シルト質砂 ②: 黒褐色 10YR3/2 砂質シルト ③: にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質シルト ④: 黒褐色 10YR2/2 砂質シルト 非常に粘質 ⑤: にぶい黄褐色 10YR4/3 シルト質砂 0.5cm ほどのパミス含む
P30	8層上面	48	42	8	褐灰色 10YR5/1 シルト質砂 5cm 大のパミスを少し含む
P31	8層上面	10		-	灰黄褐色 10YR4/2 シルト質砂 1cm 大のパミスを少し含む
P32	8層上面	21	15	6	灰黄褐色 10YR4/2 シルト質砂 1cm 大のパミスを少し含む
P33	8層上面	18	13	23	褐灰色 10YR5/1 シルト質砂 5cm 大のパミスを少し含む
P34	8層上面	16		-	褐灰色 10YR5/1 シルト質砂 5cm 大のパミスを少し含む
P35	8層上面	44	25	3	褐灰色 10YR5/1 シルト質砂 5cm 大のパミスを少し含む
P36	8層上面	18		-	褐灰色 10YR5/1 シルト質砂 5cm 大のパミスを少し含む
P37	8層上面	19		7	褐灰色 10YR5/1 シルト質砂 5cm 大のパミスを少し含む
P38	8層上面	20	16	2	褐灰色 10YR5/1 シルト質砂 5cm 大のパミスを少し含む
P39	8層上面	25	17	-	褐灰色 10YR5/1 シルト質砂 5cm 大のパミスを少し含む
P40	8層上面	23		14	灰黄褐色 10YR4/2 シルト質砂 1cm 大のパミスを少し含む
P41	8層上面	25	16	42	①: 黒褐色 10YR3/2 シルト質砂 1.5cm 以下のパミス含む ②: 灰黄褐色 10YR4/2 シルト質砂
P42	8層上面	25	18	2	褐灰色 10YR5/1 シルト質砂 5cm 大のパミスを少し含む
P43	8層上面	15		32	灰黄褐色 10YR4/2 シルト質砂 1cm 大のパミスを少し含む
P44	8層上面	17		5	褐灰色 10YR5/1 シルト質砂 5cm 大のパミスを少し含む
P45	8層上面	18		4	灰黄褐色 10YR4/2 シルト質砂 1cm 大のパミスを少し含む
P47	8層上面	14		15	灰黄色 2.5Y6/2 シルト質砂 鉄分浸透
P55	9層上面	23		4	灰黄褐色 10YR4/2 シルト質砂
P56	9層上面	31		4	暗褐色 10YR3/3 シルト質砂
P57	9層上面	12		5	黒褐色 10YR2/2 シルト質砂
P58	9層上面	21	12	4	暗灰黄色 2.5Y4/2 シルト質砂
P59	9層上面	19		3	暗灰黄色 2.5Y5/2 シルト質砂
P60	9層上面	26		3	黒褐色 10YR3/2 シルト質砂
P62	9層上面	17		5	灰黄褐色 10YR4/2 シルト質砂
P63	9層上面	20	12	5	暗灰黄色 2.5Y4/2
P64	9層上面	18		5	灰黄褐色 10YR4/2 シルト質砂 黒色土混ざる
P65	9層上面	17	12	4	灰黄褐色 10YR4/2 シルト質砂
P66	9層上面	11		5	灰黄褐色 10YR4/2 シルト質砂
P67	9層上面	16		4	灰黄褐色 10YR4/2 シルト質砂
P68	9層上面	18		3	灰黄褐色 10YR4/2 シルト質砂
P70	9層上面	46		5	灰黄褐色 10YR4/2 シルト質砂

Tab. 2 遺構リスト (2)

遺構名	検出面	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	埋土
P71	9層上面	16		5	灰黄褐色 10YR4/2 シルト質砂
P72	9層上面	15		4	灰黄褐色 10YR4/2 シルト質砂, 白色シルト多く混じる
P73	9層上面	23		4	灰黄褐色 10YR4/2 シルト質砂, 白色シルト多く混ざる, 黒色土混ざる
P74	9層上面	26	15	2	灰黄褐色 10YR4/2 シルト質砂
P75	9層上面	28	15	3	暗褐色 10YR3/2 シルト質砂
P76	9層上面	27	18	8	灰黄褐色 10YR4/2 シルト質砂, 白色シルト混入
P77	9層上面	25	14	3	暗褐色 10YR3/3 シルト質砂
P78	9層上面	39		2	暗褐色 10YR3/3 シルト質砂
P79	9層上面	26		9	暗褐色 10YR3/3 シルト質砂
P80	9層上面	73		10	暗褐色 10YR3/3 シルト質砂
P81	9層上面	40	15	8	暗褐色 10YR3/3 シルト質砂
P82	9層上面	21	17	4	暗褐色 10YR3/3 シルト質砂
P83	9層上面	14		4	暗褐色 10YR3/3 シルト質砂
P84	9層上面	33	16	3	灰黄褐色 10YR4/2 シルト質砂
P85	9層上面	20	46	6	灰黄褐色 10YR4/2 シルト質砂
P86	9層上面	17	11	4	暗褐色 10YR3/3 シルト質砂
P87	9層上面	14		-	暗褐色 10YR3/3 シルト質砂
P88	9層上面	15		4	黒褐色 10YR2/3 シルト質砂
P89	9層上面			2	灰黄褐色 10YR4/2 シルト質砂
P90	10層上面	33	19	6	灰黄褐色 10YR5/2 シルト質砂
P91	10層上面	33	22	5	灰黄褐色 10YR5/2 シルト質砂
P92	10層上面	34	20	3	灰黄褐色 10YR5/2 シルト質砂とにぶい黄色 2.5Y6/3 シルト質砂の混土
P93	10層上面	34		-	灰黄褐色 10YR5/2 シルト質砂
P94	10層上面	22		3	灰黄褐色 10YR5/2 シルト質砂とにぶい黄色 2.5Y6/3 シルト質砂の混土
P95	10層上面	25		4	にぶい黄色 2.5Y6/3 シルト質砂
P96	10層上面	31	20	27	灰黄褐色 10YR5/2 シルト質砂とにぶい黄色 2.5Y6/3 シルト質砂の混土
P97	10層上面	23	18	5	にぶい黄色 2.5Y6/3 シルト質砂
P98	10層上面	25		4	灰黄褐色 10YR5/2 シルト質砂
P99	10層上面	31	19	3	灰黄褐色 10YR5/2 シルト質砂
P101	10層上面	25	16	2	灰黄褐色 10YR5/2 シルト質砂
P102	10層上面	23		2	灰黄褐色 10YR5/2 シルト質砂
P104	10層上面	60	23	5	灰黄褐色 10YR5/2 シルト質砂
P105	10層上面	24	15	3	灰黄褐色 10YR5/2 シルト質砂
P106	10層上面	22		3	灰黄褐色 10YR5/2 シルト質砂
P107	10層上面	33	27	3	灰黄褐色 10YR5/2 シルト質砂
P108	10層上面	20	17	4	灰黄褐色 10YR5/2 シルト質砂
P109	10層上面	26	19	2	灰黄褐色 10YR5/2 シルト質砂とにぶい黄色 2.5Y6/3 シルト質砂が少し混ざる
P110	10層上面	23	16	4	灰黄褐色 10YR5/2 シルト質砂とにぶい黄色 2.5Y6/3 シルト質砂が少し混ざる
P111	10層上面	23	3	-	灰黄褐色 10YR5/2 シルト質砂とにぶい黄色 2.5Y6/3 シルト質砂が少し混ざる
P112	10層上面	24		3	灰黄褐色 10YR5/2 シルト質砂とにぶい黄色 2.5Y6/3 シルト質砂が少し混ざる
P113	10層上面	32	29	3	灰黄褐色 10YR5/2 シルト質砂とにぶい黄色 2.5Y6/3 シルト質砂の混土
P114	10層上面	24		3	灰黄褐色 10YR5/2 シルト質砂とにぶい黄色 2.5Y6/3 シルト質砂の混土
P115	10層上面	19		3	灰黄褐色 10YR5/2 シルト質砂とにぶい黄色 2.5Y6/3 シルト質砂の混土
P116	10層上面	22		3	にぶい黄色 2.5Y6/3 シルト質砂
P118	10層上面			3	灰黄褐色 10YR5/2 シルト質砂
P119	10層上面	18	16	5	灰黄褐色 10YR5/2 シルト質砂
P120	10層上面	36	25	8	灰黄褐色 10YR5/2 シルト質砂
P123	9層上面	13		3	灰黄褐色 10YR5/2 シルト質砂
P124	9層上面	12		5	灰黄褐色 10YR5/2 シルト質砂
P125	9層上面	17		5	灰黄褐色 10YR5/2 シルト質砂
P127	9層上面	31	19	5	灰黄褐色 10YR5/2 シルト質砂
SD1	4層上面		幅 50	5	灰黄褐色 10YR5/2 シルト質砂
SD2	9層上面		幅 60	7	灰黄褐色 10YR4/2 シルト質砂 2cm大の軽石を含む。
SD3	9層上面		幅 280	10	灰黄褐色 10YR4/2 シルト質砂 2cm大の軽石を含む。
SK3	7層上面	67		32	灰黄褐色 10YR4/2 シルト質砂 2cm大の軽石と炭化物小片を含む。
SK4	7層上面	42		27	灰黄褐色 10YR4/2 シルト質砂 2cm大の軽石と炭化物小片を含む。
SK9	10層上面	36		9	灰黄褐色 10YR5/2 シルト質砂

Tab. 3 遺物観察表(1) 土器・須恵器・陶磁器類

Fig. No.	取上No.	遺構	層位	種別	器種	部位	調整	色調	混和材	備考
7	1	1611	1	縄文	深鉢	胴部	外面:貝殻刺突文,内面:ナデ(〳)	外面:にぶい橙 5YR6/4,内面:にぶい黄橙 10YR6/4	白色粒子, 石英	深浦式
7	2	1617, 1618	1	弥生~古墳	甕か鉢	口縁部	外面:ハケメ(丨)→ナデ(〳),内面:ナデ(〳)	外面:にぶい橙 5YR7/4,内面:にぶい橙 7.5YR7/4	赤色粒子, 黒色粒子	
7	3	1628	1	古墳	甕	口縁部	外面:ナデ(〳),内面:ナデ(〳)	外面:にぶい橙 7.5YR7/4,内面:にぶい黄橙 10YR7/3	白色粒子, 石英	東原式
7	4	705	1	弥生~古墳	甕	脚部	外面:ナデ(〳),内面:ナデ(〳)	外面:橙 2.5YR6/6,内面:橙 2.5YR6/6	白色粒子, 石英, 黒色粒子	
7	5	1609	1	弥生~古墳	壺	胴部	外面:ナデ(〳),内面:ナデ(〳)	外面:橙 7.5YR6/6,内面:明黄褐 10YR6/6	白色粒子, 赤色粒子, 黒色粒子	
7	6	263	1	古墳	埴	胴部	外面:ナデ(丨)→(〳),内面:ナデ(〳)	外面:浅黄橙 7.5YR8/4,内面:灰白 10YR8/2	赤色粒子, 石英	
7	7	1617	1	土師器	杯	底部	内外面:回転ナデ,底面:糸切り	外面:にぶい橙 7.5YR7/4,内面:橙 7.5YR7/6	石英	
7	8	1606	1	須恵器	-	胴部	外面:平行タタキ,内面:当て具痕	外面:にぶい褐 7.5YR5/3,内面:暗灰黄 2.5Y5/2	白色粒子, 石英	
7	9	1528	1	青磁	碗	胴部	内外面施釉	釉:灰 10Y6/1, 胎土:灰白 N8/		竜泉窯系
7	10	736	1	青磁	碗	底部	内外面施釉, 内面:施文	釉:灰オリーブ 7.5Y6/2, 胎土:灰白 N8/		竜泉窯系
7	11	1620	1	磁器	碗	口縁部~胴部	内外面施釉, 呉須による施文	釉:透明釉, 胎土:白色		口径(19.6)cm
7	12	1606	1	磁器	皿	口縁部~底部	内外面施釉, 内面に呉須による施文	釉:透明釉, 胎土:白色		器高 2.5cm
7	13	1613	1	陶器	甕	口縁部	内外面:回転ナデ,施釉	釉:オリーブ黒 5GY2/1, 胎土:灰赤 2.5YR5/2		苗代川系
7	14	1622	1	陶器	皿?	底部	内外面:回転ナデ	外面:褐灰 7.5YR6/1,内面:にぶい赤褐 2.5YR5/3		苗代川系
7	15	1620	1	陶器	甕	口縁部	内外面:回転ナデ	外面:灰赤 10R4/2, 内面:褐灰 5YR5/1, 釉:暗オリーブ灰 2.5GY4/1		外面に自然釉付着?, 口径(9.8)cm, 苗代川系
7	16	1813	1	ガラス	瓶	底部		白		底径(5.2)cm
8	18	73	2	縄文	深鉢	口縁部	外面:ナデ(〳),内面:貝殻条痕(〳)→(〳)	外面:にぶい橙 5YR6/4,内面:橙 7.5YR6/6	白色粒子, 赤色粒子, 石英	
8	19	109	2	弥生	甕	口縁部	外面:ナデ(〳),内面:ナデ(〳)→(〳)	外面:にぶい橙 5YR6/4,内面:にぶい褐 7.5YR5/4	白色粒子, 石英, 黒色粒子	
8	20	2	2	土師器	高台杯	底部	内外面:回転ナデ	外面:浅黄橙 7.5YR8/4,内面:浅黄橙 7.5YR8/3	黒色粒子, 赤色粒子	
8	21	72	2	土師器	杯	底部	内外面:回転ナデ,底面:へら切り	外面:灰白 10YR8/2,内面:浅黄橙 10YR8/3	白色粒子, 赤色粒子	
8	22	4	2	土師器	杯?	底部	内外面:ナデ(丨),底面:へら切り	外面:灰白 2.5YR8/2,内面:灰白 10YR8/2	白色粒子, 赤色粒子	
8	23	15	2	陶器	土瓶蓋	胴部	外面のみ施釉,内外面:回転ナデ	釉:灰赤 2.5YR4/2, 胎土:明褐灰 5YR2/5		苗代川系
8	24	71	2	陶器	急須	注口部	注口部:ユビオサエ,外面施釉	釉:黒褐 10YR2/3, 胎土:緑灰 10G5/1		苗代川系
9	25	74	3a	弥生	甕	口縁部	外面:ナデ(〳),内面:摩滅のため不明	外面:灰白 10YR8/2,内面:灰白 7.5YR8/1	黒色粒子, 赤色粒子, 石英, 黒色粒子	上面:線刻文あり, 入来Ⅱ式
9	26	89	3	土師器	杯	口縁部	内外面:回転ナデ	外面:にぶい橙 7.5YR7/3,内面:にぶい橙 7.5YR7/4	白色粒子, 赤色粒子, 黒色粒子	
9	27	59	3a	土師器	高台付杯	底部	内外面:回転ナデ	内外面:浅黄橙 7.5YR8/4	白色粒子, 赤色粒子	
9	28	78	3	土師器	高台付杯	底部	外面:ナデ(〳),内面:摩滅のため不明	外面:灰白 10YR8/2,内面:灰色 2.5YR8/2	黒色粒子	
9	29	161	3b	土師器	皿	口縁部~底部	内外面:回転ナデ,底面:糸切り	外面:浅黄橙 10YR8/3,内面:灰白 2.5Y7/1	石英, 赤色粒子	口径 8.4cm, 器高 1.7cm
9	30	39	3	土師器	杯	口縁部	内外面:回転ナデ,底面:糸切り	外面:浅黄橙 10YR8/4,内面:浅黄橙 10YR8/3	黒色粒子, 赤色粒子, 石英	口径 8.7cm, 器高 2.1cm

Tab. 4 遺物観察表(2) 土器・須恵器・陶磁器類

Fig. No.	取上No.	遺構	層位	種別	器種	部位	調整	色調	混和材	備考
9	31	79	3a	須恵器	壺?	胴部	外面:平行タタキ,内面:平行文当具	外面:灰黄 2.5Y7/2,内面:灰 10Y6/1	白色粒子	
12	32	182	4	土師器	杯	口縁部~底部	外面:回転ナデ,内面:回転ナデ,底面:ヘラ切り	外面:浅黄橙 7.5YR8/3,内面:浅黄橙 10YR8/4	石英	器高 2.0cm
12	33	175	4	土師器	杯	口縁部	内外面:回転ナデ	外面:浅黄橙 10YR8/3,内面:淡黄 2.5YR8/3	黒色粒子, 赤色粒子	
12	34	188	4	土師器	杯	底部	外面:回転ナデ,内面:回転ナデ	外面:明黄褐 10YR6/6,内面:灰白 2.5Y8/2	石英	
12	35	177, 180	4	土師器	杯	底部	外面:回転ナデ,内面:回転ナデ底面:ヘラ切り	外面:淡黄 2.5Y8/3,内面:灰白 10YR8/2	黒色粒子	底径 5.1cm
12	36	181	4	土師器	碗	底部	内外面:回転ナデ,底面:ヘラ切り	内外面:にぶい黄橙 10YR7/2	赤色粒子, 石英	底径 5.2cm
12	37	183	4	土師器	高台付杯	口縁部~底部	内外面:回転ナデ	外面:橙 5YR7/6,内面:淡橙 5YR8/4	白色粒子, 赤色粒子	口径 14.1cm, 底径 8.7cm, 器高 6.5cm, 焼成後穿孔か
12	38	232	4	古墳	小型丸底壺	底部	外面:摩滅のため不明,内面:回転ナデ	外面:にぶい橙 7.5YR7/3,内面:灰白 2.5YR8/2	黒色粒子, 赤色粒子	
12	39	282	4	古墳	埴	胴部	外面:ミガキ,内面:ナデ(ノ)	外面:明赤褐 2.5YR5/6(赤色顔料のため),内面:灰白 10YR8/2	赤色粒子, 白色粒子	外面に赤色顔料を塗布
12	40	209	4	土師器	杯	口縁部	内外面:回転ナデ	外面:浅黄橙 10YR8/4,内面:浅黄橙 10YR8/3	赤色粒子	口径 10.2cm
14	41	1006	SK3	弥生?古墳?	壺	胴部	外面:ケズリ(ノ),内面:ケズリ(一)	外面:にぶい黄橙 10YR7/2,内面:にぶい橙 7.5YR7/4	石英, 黒色粒子	成川式
15	42	317	6	弥生	甕	口縁部	外面:ナデ(一),内面:摩滅のため不明	外面:にぶい橙 7.5YR7/4,内面:橙 5YR6/6	白色粒子, 黒色粒子, 赤色粒子, 石英, 黒色粒子	入来Ⅱ式
15	43	580	6	弥生	甕?	口縁部	外面:ナデ(ノ),内面:ナデ(ノ) ユビオサエ	外面:にぶい黄橙 10YR6/3,内面:にぶい橙 7.5YR7/4	赤色粒子, 石英	
15	44	233	6	弥生	鉢	口縁部	内外面:ナデ(一)	外面:浅黄橙 10YR8/3,内面:灰白 10YR8/2	白色粒子, 黒色粒子, 石英	
15	45	808	6	弥生~古墳	甕	口縁部	内外面:ナデ(一)	内外面:にぶい橙 7.5YR7/4	白色粒子, 黒色粒子, 石英	
15	46	751	6	弥生~古墳	甕	口縁部	内外面:ナデ(一)	外面:黄灰 2.5YR4/1,内面:にぶい橙 7.5YR7/4	白色粒子, 黒色粒子, 石英	
15	47	680	6	弥生~古墳	甕	口縁部	内面:ナデ(ノ),外面:ナデ(一)	外面:にぶい橙 5YR6/4,内面:にぶい橙 5YR7/4	白色粒子, 石英, 黒色粒子	
15	48	423	6	弥生~古墳	甕	口縁部	内外面:ナデ(一)	外面:灰白 10YR8/1,内面:灰白 10YR8/2	黒色粒子, 赤色粒子, 石英	
15	49	583	6	弥生~古墳	甕	胴部	外面:ナデ(一),内面:ナデ(ノ)	外面:にぶい橙 7.5YR7/4,内面:灰白 10YR8/2	黒色粒子, 石英, 黒色粒子	刻目:布目圧痕
15	50	1381	6	弥生~古墳	甕	胴部	外面:ナデ(ノ),内面:ナデ(ノ)	外面:にぶい橙 7.5YR7/4,内面:浅黄橙 10YR8/3	白色粒子, 赤色粒子, 黒色粒子	刻目:布目圧痕
15	51	579	6	弥生~古墳	甕	胴部	内外面:摩滅のため不明	外面:褐灰 10YR6/1,内面:にぶい黄橙 10YR6/3	白色粒子, 石英	
15	52	769	6	弥生~古墳	甕	胴部	外面:ナデ(一),内面:ナデ(ノ)	外面:赤褐 5YR4/8,内面:にぶい橙 7.5YR6/4	白色粒子, 赤色粒子	外面:赤色顔料塗布
15	53	807, 822	6	弥生~古墳	甕	胴部	外面:ハケメ(ノ),内面:ハケメ(一)	外面:浅黄橙 10YR8/3,内面:灰白 10YR8/2	白色粒子, 赤色粒子, 石英	
15	54	763	6	弥生~古墳	甕	脚部	内外面:摩滅のため不明	外面:淡橙 5YR8/3,内面:灰白 5YR8/2	白色粒子, 石英	底部内面にコゲ付着
15	55	912	6	弥生~古墳	甕	脚部	内外面:ナデ(一)	外面:浅黄橙 7.5YR8/3,内面:褐灰 10YR6/1	黒色粒子, 石英	
15	56	490	6	弥生~古墳	甕	脚部	内外面:ナデ(一)	外面:灰白 10YR8/2,内面:にぶい黄橙 10YR7/3	白色粒子, 赤色粒子, 黒色粒子	
15	57	642	6	弥生~古墳	甕	脚部	内外面:ナデ(一)	外面:灰白 10YR8/2,内面:浅黄橙 7.5YR8/3	黒色粒子, 石英	
15	58	564	6	古墳	壺	口縁部	内外面:ナデ(一)	外面:にぶい橙 7.5YR6/4,内面:にぶい橙 7.5YR7/4	白色粒子, 黒色粒子, 石英	

Tab. 5 遺物観察表(3) 土器・須恵器・陶磁器類

Fig. No.	取上No.	遺構	層位	種別	器種	部位	調整	色調	混和材	備考
15 59	1063		6	弥生～古墳	壺	胴部	外面：ハケメ(\\), 内面：ナデ(\\)	内外面：にぶい橙 7.5YR7/4	白色粒子, 黑色粒子, 石英	
15 60	694		6	弥生～古墳	壺?	胴部	外面：ナデ(一), 内面：ナデ(一)	外面：橙 2.5YR7/6, 内面：にぶい橙 2.5YR6/4	白色粒子, 石英, 黑色粒子	
15 61	910		6	弥生～古墳	壺	胴部	外面：ナデ(一), 内面：ナデ(\\)	内外面：にぶい橙 7.5YR7/4	赤色粒子, 石英	
15 62	865		6	弥生～古墳	壺	胴部	外面：ナデ(一), 内面：ナデ(\\)	外面：橙 7.5YR7/6, 内面：にぶい橙 5YR7/4	白色粒子, 赤色粒子, 石英, 黑色粒子	
15 63	961		6	古墳	壺	胴部	外面：ナデ(一), 内面：摩滅のため不明	外面：にぶい橙 7.5YR6/4, 内面：にぶい橙 7.5YR7/4	白色粒子, 赤色粒子	成川式
15 64	692		6	古墳	鉢	底部	外面：ナデ(\\), 底面：摩滅のため不明, 内面：ナデ(\\)	内外面：にぶい橙 5YR7/4	白色粒子, 石英	成川式
15 65	735		6	古墳	鉢	底部	外面：ナデ(\\), 底面：ナデ(一), 内面：ナデ(\\)	外面：にぶい橙 7.5YR7/3, 内面：にぶい橙 5YR6/4	白色粒子, 石英	成川式, 底径 4.9cm
16 66	826		6	古墳	埴	口縁部	内外面：ナデ(一)	外面：にぶい黄橙 10YR7/3, 内面：灰白 10YR8/2	白色粒子, 赤色粒子, 黑色粒子	
16 67	1073		6	古墳	埴	胴部	内外面：ナデ?	外面：灰白 7.5YR8/2, 内面：灰白 10YR8/1	赤色粒子	成川式, 外面：赤色顔料塗布か
16 68	755		6	古墳	小型丸底壺	底部	内外面：回転ナデ	外面：黄灰 2.5Y6/1, 内面：黄灰 2.5Y5/1	白色粒子	成川式
16 69	778		6	弥生～古墳	高杯?	杯部	内外面：ナデ(一)	外面：にぶい橙 7.5YR7/3, 内面：橙 2.5YR6/6	白色粒子, 石英, 黑色粒子	
17 71	984		7	弥生	壺	口縁部	外面：ナデ(一), 内面：ナデ(一)ミガキ?(一)	外面：明黄褐 10YR6/6, 内面：橙 7.5YR6/6	白色粒子, 金色の雲母	中～後期
17 72	476		7	古墳	鉢	底部	外面：ナデ(\\), 底面：ナデ(\\), 内面：ナデ(一)	内外面：灰白 10YR8/2	白色粒子, 赤色粒子, 石英, 黑色粒子	
20 73	1009		8	弥生	鉢	口縁部	内外面：ナデ(一)	外面：淡黄 2.5Y8/3, 内面：灰白 2.5Y8/2	白色粒子, 黑色粒子, 赤色粒子, 石英	
20 74	1025		8	弥生	甕	脚部	外面：ナデ(一), 内面：ナデ(一) ユビオサエ	外面：にぶい橙 7.5YR7/4, 内面：にぶい橙 7.5YR7/3	白色粒子, 黑色粒子, 赤色粒子, 石英	入来Ⅱ式
24 76	1082		SD3	弥生	甕	脚部	外面：ナデ(一), 内面：ナデ(一)	外面：にぶい黄橙 10YR6/3, 内面：褐灰 10YR5/1	白色粒子, 赤色粒子, 石英, 黒雲母	中期
28 77	1047		9	弥生～古墳	甕か壺	胴部	外面：ナデ(一), 内面：ナデ(\\)	外面：にぶい黄橙 10YR7/2, 内面：灰白 10YR, 7/1	白色粒子, 赤色粒子, 石英	
28 78	499		10	弥生～古墳	壺?	胴部	外面：ナデ(一), 内面：ナデ(\\・一)	外面：浅黄橙 10YR8/3, 内面：にぶい黄橙 10YR7/4	白色粒子, 赤色粒子, 石英, 黑色粒子	
28 79	1086		11	弥生	甕?	胴部	外面：ナデ(\\), 内面：摩滅のため不明	外面：灰黄褐 10YR4/2, 内面：にぶい赤褐 5YR4/4	白色粒子, 赤色粒子, 石英	外面：1条沈線
33 82	522		14a	縄文	一	口縁部	外面：貝殻条痕(\\), 内面：摩滅のため不明	外面：にぶい橙 7.5YR6/4, 内面：橙 5YR6/6	白色粒子, 黑色粒子, 石英	穿孔あり, 春日式
33 83	537		14a	縄文	深鉢	胴部	外面：波状の突帯文, 内面：貝殻条痕(\\)	外面：にぶい褐 7.5YR5/4, 内面：にぶい橙 7.5YR6/4	白色粒子, 黑色粒子	春日式
33 84	1364, 1361, 1366, 1377, 1378, 1379, 1398, 1415, 1436, 1441, 1444, 1445, 1469, 1472, 1478		14b	縄文	深鉢	口縁部	外面・上面：貝殻刺突文, 内面：貝殻刺突文, ナデ(一)	外面：にぶい褐 7.5YR6/4, 内面：にぶい橙 7.5YR7/4	白色粒子, 黑色粒子, 赤色粒子, 石英, 黒色粒子	深浦式(日本山段階), 波状口縁か

Tab. 6 遺物観察表(4) 土器・須恵器・陶磁器類

Fig.	No.	取上No.	遺構	層位	種別	器種	部位	調整	色調	混和材	備考
33	85	1234, 1237, 1555		14a 14b	縄文	深鉢	口縁部	外面:貝殻条痕(一)のちナデ, 突帯文, 内面:貝殻条痕(一)のちナデ	外面:にぶい橙 7.5YR6/4, 内面:にぶい橙 7.5YR7/4	白色粒子, 石英, 赤色粒子, 黒色粒子	野久尾式
33	86	1430		14b	縄文	深鉢	口縁部	外面:ナデ(\\), 内面:ナデ(一), 貝殻刺突文	外面:にぶい褐 7.5YR5/3, 内面:にぶい橙 7.5YR6/4	白色粒子, 石英	深浦式(日木山段階), 摩滅著しい
33	87	1236, 1238, 1244		14b	縄文	深鉢	口縁部	外面:貝殻条痕(), 内面:貝殻条痕(一/)	外面:にぶい黄橙 10YR7/4, 内面:灰黄褐 10YR5/2	白色粒子	
33	88	1547		14b	縄文	深鉢	胴部	外面:貝殻条痕(一)のちナデ, 内面:貝殻条痕(\\)のちナデ, 上面:刺突文	外面:にぶい橙 5YR6/4, 内面:にぶい橙 7.5YR6/4	白色粒子, 黒色粒子, 石英, 黒色粒子	摩滅している
33	89	1114, 1115, 1331		14b	縄文	深鉢?	胴部	外面:貝殻列点文, 内面:ナデ(一)	外面:橙 2.5YR6/6, 内面:にぶい赤褐 5YR5/4	白色粒子, 石英, 黒色粒子	深浦式(日木山段階) 摩滅著しい
34	90	1492, 1493, 1491, 1494, 1495, 1496, 1557		14b	縄文	深鉢	胴部	外面:貝殻条痕(\\), 内面:貝殻条痕(一\\)	外面:橙 5YR6/6, 内面:にぶい橙 7.5YR7/4	白色粒子, 黒色粒子, 石英	深浦式?
34	91	1563, 1568		14b	縄文	深鉢	胴部	外面:貝殻条痕(), 内面:貝殻条痕(一)	外面:にぶい褐 7.5YR5/4, 内面:橙 5YR6/6	白色粒子, 黒色粒子, 赤色粒子, 石英	深浦式?
34	92	1556		14b	縄文	深鉢	胴部	外面:貝殻条痕(一\\), 内面:貝殻条痕(一/)	外面:にぶい黄 2.5YR6/4, 基調, 内面:黒褐 2.5YR4/1	白色粒子, 石英	深浦式?
34	93	1149, 1159, 1197, 1233, 1250, 1256, 1257, 1423		14b	縄文	深鉢	口縁部	外面:貝殻条痕(一), 突帯文, 内面:貝殻条痕(一)のちナデ?	外面:にぶい黄橙 10YR6/4, 内面:にぶい褐 7.5YR5/4	白色粒子, 黒色粒子, 石英	春日式(前谷段階), 摩滅している
34	94	1310		14b	縄文	深鉢	口縁部	外面:貝殻条痕? (一)のちナデ, 内面:貝殻条痕(\\), 上面:貝殻刺突文	外面:にぶい黄橙 10YR6/3, 内面:橙 5YR6/6	白色粒子, 石英	春日式(前谷段階), 摩滅著しい
34	95	1386		14b	縄文	深鉢	口縁部	外面:摩滅のため不明, 内面:摩滅のため不明	外面:橙 7.5YR6/6, 内面:にぶい黄橙 10YR7/3	白色粒子, 石英	春日式, 摩滅している
34	96	1354		14b	縄文	深鉢	胴部	外面:摩滅のため不明, 内面:ナデ(一)	外面:にぶい褐 7.5YR5/4, 内面:にぶい黄褐 10YR5/3	白色粒子, 黒色粒子, 石英	春日式, 底径(5.1)cm
34	97	518, 519		14b	縄文	深鉢	底部	外面:ナデ() ユビオサエ, 底面:ナデ(一), 内面:ナデ(\\)	外面:橙 7.5YR6/6, 内面:暗灰黄 2.5YR5/2	白色粒子, 石英, 黒色粒子	春日式, 底径(4.1)cm
34	98	533		14b	縄文	深鉢	底部	外面:ユビオサエ ナデ(一), 底面:ナデ(一), 内面:ナデ()	外面:橙 5YR6/6, 内面:黄灰 2.5Y4/1	白色粒子, 石英, 黒色粒子	春日式
38	114	1466		15b	縄文	深鉢	胴部	内外面:摩滅のため不明	外面:灰白 10YR8/1, 内面:灰白 N8/	白色粒子, 黒色粒子	曽畑式

Tab. 7 遺物観察表(5) — 金属製品・石器類

Fig. No.	取上No.	遺構	層位	種別	器種	サイズ (cm) (最大長×最大幅×最大厚)	重量 (g)	備考
7	17	1606	1	青銅	煙管	吸口径 7.5, 胴部径 1.2	10	
16	70	1072	6	石器	軽石製品	4.8 × 3.6 × 3.9	24	軽石
20	75		8	石器	砥石?	7.1 × 4.5 × 2.6	108	砂岩?
32	80		13	石器	軽石製品	20.1 × 13.1 × 9.9	565	軽石
32	81		13	石器	軽石製品	9.8 × 11.3 × 5.3	160	軽石
35	99	1091	14	石器	石鏃	1.6 × 1.3 × 0.4	0.4	ホルンフェルス化した頁岩
35	100	1090	14	石器	石鏃	1.5 × 1.3 × 0.3	0.3	
35	101	1475	14	石器	石鏃	2.2+ α × 1.5+ α × 0.4	0.8	
35	102	1432	14	石器	石鏃	1.8+ α × 1.2+ α × 0.3	0.4	
35	103		14	石器	石匙	2.2 × 3.0+ α × 0.8	3.1	チャート
35	104	1148	14	石器	石匙	2.5 × 2.6 × 0.7	3.1	チャート
35	105	1543	14 ^a b	石器	薄片	2.6 × 2.4 × 0.8	5.4	黒曜石
35	106	1523	14b	石器	石格	2.8 × 3.7+ α × 2.0	21	黒曜石
36	107	1092	14b	石器	垂飾品	7.8 × 3.5 × 1.2	6.4	ケツ状耳飾りの転用品, 蛇紋岩か
36	108	1032	14b	石器	砥石	12.5 × 22.0 × 3.0	166	
36	109	1145, 1175, 1176	14b	石器	砥石	18.3 × 29.1 × 1.2	99	
36	110	1552	14b	石器	礫器	11.4 × 12.3 × 3.6	70	
36	111	1276	14b	石器	スクレイパー状	6.3 × 10.5 × 1.2	11	
37	112	1274	14b	石器	スクレイパー状	17.7 × 19.2 × 5.8	210	
37	113	1553	14b	石器	スクレイパー状	21.0 × 15.3 × 3.9	165	
38	115		15a	石器	くぼみ石	8.7 × 7.5 × 4.8	345	
38	116		15a	石器	くぼみ石	11.4 × 6.9 × 5.4	355	
38	117		15a	石器	軽石製品	4.2 × 6.3 × 3.3	24	軽石

Tab. 8 層位別遺物出土状況

種別	1層	2層	3a層	3b層	3層	SD1	4層	5層	6層	SK3	7層	8層	SD2	SD3	9層	10層	11層	13層	14a層	14b層	14層	15a層	15b層
金属製品 青銅製品	1																						
ガラス 瓶	1																						
陶器	19	6	2		3																		
磁器	8																						
磁器 青磁	2		1																				
土師器	36	3	16	6	10		33	15	5		1												
須恵器	1	2	3																				
土器 成川式	3				1			5	71														
土器 弥生	2	1	2		1				3		3	3		1	1		1						
土器 弥生か古墳	2	2	2					9	228	1	1	30		4		24							
土器 春日式																			3	11			
土器 春日式か																			3	194			
土器 深浦式	1																			25			
土器 縄文条痕系	1																		1	18			
土器 曾畑式																							1
土器 縄文土器片	2	1								1										91			2
土器 型式等不明	47	41	34		15	1	5	2	444		12		1	1		5				44	24		
石器 打製石鏃																						4	
石器 石匙																						2	
石器 スクレイパー状																				3			
石器 礫器																				1			
石器 砥石																				2			
石器 磨石・敲石													1									2	
石器 垂飾品																							
石器 軽石製品										1								2				1	
石器関係 石核																				1			
石器関係 剥片																	7			23			2
石 黒曜石片	4			1								1						2	2		2	4	
石 彼熱																				8			

表中の数値は出土数

第7章 鹿児島大学構内遺跡、郡元団地 J・K-10・11 区における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

第1節 郡元団地 J・K-10・11 区から出土した木材の樹種同定

1. 試料

試料は、J・K-10・11 区の泥炭層下部から出土した自然木である。

2. 方法

カミソリを用いて試料の新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、生物顕微鏡によって 60 ～ 600 倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3. 結果

分析の結果、ブナ科のスダジイ（*Castanopsis sieboldii* Hatusima）と同定された。以下に同定根拠となった特徴を記し、各断面の顕微鏡写真を示す。

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

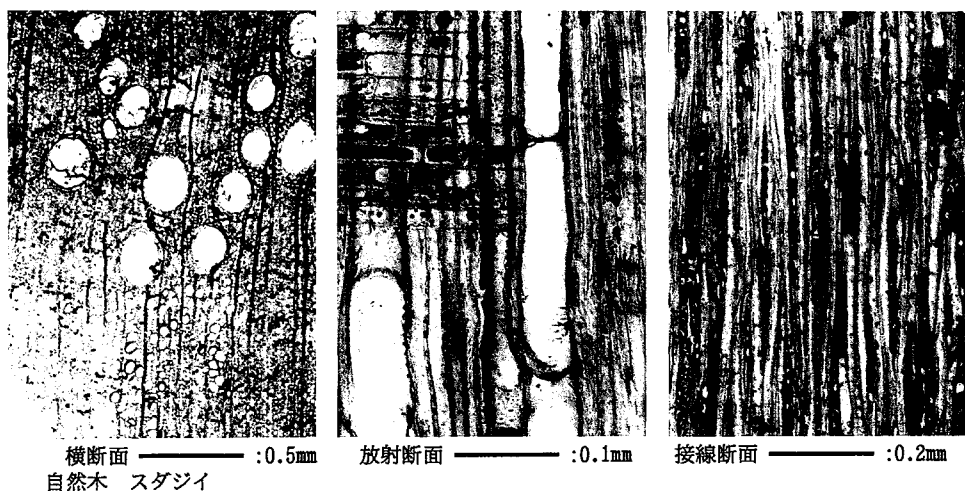
接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

4. 所見

スダジイは、本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する常緑の高木で、高さ 20 m、径 1.5 m に達する。材は耐朽、保存性やや低く、建築、器具などに用いられる。スダジイは、暖温帯常緑広葉樹林である照葉樹林の下部を形成する主要高木の一つであり、沿岸部に多い。また、照葉二次林要素でもある。

参考文献

佐伯浩・原田浩 (1985) 針葉樹材の細胞。木材の構造。文永堂出版, p.20-48.
佐伯浩・原田浩 (1985) 広葉樹材の細胞。木材の構造。文永堂出版, p.49-100.



PL. 31 郡元遺跡出土木材の顕微鏡写真

第2節 郡元団地 J・K-10・11 区における放射性炭素年代測定

1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	泥炭層下部	自然木 (スダジイ)	酸 - アルカリ - 酸洗浄 ベンゼン合成	β 線法

2. 測定結果

試料名	^{14}C 年代 (年 BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年 BP)	暦年代 交点 (1σ)	測定No. (Beta-)
No. 1	4140 \pm 70	-29.9	4070 \pm 70	BC2585 (BC2855 \sim 2820) (BC2665 \sim 2485)	114229

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (1950 年 AD) から何年前 (BP) かを計算した値。 ^{14}C の半減期は 5,568 年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C} / ^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより算出した年代 (西暦)。補正には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値を使用した。この補正は 10,000 年 BP より古い試料には適用できない。暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。 1σ は補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1σ 値が表記される場合もある。

第8章 まとめ

第1節 各層の時期

本調査では、基本土層として1～15層までを確認したが、このうち遺物包含層は1～11・13～15層である(Tab. 8 参照)。1層は盛土と旧校舎基礎部で攪乱されている部分が多く、各時期の遺物が含まれている。

2層以下は西から東へゆるく傾斜しており、西側上位の層は現代の削平を受けている。さらに、調査区南側半分は旧校舎の基礎部によって15層に達するまで削平されている部分が多く、それより上位の層は残っていない。したがって、2・3層は調査区北東部のみに残存する。これらの層には、古代土師器片や土器片も含まれているが、近世薩摩焼陶器片が包含されており、近世の耕作土層であると推定される。

4～7層は古代土師器片を中心とする遺物包含層である。上位の層と同じく調査区南西部は現代の削平のため残存していない。これらの層も調査区西半分は西から東にゆるやかに傾斜するが、東半分は比較的レベルに堆積している。灰色味を帯びた筋状の鉄分やマンガンを含む土層を基調としており、水田層であったと推定される。

8～10層は弥生時代の水田に関連する層である。9層上面で確認した溝状遺構やピットなど遺構の埋土は8層土に類似するものが多く、8層中から掘り込まれたものであると推定される。8～10層出土遺物は小片で出土量も少ないが、時期が判別できるものは弥生時代中期のものである。直下の11層からも弥生時代中期前半もしくは前期の土器片が出土しており、近い時期であろうと考えられる。

13層は泥炭層で、地山である16層が傾斜している調査区西側のみに堆積している。13層中に白砂層が認められ、低地にある泥炭層中のみに確認できることから河川氾濫による堆積と考えられる。13層では、下部から軽石製品と黒曜石片が出土している。遺物型式からは時期は判明できないが、層序から14層より新しいか同時期にあたるものと推定される。

14層はその上面で自然木が検出されており、樹種同定とともに放射性炭素年代測定も実施した(本書7章参照)。測定結果は4,140 ± 70BPとなり、BC2,855～2,820・BC2,665～2,485cal BC(1σ)という較正暦年代が得られた。およそ、縄文時代中期の春日式の年代と整合的である(小林2008, p. 664)。

第2節 縄文時代中期の様相

13層以下では縄文時代の遺物が多く出土したが、土器は縄文時代中期の春日式・深浦式土器が主体となり14層を中心に出土している。15層では曾畑式土器が1点出土し、それ以外の土器型式がないことから、15層は前期の層である可能性が高い。

14層から多く出土した春日式・深浦式それぞれの出土状況平面・側面図を示したのがFig. 31である。出土状況からは明確な平面分布の違いや上下関係は見出せなかったが、深浦式の方が若干下位から多く出土する傾向にある。土器の他に、14層中からは石鏃・石匙・磨石・スクレイパー状石器などが多く出土しているが、深浦式・春日式土器それぞれの型式に伴う石器を明確にすることはできなかった。

なお、石器の中には珧状耳飾りを転用した垂飾品が1点含まれる。扁平な作りで、片方の側面がほぼ直線であることから、こちらが珧状耳飾りの中央の切れ目にあたり、縦に長い長楕円形の珧状耳飾りを転用したと考えられる。南九州出土珧状耳飾りの中でも新しい段階のものである(廣田2003 上田・廣田2004)。

第3節 弥生時代の水田遺構

2～11層までは弥生時代・古代・近世の耕作土であるが、9・10層上面で検出した弥生時代中期の可能性が高い水田関連遺構は南九州でも数少ない遺構である。遺構としては、幅約50cmの浅い溝状の掘り込みからなる溝状遺構やピット群・小ピット群が確認された。

溝状遺構は基本的に北東―南西方向に走り、また少し位置がずれながら何度も掘削した結果、幅広い遺構として残ったもの(SD 2)もあり、水路もしくは畦を作る際の区画として掘られた溝である可能性がある。本調査区よ

り北側に弥生・古墳時代を中心に流れていたと考えられる河川跡やその河川内3か所から井堰や護岸用として利用された木杭列が確認されており、それらから水田へ水を引いていたものと考えられる。

ピット群についてはほとんどが足跡であると考えられるが、中には土壇状を呈しているものも認められた。これらの断面はほとんどが底面中央部が逆三角形状にへこんでおり（例えば P108・SK9 PL.19 参照）、鍬の打ち込みなど耕作痕である可能性も考えられる。

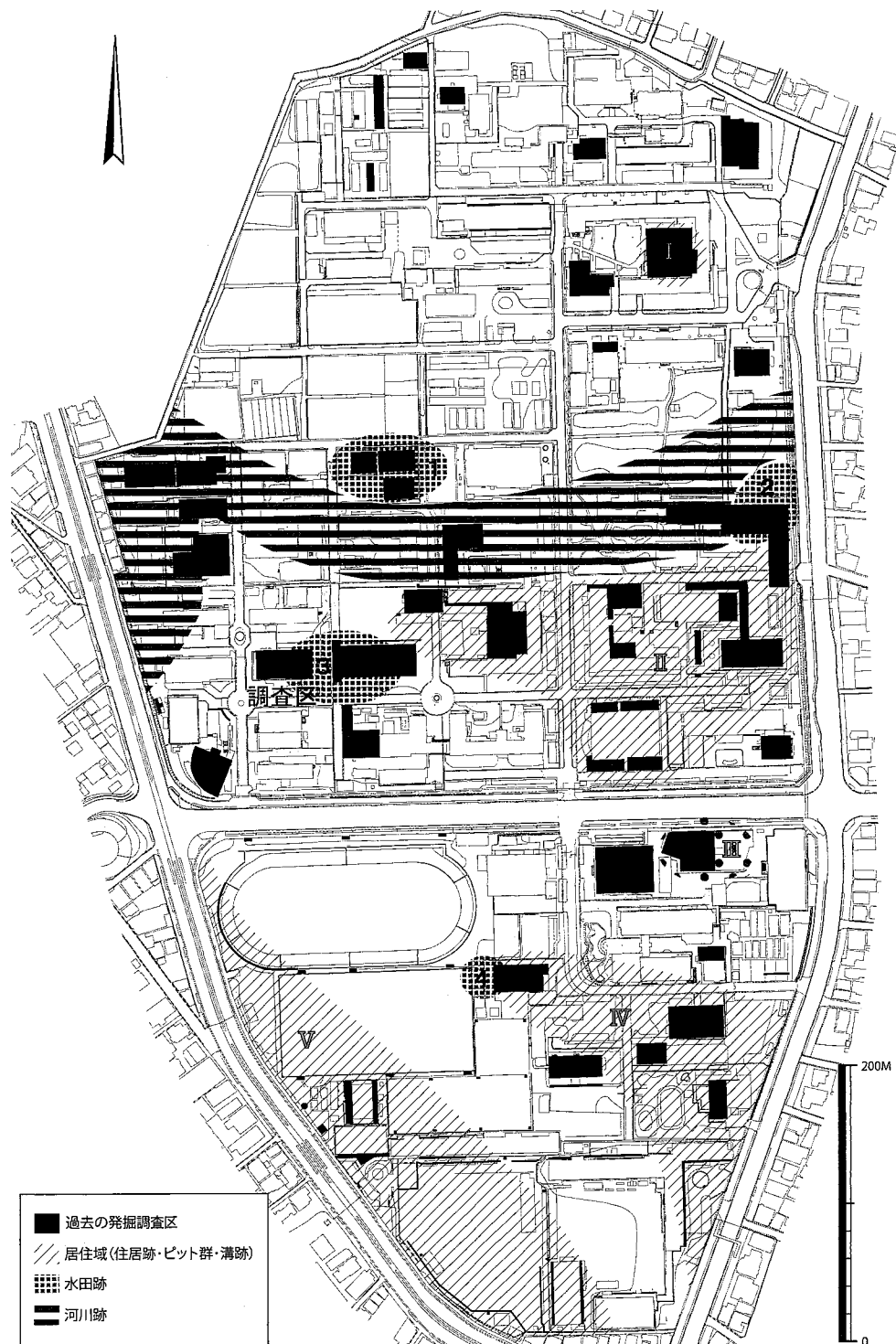


Fig. 39 鹿児島大学構内遺跡郡元団地内の弥生時代・古墳時代遺構配置状況 S=1/5000

足跡状遺構と小ピット群は密集していたが、明らかにそれらが分布していない範囲も帯状に確認された（PL. 17-4・5）。足跡状遺構はその土層の状態から、ぬかるんだ粘土層に裸足で踏み込んだ結果攪拌されたと考えられ、踏耕を行っていた痕跡である可能性も高い³⁾。密集した足跡が踏耕跡だと仮定すると、その範囲は水田内で、足跡が確認できなかった帯状部分は畦などの高まりがあった可能性がある。

水田関連遺構の時期は弥生時代中期である可能性が高いが、同時期の居住域としては本調査区の100m東側で確認されている。現在の理学部1号館を中心とする範囲だが、弥生時代中期前半期の直径80mの周溝状の大溝が検出されている。大溝以外の遺構は密集した古墳時代の竪穴建物跡によって削平され、ほとんど残っていないが、周辺からは弥生時代の遺物が多く出土する事からも、弥生時代から水田稲作農耕を営んでいた集落であったと推定される。

なお、本調査区より200m北西側に位置する河川跡から出土した石庖丁の中には、直背凸刃型や直背二辺刃型⁴⁾など弥生時代前期以前に遡る可能性のあるものが認められる（鹿児島大学埋蔵文化財調査センター 1998）⁵⁾。付近での水田稲作農耕の開始が弥生時代中期よりも遡る可能性を指摘しておきたい。

註

- 1) 河口貞徳 1969 「弥生時代」『鹿児島市史』I 鹿児島市史編纂委員会 pp.58-75
- 2) 鹿児島大学埋蔵文化財調査室 1986 『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報 I』
- 3) 藤原宏志先生ご教示による。
- 4) 石庖丁分類については斎藤（2002）による。
- 5) 武末純一先生のご教示による。

文献

- 上田耕・廣田晶子（2004）「南九州の初源期の玦状耳飾」『環日本海の玉文化の始源と展開』日本海学推進機構
 鹿児島大学埋蔵文化財調査センター（1998）『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』12
 小林達雄編（2008）『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
 斎野裕彦（2002）「農具－石庖丁・大型直縁刃石器・石鎌－」『考古資料大観』第9巻 小学館
 廣田晶子（2003）『永迫第2遺跡』宮崎県高岡町教育委員会

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 第11集

**鹿児島大学構内遺跡郡元団地
J・K－9・10区（工学部校舎）
発掘調査報告**

2015年3月発行

編集・発行 鹿児島大学埋蔵文化財調査センター
鹿児島市郡元一丁目21-24
